
恭介くんの数奇な生活

熊海苔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恭介くんの数奇な生活

【Nコード】

N0392L

【作者名】

熊海苔

【あらすじ】

高校に入って1週間後、主人公、峰治恭介みねじきょうすけの人生に転機が訪れる。ヤンキーとドSの使い魔、一国のお姫様、神様、妖狐、騎士、etc……って！多いわ！！しかも、体が女になってるし……魔王？いいヤツらしいから会っただけでいいんじゃない？てか、みんな頑張りすぎもつと気楽に行こうぜ？

主人公最強系？生暖かく見守ってください（笑）現在、第2章！舞台はもう一つの大陸へ！

*只今、文章の改装中【現在5話まで終了】

*元「世の中平和なのが一番いいと、今更思ふ」です。

プロローグ

はじめまして、みねじきようすけ峰治恭介といます。

身長は高い方、髪・目ともに黒、生粋の日本人。部活は剣道、英語はかなり苦手、まあ自己紹介をしたわけだが、聞いてほしい事がある。

昨日の夜、変な夢を見た。

？を掲げないでほしい、説明するからさ

まず女になっていた。そこ！ひくな！俺だって好きでなった訳じゃない！

まあいい。うんで、知らない少女が目の前にいて何かを言った。
『何かって何？』って思った君！いい事を聞いてくれたな。

そう喋った、じゃないんだ。口が動いただけ、言葉がつむがれた訳じゃない。ここ重要だからな。

少女が何かを言い終わった瞬間、目が覚めた。と、言う訳だ。

まあ、その日は気にせず学校に行ったんだが、その夢が気になって授業や、部活に身が入らなくて先生に怒られた。こっちの身になってほしいよ。まったく…

それも気にならないくらい考え込んでいたんだけどな。

結局何もわからなかったんだが…

今では、深くもって考え込んでいなかったことを後悔している。

まさか、あんな目に遭うことになるうとは、たかが高1の俺は知

る余地もなかった訳だからな。

というかあれを予想できたら、無事俺は人間を卒業してるよ。まあ、卒業しちゃったけどさ。

ブログ（後書き）

はじめまして熊海苔です。
初投稿です。

毎週土日に更新できればと思ってます。
感想待ってます。

1 話目 始まりは布団から

いつもど通りの部屋、いつもど通りの朝、いつもど通りの自分？
体によく解らない違和感をおぼえる。だがしかし朝だからか頭の
回転が遅い。

布団の上でボーっとすること約10分？20分くらいかな、経つ
て昨夜のことを思い出す。
思い出したくなかったけど……

先週から高校生になった。現在は慣れないながらも終わらせた予
習・復習のチエック&英語の宿題の掃討作戦中だ。む、これは……
やばいスペルが出てこない。

英語ぐらいがどうしたと言う人も居るだろう。だがしかし、自慢
にはならないが中1の2学期から1しか取ってないくらい悲惨なん
だ。単語覚えてねえし。

と言う訳で苦戦中、もういいやめんどくさい。明日、丸山にでも
見せてもらうさ。あいつ頭いいしな。それで寝ようと布団をめくつ
たんだがそこには丸まって寝ている少女が居た。否、幼女だ。

「……………は？」

まあ、間抜けな声を出した訳だが、許してもらいたい。

落ち着け俺、クールに！Coolに行こう。まずは現状把握だ。

ここは俺の部屋オーケー？そして俺のベッドオーケー？そこに見知
らぬ幼女オーケー？よし、把握した。この現場を誰かに見られれば
犯罪者のなかーま

……やべー…変な汗が止まらないんだけど

『んっ…あ、おはよう』

「お、おはよう」

俺の布団で寝ていた幼女にちゃんと受け答え、よしもつと冷静になれ。例え、相手がむちゃくちゃ可愛らしい幼女でもクールに行こう。

「誰？」

『あつ私？私は、神様だよ！』

神様…ねえ……黄色い救急車呼んだ方がいいか？自称神様

「それで？何の用だ？自称神様」

『むう、信じてないなあ、ホントだよ？私神様だもん』

「話が進まないんで、何の用か教えてから拗ねてなさい。電波ちゃん」

『電波ちゃん！？まあいいけど、突然だけど君には、異世界に行ってもらいます！』

…ちよつと待て。凄い事をさらりと言わなかったか？こいつ

それ、結構俺の人生関わっちゃってるよね。本人の意思確認なし？

「ちよつ、ちよつと待て！今か？今からなのか？」

『ん、明日でもいいよ』

「ならいいんだが、心の準備と言うものもあるしな。そもそも丸腰の人間を異世界へ？俺に死ねと言うのか？電波ちゃん」

『条件出してくれてもいいよ』

「条件か…能力的な事だよな？なら…」

俺はその条件を詳しく電波ちゃんに話した。条件は3つ、自分で身を守る武器、使い魔みたいなのを二体。一部屋くらいの大きさの異空間だ。

『なんだ、それだけか、ならこの私自らが今あげよう！特典付きだね。じゃっまた明日この時間にね、おやすみ』

そして、朝に戻るという訳だ。

いやはや、昨日の夢物語の続きか？鏡に女の子が映っているのだが……頬を抓ろうとすると鏡の女の子も全く同じ動き。また変な汗がダラダラと流れる。それはもう滝のように

こまつてるようだね、峰治くん？

「困ってるにきまつ……ふう、ついに幻聴が聞こえるようになったか。俺も末期だな」

私だよ！昨日の神様だよ！

「はあ…これは現実か…てめえ、アホこれのどこが特典だよ！おい」
アホは酷いな、アホは…でっ、どうかしたの？

「まったく、人の体を女にしないと、なんだその態度は？それと、学校はどうしろつつうんだよ」

それには理由があるんだよ。それ・と、そこにかかってるネツクレスの先の飾りについてる宝石見える？黒い宝石には、重力を操る漆黒の龍が入っていて、赤い宝石には炎を操る白虎がはいってるよ。くわしくは、本人たちに聞いてね。あと…もうひとつの宝石は、こっちでは男の子に戻れて、行った先では異空間を開くことが出来るよ

「…説明どうも、そろそろ、学校に行つていいか？学生服ねえけど」

別にいいよ、いつてらっしょい、あつ！今日はも・・・

俺は最後まで聞かずに家を飛び出した。色々と問題が起こったが…なんせ、男の時用の制服だ丈が合わねえの何のってお陰でぶかぶかだ。

（あれ？男に戻れねえ、どういうこった）

その後、電車には、無事乗れたがそのあとが大変だった。クラスでは男の”峰治恭介”が座るべき所に見たこともない女子が座つてりや、そりゃ騒ぐよな。それで真面目君が先生にチクリおつてお陰で呼び出された。あと、ナンパされた。あゝロリコンですね。分かります。

『おかえり〜面倒だったから、もう来たよ〜。色々考えなきゃいけないからね』

はい。人が悩んでるのにこの能天気な笑顔、世知辛いねえ

「はあ、何を考えなきゃなんのだ？」

『えっとね、君の名前と龍ちゃんと虎ちゃんの名前だね。ついでに二人とも呼んじやいなよ』

「二人？龍と虎のことか？」

『そうだよ』

「どうやって呼ぶんだ？」

『まだ、名前がないから宝石にキスして』

とりあえずキスしてみたら、そしたら宝石が光りだしてなんか出てきた。出てきたのは、真っ黒の龍（東洋の蛇みたいな方ね）と肩からファイヤーの虎、この炎熱くないな。安心安心

【やっと出れたぜ】

【そうね、主は私達を出すのが、遅すぎるわね】
『それで、どうする？二人の名前』

使い魔って喋るんすね、初耳だぞコレ

「じゃ、じゃあ、龍は夜の様に黒いからナハトってどうかかな？」

【おう、いい名前だからもらっとくぜ】

「白虎は……白だから無でゼロから、レイってどう？」

【安直な名前ね、でも、ありがとう】

『それじゃ、二人の名前も決まったことだし、君の名前をつけよう
』！』

「俺は、そのまま良いんじゃないか？」

『だめだよ！見た目は、女の子なんだから名前もぱくしなきゃ！』

そついうもんですかね、自分で考えるのが面倒なんだが

「じゃあ、電波ちゃんの名前も教えるよ」

『うつ、えーとね。実は私には名前がないの』

まあ、神だもんな、そんな個人名持つてる方がおかしいか…あれ？
じゃあ、ギリシヤ神話とかの神の名前って何さね？でも毎回毎回、
電波ちゃんって呼ぶのもメンドイしなんか名前つけてやるか。コイツ
の場合、神は神でも女神？だもんな。

うーん、女神だから、文字ってメグ。うん、メグっていいんじゃないか

「おいっ電波ちゃん、名前さ、メグでどうだ？安直だけど」
『えっ？どうしたのいきなり』

「いや、一人だけ仲間外れはどうかと思ってさ」
『ううう、恭介え』

おおう、なぜ泣きつく!? 俺は良かれと思ってだなあ……って、
レイの野郎! 野郎じゃないけど、何笑ってやがる

(まったく、主もダメね)

と、恭介の好感度が少し上がっていた。
ひとしきり泣いたところで

『ぐずつ、もう大丈夫』

「ならいいんだけどさ…」

『じゃあ、恭介の名前を決めよう、恭介は何がいい?』

「ん? 俺は、みんなに任せるよ」

【刹那!】

「いや、それ男だからな」

【秋穂なんて、どうかしら】

「いいんじゃないか」

『えつとね、沙耶とか、あえて一文字で秋とかなんてどうかな?』

「おっ良いね。それじゃ、多数決で決めようか」

結果を言うと

刹那 1

秋穂 1

沙耶 0

秋 2

峰治秋と、名前を改めることになった。呼ばれて反応出来るか不安だ。そして旅? 支度、主に格好
なぜかは知らないが、クローゼットの中に女物の服が入っていた。

どうせ、メグが入れといたんだろと納得しつつ、女二人？にそれに着換えると言われ着替える羽目に、男として大切なものが…

動きやすい格好の方がいいと思い、Gパンに白のTシャツ、黒のロングコートと同色の手袋、

あとなぜかあった黒のロングブーツという格好だ。

必要なものは部屋に置いとけと言われたのでパソコンとかを部屋に持っていき準備OK

『準備は、いい？』

「たぶん大丈夫」

『異空間は、この部屋だから、私はだいたいココにいるよ。がんばってね』

そして、俺達は異世界へと旅立った。

1 話目 始まりは布団から（後書き）

どうも熊海苔です

連続で更新です。

明日も更新すると思います

2 話目 雪山と変態（前書き）

駄文ですがよろしくです

2 話目 雪山と変態

目が覚めると、そこは山でした。しかもエベレスト級で頂上付近頂上へアタックする気はさらっさらないんですけど

「寒い！凍える！凍死する！マジで死ぬ！」

【少しは黙りなさい！】

ゴスッ！

おもつきしどつかれた。い、痛い…ホント後頭部だけはやめてほしい、気絶するから

ここで気絶したら死刑宣告ですぜ？レイの姐さん

「殴るこたあないだろ！殴ることは！」

そこで、ふと違和感に気がついた。うむ、邪魔じゃなかった髪が邪魔だ。視界が遮られる。

「髪、黒に戻ってるじゃん」

魔力の量がすごかったから、封じ込めたらそうなったんだ

聞いてないのにご説明どーも。とりあえず避暑地ならぬ避寒地を教えてください。寒い

寒いなら、部屋の中に入ればいいじゃんか

「それを早く言えよ！」

【早く入るうぜ、秋】

「……………」

【秋？どうかした？】

「んあ？ああ、俺のことか…」

さすがにまだこの呼ばれ方は慣れない。だがしかし慣れないと今後大変そうだから何とかしないといけないな。女になったって改めて実感するわ。

「んじゃ、開くな」

なんとな〜く扉的なものをイメージしてみたら目の前にでっけー扉が出てきた。部屋のドアと比率合わないけどいいのか？これ

「じゃ、入るぞ〜」

【作戦会議としましょう】

【なんでもいいから、早く入ろうぜ】

いざ異世界の空間へ、自分の部屋だけどな…

『おかえり〜、話は聞いてたよ作戦会議をさっそく始めよう』

「なんで聞いてんだよ！俺はなんも会議について、教えてないのに！」

『秋ちゃんが聞いていることは、私に筒抜けだからだよ』

俺のプライバシーはどうなるんだよ。そうですね。神様ですもんね。

【まあ…過ぎたことだから、落ち着いて？秋】

「フツ〜……まあいいだろう、その代りこれから勝手に聞き耳立てるなよ？」

『わ、わかったから睨まないで、ね？』

とりあえず、作戦会議開始

ナハトの発言が使えないのは言わずもがな。

「えーと、話を整理するとまず、山をどうにかして速攻で下山し、街を探して情報収集をする。そのあとに、また作戦会議をするという方向性でいくってことでいいな？」

『はい、一つ言っておくことがあるよ。秋ちゃんには魔力のリミッターを掛けてあるんだけどリミッター解除の限界は6分、それ以上解除し続けるとどうなるかは、私もわかんないから気をつけてね』

リミッターは、出来れば外したくないな………どうなるかわかんないのは怖いし

そもそも、どうやって下山しようかね。ダッシュ？あい・きやん・ふらい？

「魔力でどうにか下山できないか？メグ」

『どうにかって……うーん、秋ちゃんが魔力をコントロールできれば、簡単に下りられるんだけど……』

「どういうこと？山から飛ぶとか？やっぱ、あい・きやん・ふらい？」

『あい・きやん・ふらい？どっちかと言うと瞬間移動？みたいな感じ』

瞬間移動か……いいね。それ、やっとらしくなってきたな！

「行くぞ！ナハト、レイ」

【ほら、そう急がないでもっと着込みなさいって】

「おお、サンキュッて、二人って人みたいになれるのかよ！？」

【言ってなかったか？まあそれはいいとして、このジャケットがっこいいだろ？】

まあ、二人とも今は人になってて、レイはスタイルのいい美人さん今の俺より背が高い……ナハトは、ガラの悪い兄ちゃんだ。美女と野獣コンビ

「ああ、かつこいい、かつこいい。それでネックレスに戻れるのか？」

【もちろん、それは大丈夫よ】

『そうそう、気にしなくてもいいんだよ？秋ちゃん』

「そうか……なら、ちよつとの間戻つといてくれないか？」

【あいよ、失敗するなよ？】

わかってらー、失敗してたまるかい！

「うんで、メグどうすればいい？」

『頭の中で麓に到着するイメージすればいいよ』

「オツケー、んじゃやってみるから、部屋閉じるよ」

えーと、麓にいるイメージでつと

.....

おっ、温度が上がったな

「目の前は森かよ……メグどこに向かえばいい？」

森を突き進めばいいよ

「面倒なんだが……」

とりあえず言われたとおり、森を突っ切ってみようとしてみたんだが、なんか、変な生き物が目の前にいます。第1村人発見ですね。

わかります。

頭が猪で体大きいトカゲ、かなり見た目がいまいちですな。

（メグ、武器がないぞ。どうすればいい！？）

武器をイメージして！

イメージばっか面倒だなあ。イメージねえ…ええと、日本刀を二本イメージしてつと、ズシッと手の中に重みを感じた。日本刀！じやぱに〜ずデ〜ス。

「よし！イクぞ、変なヤツ！」

技は色々使えると思うからやってみてね

「わかった！」

握っている刀を二本ともをすり抜ける時にすばやく振った。詳しく言うと右で切り上げて、左を横へー線。そして切り下げ真っ二つ。命を奪う感覚が切っ先から、伝わってくる。おゝ気持ち悪い
後ろを振り向くと、丸太切りになった魔物がいた。

「またつまらぬ物を切ってしまった…」

それ怪盗の仲間の人のセリフ！

「気にすんな。そして変なのすまなかった」

【そして、いただきます】

「ナハト、お前食う気かよ」

いまさらだが、吐き気がするやばい。

「うつ」

【ちよっと、秋！大丈夫！？】

酸っぱいものがこみ上げてきた。

「ごほつごほ、すまないな……」

【おいっ！それよりも秋、ヤバイことになってるぜ！】

はい？どういうこと……って兵士の皆さんらしき人達が囲んできて
るよ！正規兵だな。こりゃ

すると、包囲の一部が解かれ、厳ついおっさんが中から出てきた。
わっ、表情が険しい。

（メグ！このおっさん怖いぞ）

それには、同感だよ。秋ちゃん

こちらのことを知らずか怪訝な顔をするおっさん。けれども厳つ
い、迫力満点

「貴様、なに「すいませんでした！」……」

「隊長：この子かなり怖がってますよ」

「う、うむ、そのようだな」

「君、一体何者だ？」

「ひ、ひゃい！」

「あのね君、名前はなんて言うの？」

「峰治 秋っていいいます……」

助かった、柔和な感じの人がいなかったらなんも喋れなかったぜ。
なんせ、このゴ……ゲフンゲフンの迫力がスゲーから

「私は、ヴォルドという。それでミネジ、アルペンをどうやって
倒した？」

「えっと、切っただけですけど……アルペンタってあれですか？」

「ミネジはアルペンタを知らずに倒したの？」

「はい、それと秋でいいです。ヴォルドさん、倒したらまずかったですでしょうか？」

身を守っただけだけでも、駄目だったか？守り神的な？それだったら俺の立場が悲惨なんだがな。

「いや、別にいいんだが、一人でやったのか？ふむ……」

「隊長、とりあえず彼女の身元がわからないので、連れて行きましよう」

「そうだな。アキ、我々といっしょに来てもらえないか？」

（メグ、街に行けるようだが行つていいか？）

この人見た目は怖いけど、いい人だから大丈夫だと思うよ

「いいですけど……どこへ向かうんですか？」

「この国、ウッドノースの城へだ」

ヴォルドサイド

部下から森の深く山の麓付近から上級の魔物、おそらくアルペンタの魔力と正体不明の魔力を感知したとの報告が入った。もしも正体不明のものが見習のハンターだったら一大事だ。

「みんな！馬車を急がせろ、麓へ向かうぞ！」

到着すると、騎士達を啞然とさせる光景が広がっていた。

吐いているいる少女と背中をさする女、それはいい、なぜアルペンタが輪切りになっている。

騎士たち10人がかりでやっと討伐できる魔物が、ああも簡単に

倒されていることがわからない。ふと、我々に気がついた女が消えた、仲間たちがざわめいている。驚くはずだ。消えたのだから、私が私は精霊を見たことがある。恐らく精霊か何かだろう。

「全員落ち着け！ヤツを包囲するぞ」

私の一喝で騎士たちが我に返り包囲を開始し始める。ここは訓練の行き届いた動きだ。囲まれた少女は驚いているようだ。いきなり囲まれるのだから無理はないか。

しかし、なにかと話すように空中を見ていたから不思議に思いながらも名を聞くことにした。

「貴様、なに「ごめんなさい！」…」

名前を聞く前に思いつきり謝られてしまった。ぬう、私がかしたか？

「隊長：この子かなり怖がってますよ」

副隊長のセトラに言われてしまった、そんなに怖い顔をしているのだろうか私は

「う、うむ、そのようだな」

「君、一体何者だ？」

「ひ、ひゃい！」

完璧に怯えられてしまった。少女はすでに涙目である、悪いことをしていないのに罪悪感がひしひしとくる。罪悪感に打ちひしがれている私の代わりにセトラが聞いてくれた。すまんな、セトラ

「あのね君、名前はなんて言うの？」

「ミネジ アキっていいいます…」

セトラの質問には答えて、私の質問には答えてくれないのか…と
りあえずミネジと名乗った少女

を怖がらせないように話しかけてみる。この状況を説明して欲しい
それだけだ。

「私は、ヴォルドという。それでミネジ、アルペンをどうやって
倒した？」

「えっと、切っただけですけど…アルペンってあれですか？」

アルペンを知らずに倒したというのか？ミネジは

「ミネジはアルペンを知らずに倒したの？」

私の動揺を知ってか同じく動揺気味のセトラが聞いた。

「はい、それと秋でいいです。ヴォルドさん、倒したらまずかった
でしょうか？」

我々の動揺している姿から神などのように崇めていると、思った
ようだ。

「いや、別にいいんだが、一人でやったのか？ふむ…」

「隊長、とりあえず彼女の身元がわからないので、連れて行きまし
よう」

敵対している訳ではないようだ。そうだな…王に本人を連れて報

告したほうが良いな。

「そうだな。アキ、我々といっしょに来てもらえないか？」

アキは、少し考え込んでから首を縦に振った

「いいですけど…どこへ向かうんですか？」

「この国、ウッドノースの城へだ」

と、言う訳で馬車の中だ。森を爆走中というおまけ付きの。回りは、緊張の面持ちの騎士団のみなさんです。ぎゅうぎゅう詰めだ。人の熱気で熱い。

「あのー、出来れば名前を教えてください…」

「ああ、そういえば自己紹介まだだったね」

俺のすぐ隣にいた柔和な感じの男から名乗り始めた。こやつ、絶対軽い男だ！

「僕は、セトラ・テスラこの騎士団の副隊長だ」

次にその隣の目と髪が茶色の女性騎士。うむ、美人さん

「私は、ナーシャ・アंकです」

その隣から順に一気に名乗ってきた。

「俺は、ニード・ダーテス」

「僕は、アスク・セード」

「よ、よろしく」

ニードとアスクの勢いが若干怖い…それと今気がついたがこの世界に来て重度の怖がりになってしまったらしい。困ったもんだ。

「それで、質問なんですけど城に行つてどうするんですか？」

「ああ、姫様に会ってもらう。それとアキ、君はどこから来たんだ？」

まあ、答えにくい質問を…まあ、正直に話すのが一番楽なんだが、日本なんてわかんないだろうからな…異世界から来ました。なんて論外だし

うゝむ。

（メグ、ナハト、レイ、なんて答えればいいと思う？）

【素直に言うのが一番だろ】

馬鹿なの？死ぬの？

適当に誤魔化しちゃえば？

（また、あの目で睨まれたい？）

……

【目が覚めたら…的な感じでどう？】

（どうといわれても…）

三人とも適当だな！おい！？

「えっと……ですね。その、自分でもわかんないんですよ」

「自分でもわからないとは、どうということなんだ？」

なんて説明しよう、理由が思い浮かばない。異世界に到着して、わずか1時間半にして絶体絶命のピンチ！！自分の使えない脳みそが、苛立たしい！マジで助けて、レイ！ヘルプミ！

【はーそうねえナハトじゃないけど、この際本当のこと言ったほうが楽よ】

やはり、その結論にたどり着いてしまうか

「本当のことを言うんですね。異世界から来ました。マジっスよ！？」

「そう必死になるな、我々だって信じることの出来ない域の話だがアキの髪と目の色を見た時からなんとなく、そんな感じがしていたのは事実だ」

ひどい、ひどいぞ！初対面の人で遊ぶなんて！

絶対赤くなってるぞ俺の顔！真赤だぞ！恥ずかしすぎて涙まで、出てきちゃったよ！最悪だ、こんな醜態をさらす事になるなんてなあれか？サディスティックな人か？

「なっ」

「やばい、い、いや負けるものか」

「か、かわいい」

「ぐはあ！」

「ま、負けるな、僕の理性！」

うう、まだ恥ずかしいな、でもそろそろ復活しないと迷惑かけるかな

ポジティブシンキングだ！ポジティブになろう。涙は治まってない

し、顔赤いけれども

「ほ、本当すまなかった。さすがに悪いと思っっている…だから泣かないでくれ」

「本当にもうしない？」

秋の上目遣い！

ヴォルドの良心に68ダメージ！

セトラ良心に120ダメージ！

ナーシャの理性に580ダメージ！襲いそうになった！

ニーダの悪戯心が97回復！

アスクの理性に137ダメージ！抱きつきそうになったが思いとどまった

みんなが、ぜえぜえ言ってるけどさオーケー？…というか5人以外鼻血を出してぶっ倒れてる！

「あ、あの、大丈夫？」

「もー我慢できない！」

「へ？」

「アキちゃんかわいすぎ！もー最高！」

いきなり、ナーシャさんに抱きつかれました。苦しいですナーシャさん

そして、背中に当たっている膨らみがスゲー気になります！

「ちよつ、ナーシャさん！いきなりどうしたんですか！」

「だって、アキちゃんがかawaiiすぎるんだもの」

「はーなーせー、ああもあ、アスクさん！頭撫でないでください！ヴォルドさんも、助けてくださいよ」

「すまんアキ、今お前を見たら私も堕ちてしまう」

ちよっ、何に堕ちるんですか！？それより三人とも！スクランブル！エマージェンシー！

助けて！

《ごめん、私にはムリ》

【同じく俺には手に負えん】

最後の頼みの綱だ

（レイ！たす【弄られる秋ちゃんもいいわね】レイさん！？）

最後の砦は脆くも散っていきました…レイさんあなたはSだったんですね。

「は、離してえ〜くれ〜、苦しい！」

「やよ、離さない、誰が離すものですか。可愛いものを愛するのは万国共通よ」

「ほ、本当にはなし ひやっ、ど、どこ触ってるんですか！ちよっ…やめ…ひゃうん…お、んっ…

怒ります…よ！」

「まだまだ、これからよ」

「にゃあああああああああああああああああ！！」

「はあはあ」

「ぜえぜえ」

二人揃って荒い息を吐いているが、意味が違う、俺は、羞恥心やらなんやらでぜえぜえ言ってる訳だが、ナーシャは笑っているからだ。あれか？ナーシャはレ か？そうなのか？ならば、今後気を付けなければならぬ

貞操の危機なんだからな。それに、ナーシャに絡まれたり、顔が真っ赤な時は、誰も助けしてくれないから、要注意だな。

「アキ、城にそろそろ着くから降りる準備をしておけ」
「わかりました」

道中色々あったが、とりあえず城に到着だ誰に会わせられるんだろね？

3 話目 恭介くんの受難

とまあ、お城の中です。はい

半強制的な感じで連れてこられました。自分でも了承はしたんけどね馬車の中の出来事のせいで

若干後悔してるから、他人のせいにしてる訳だ。決して現実逃避ではない、決して

【現実逃避は、してたんだしょ？アキ】
(はい、しました。スンマセン)

レイには、ばれたようだった。ふっ流石だなレイ…っと、騎士団のヤツらのことを忘れてた

「どうした？アキ、そんな所でぼーっとして」

「いえ、お城の大きさにビックリしてて」

「へー、アキは城は見たことなかったのか、意外だな」

親切に声をかけてくれるヴォルドとは正反対にニヤついて言うてくるセトラ

ヴォルドに対する好感度アップだな。

「わるかったな、見たことなくて！」

「いや、ごめんごめん、ついからかいたくなつてさ」

「むう」

雷が落ちたように全員の動きが止まった
い、いやな予感が…マジで逃げよう

「そ、それじゃあ先に行くんで…」

「……………かつ」

「か？」

「「かわいい」」

「またそれかー！」

逃げようとしたら、目の前にナーシャが立ちはだかつてきた。しかも顔が笑っている。でも、こっちは笑えない。

「ナ、ナーシャさん？落ち着いて、ね？落ち着いてください」

「ふふふ、逃がさないわよ？」

「だあー、もうやるっきゃない！」

（メグ！チートでもなんでもいい、この場をどうにか乗り切りたい！なんか力を寄せよ！）

《といつても、そんな大安売りみたいに渡すことは出来ないんだけど》

（じゃあ、自分でなんとかするよ）

そうだ、なんか武器を考えてそれで、ナーシャを気絶させればいいんじゃない！近距離は、危険だから遠距離だな。やっぱし、銃かな！弾は魔力で作ればいいし

よし！決定！

すると、手の平の中にズシリと重たい物が出てきた、白いハンドガンだ。

なぜハンドガン？と疑問を持つてる人！それはゾンビを倒す某ゲームの主人公のヘッドショットからの回し蹴りに憧れたからですよ。ゆえにハンドガンの名前は、ホワイトテールなんです。はい。

「ごめんねナーシャさん、ちよつとの間眠ってて」

「え？」

さすがに、撃つのは気がひけたのでグリップで頭をぶっておきましたよ。

それでも大人か！自制心を持って自制心を

「みなさん、お気を確かにしてください、というか早くお城に入りましょうよ」

「む、そうだな。取り乱してすまなかった」

「中が気になるんですよ。だから早くしてください」

そうなのだ、セトラの言ったことは本当な訳だムカツクことに、お城に入ったことあるわけないじゃん。
というわけで、レッツゴーお城の中

えゝただいまお城の一室に待機しております。王様と王妃は、留守で姫だけが残っており謁見の間に移動中なので、しばらく待てることだそうです。

そして、部屋が派手すぎて落ち着きません！

レイ、ナハト、メグ、全員集合しております。非常にうるさいですな4人集まると

『派手…だね』

【派手だな】

【派手ね】

「落ち着かないのは確かだが、みんなで言うことじゃないだろう」

『ここで言うのもなんだけど銃に名前をつけるなら刀にもつけるべきなんじゃないかな？』

「さいですか」

『そうなんです』

「うんじゃ、右が龍殺し、左が双虎で、決定！」

【俺に何か恨みでもあるのか！？】

「うん、主に使えない頭にね」

【くそおおおおお】

よし、会話の邪魔をするやつが撃沈したから話が進むだろう。脱線しなければな…

「よし、第2回作戦会議」

【それで、何について話し合うの？】

「これからについてと、この世界のこと」

『アバウトだね、まあいいか世界については私が、流し込んどくよ』

は？流し込む？何を、知識を？でも、そんな膨大な量の情報を人の脳みそが処理しきれないじゃないか。所詮、人の頭だ容量にも限界がある。昔、ある科学者が人に無理矢理、膨大な量の情報を脳に流し込んで廃人にしたと聞いたことがある。

それを、俺にするのか？

「メグは、俺がどうなってもいいのか？」

俺の以外な言葉に困惑するメグ

『いきなりどうしたの？あ……恭介』

「人間がそんな膨大な量の情報を一気に処理出来るわけがないからだ」

『恭介は、自分がどんな事になってるかわかってる？そもそも、この世界には人間なんて種族は存在しない。それにこの世界の人の脳

の容量と君の容量は、うんぜんの差があるの。だからあなたが壊れることはないから安心して、ね？」

くそっ…こんな時だけ大人びた表情で言いやがって、いつもは無邪気に笑ってたり、泣いたり、怒ってたりしてただけなのに、こういう時だけ真剣な顔をする。ずるいじゃないか…

「なんで、こういう時だけ大人ぶるんだよ…」

『その方が恭介が安心すると思ったから、かな？』

「まあ、ありがとな気を使ってくれて」

【それで、秋、落ち着いた？】

「ああ、すまんな取り乱したりして」

『それで、どうするのこれから』

「とりあえず、姫に会う、その後に流し込んでもらう。あとは、気ままに行こうと思う」

【らしいっちゃ、らしいわね】

『じゃあ、用意しとくね、がんばれ秋ちゃん！』

その時、ドアがノックされた。

「アキ殿、そろそろ来てください」

「あ、はい、わかりました。すぐ用意します」

さあ、姫に会っただけど、どんな人かな？じゃじゃ馬じゃなきゃいいか。

3話目 恭介くんの受難（後書き）

おはこんにちはんは熊海苔です。 3話目の投稿なのですが少しシリ阿斯になってしまいました。 次回は元の雰囲気に戻ると思います。 姫が出てきて話が4、5歩前に進むはず

4話目 世界の事とお姫様

はい、どうも秋です。季節じゃないよ。

今、謁見の間に移動中です。なんだか廊下が無駄に長いのは、気のせいだろうか。

うん、気のせいだ　そこ！ツツコまない！

「そろそろ、到着しますので」

「あのー、私、王族にたいする礼儀作法なんて知らないんですけど……」

「姫様は、そのことは気にしないからと言っておりました」

姫様、あなたはエスパーですか？なんで先読みができるんですか？すごいなー王族

「着きました。どうぞ中へ」

謁見の間スゲーな広いな、そして姫までの距離遠いな、まだ歩かなきゃなんのか…気が滅入る。

「アキさん、こちらへ来てください」

「あつ、はい」

まさか、さん付けで呼ばれるとは！

とりあえず、近くへ行くと姫の容姿がわかった、17歳くらいで天然物の金髪に赤の目、身長は俺とレイの間くらいはつきり言ってかなりきれいだ。

「あなたが、アキさんなんですネ。私は、ミーナ・テス・ウラガー

「この国の王女です」

「はじめまして、峰治秋です。王女様、私にどのような用事が？」

「どうぞ、ミーナと呼んでください。アルペンを一人で倒したと聞いて、依頼があるのです」

「依頼ですか？いったいどのような内容なんですか？ミーナさん」

「依頼内容については、後ほど私の部屋でお話します。すぐに行きますか？」

「少し用事があるので一度あの部屋に戻ってから伺います」

「わかりました。では、後ほど」

とりあえず、情報が必要から部屋に撤収！頼みますよ、執事さん
(仮)

「部屋に着きました。姫様のお部屋に行きたい時は部屋に備え付けの、ベルを鳴らしてください」

「わかりました、ありがとうございます」

お礼の意味でニコツと笑っておく。せめてものお礼なわけですよ。うんで、落ち着かない部屋に再び入ります。何回みても派手だな

「ただいま、メグ、流し込むのよろしく」

『準備はOKだよ』

メグは、俺の頭に手を当てた。すると、膨大な量の情報が流れ込んできて視界を光が覆った。

.....

え、情報を整理しよう

まず、種族とその容姿についてと魔力について

属性は、火、水、土、風、光・闇、無、この6つがこの世界には、存在する

種族は、無を抜いた5つからなる。容姿については、火から順に赤、青、茶、緑、金

他に魔王が居るらしく、魔王は漆黒らしい国は、

森と農業の国ウッドノース

鉱山と工業の国レアル

草原と牧畜の国ユーランド

砂漠と宝石の国サンゴールド

武術の国トウハ

それぞれの国は特産品の貿易で上手くやっているらしい。

それで、ここでは魔法が使えるが、それぞれの精霊から力を貸してもらおう。

火の精霊サラマンドー

水の精霊ウンディーネ

風の精霊シルフ（シルフィードとも呼ばれている）

土の精霊ノーム

この四精霊に力借りて魔法を行使する、精霊に力を借りないのが無と光闇で

光闇は、王族と魔王しか使えなく、無は誰でも魔力があれば使える。

これが、情報を整理した結果である。

「これ意外と気持ち悪くなるな」

『まあ、英単語三年分だからね』

「あゝ、聞こえない聞こえない。英語なんて聞こえない」

【すごい拒否反応ねゝ、伊達に三年間1じゃなかった訳ね】

『ちよっ、秋ちゃん！落ち着いて、人が来ちゃうから！』

「はっ！俺は、一体何を？」

何か聞いちゃいけない単語を聞いた気がする。分かんないなら知らない方がいいよな、うん
はい、そこ！ひかない！

【メグちゃん、秋がリアルエスケープしてるわよ】

『そうだね、あんな姿見たのが初めてだよ。なんか上の空な感じだね』

「そうそう、今からミーナの部屋に、依頼の内容聞きに行ってくるから」

【『ミーナって誰？』】

「あつそうか、ここの姫の名前だよ」

『なんかいきなり仲良くなってるない？』

【あら、秋は姫攻略フラグ立てたの？】

話が完璧に脱線してるよ。しすぎだよ、脱線してから車両が切り離されてる勢だよ。

何？例えばが微妙？気にしたらダメだよ、白髪が増えるよ

「話が脱線してるぞ二人共、てかキリがないから行くぞ」

『え？もう行くの？』

「どこからか執事さんが早くしろと殺気を送ってきてるんだよ」

【いつてらっしゃい】

ちりん、ベルが耳に心地よい音を出した

「お呼びでしょうか？」

早過ぎだろ執事さん、ベルを鳴らして約1秒で来たぞ。世界陸上で金とれるぞぶっちぎりで

「今から姫様の部屋へ行きたいのですが、いいでしょうか？」
「わかりました。では、こちらへ」

と言う訳でミーナの部屋に行きます。

このときは、まだあんな大変な依頼を頼まれるなんて思いもしなかった…

4話目 世界の事とお姫様（後書き）

どうも、熊海苔です。

もうすぐテストがあるので更新が遅れることになると思います

まあ、もうすぐと言ってもゴールデンウィーク明けなんですけどね

5 話目 我儘王女と執事さんと依頼内容（前書き）

連日投稿してますが書き貯め分がそろそろなくなるのでペース落ちます

5 話目 我儘王女と執事さんと依頼内容

は？

あ、いえ、どうも秋です。いや、日本経済が気になるね、デフレはいつまで続くのやら……はい、現実逃避じゃないよ。問題を直視出来ないだけだから。

あつ、それが現実逃避か！アハハハハ……はは……はあ……

「えーと、今なんと仰いましたか？ミーナさん」

「はい、だから魔王を倒してください。そして、その旅に私をお供させてください」

「魔王ですか？あのゴゴゴゴゴ！てヤツですか？」

「ゴゴゴゴゴって言うかは、知りませんが、たぶんその魔王です。私がかくつついて行く事は、ツッコまないんですか？」

「ツッコみたいのは、山々ですが魔王が先です。強いんですか魔王」
「強いですよ。魔王ですもの」

そうですね、魔王って呼ばれてるくらいですもんね
それを、俺に倒せと？さすがに二人じゃ難しいんじゃない……

「二人だけでですか？それはさすがに無理なんじゃ」

「途中で仲間を増やせばいいじゃない？」

「口調が砕けてきましたね」

「だって、あなたが早く決めてくれないんだもの」

若干イラだつてらっしゃるのは、気のせいだよな？

「あつ、拒否権はありませんよ 拒否したら権力とか色々使いますから」

「そもそも、そんな危険がある事に姫様がくつついて来ていいんですか？」

「私がなんて呼ばれてるか知らないの？」

「……知るわけねえだろ。おい」

「？ なにか言いました？」

「いいえ？空耳じゃないですか？それでなんて呼ばれているんです？」

「ふふん、金色の戦姫！」

この子バカだわ。厨二病患者さんだわ。つつてもなあ、魔王が俺に倒せるなんて保障ないだろうし……ナハトとレイは戦力として考えれるし、メグも一応神様なんだから戦闘能力もあるだろうし、うゝん……メグに護衛してもらって俺とナハト、レイでいけば大丈夫か？いやしかしなあ、魔王ねえ……マンガとかゲームみたいに村とか襲わせてるんだろうか？それなら誰かがやらなきゃダメだろうけど、俺が出来るか？否、やるつつたら完遂しなきゃならんだろうし、いくらチートじみた力があるとは言え俺自身に実戦経験ないわけだからあのアルペンタとか言うのの時とは状況が変わるだろうなあ

「金色の戦姫って……ん？戦？」

「そう、過去に一回だけ許してもらって戦に参戦したの。その時の功績で金色の戦姫って呼ばれるようになったの」

この人だけで良いんじゃないかと俺は思っただが？ふむ……けど、人が傷つくのも嫌だしなあ。腹括るしかないか……

「わかりましたよ、行けばいいんでしょう？行けば！」

「物分かりのいい子はお姉さん好きだよ」

……もしかして、この世界には変な人が多いのでは？そんな疑問が

頭に浮かんだ。

いやまさかな、常識人が大半を占めているはずだ。たぶん…

「用意はしておいてね。出発は明日の朝だから」

「ミーナさん？ キャラ変わってませんか？」

「ああ、これが素だからいいのよ。あの役は疲れるから嫌なの」

「はあ、それじゃ部屋に戻るんで失礼します」

「また後でね」

厄介な人が旅のお供ってどうなるんだ？ まったく
ん？…また後でね？

「ただいま、疲れたから寝るな」

『どうなったか報告してから寝てよ』

【俺には、全部一から教える！】

「わかったよ、まず依頼は受けることにした」

【それで、依頼の内容は何なの？】

「魔王の討伐、それでミーナも同行することになった」

『ミーナ王女を連れていくのは、結構やばいんじゃない？』

「自分で言ってたんだからいいんじゃない？」

【でも、王様とかに本人が許可を貰ってなかったら…】

その場合は、かなりヤバイぞ主に俺達が。だって無断で姫を連れ出したことになるのだからな。

犯罪者にはなりたくないからあとで、確認をとっておこう脅して
でも。

「あの、アキ？入ってもいい？」

『……噂をすればなんとやら、だよな？』

「間違っではないと思うぞ」

三度目の現実逃避です。ホントやってられないよね、こんな面倒なこと

「返事がないから入るね」

「えっ、ちよま……て」

『ど、どうも』

「アキ、この子だれ？」

「え〜と、妹？」

「ふ〜ん、なんで疑問符がつくの？」

ミーナがジト目でこっち見てるけど。嘘なのは本当だから、こっち二人は沈黙

短い時間だが部屋の中を静寂が満たす。

「そ、それで、なんでミーナがここに？」

「つまらないから遊びに来たの」

「お…私に何をしろと？」

「でも、寝るみたいだから私もいつしよに寝る〜」

「まだ時間も早いですし、寝るのは後にして夕食を食べましょうよ」

「それもそうね、じゃあ行こうか。妹ちゃんも来る？」

『行きますとも』

お腹へったもんなどと言いながらくつついてくるメグ。

腹がへったのは同感だが後ろから、てこてこ歩いて人のコートの端を握らないでほしい、しわが付くからな

「離せメグ、しわが付くから。ほら、握ってたきゃ手を握ってればいいだろ？」

『あ、うん、ありがと秋…』

「あなた達って仲いいのね」

「ん？ああ、まあ」

『そうだよ、私は秋ちゃんとずっと一緒に居るもん』

間違っではないが、誤解を招くような言い方は控えてほしい
ほら、なんかミーナに変な目で見られてるじゃんか

「そういう趣味だったのね…」

「ちつがああう！」

『それより、ご飯まだ？』

「あと少しで着くから我慢して？え」と…」

『メグだよ』

自己紹介（？）みたいなことをやってたら、王族専用食堂みたいな所についていた。

ここもまた無駄に派手な装飾品の数々が置いてあった

『ねえ、秋ちゃんここって全部が派手なのかな？』

「お城だからそうなんじゃない」

「それじゃあ、お夕食にしようか。シエバスチャン？世、持ってきて
て」

「かしこまりました」

セバスチャン？世？2代目なのか？執事に何代っておかしくね？

「なんで？世？」

「ああ、この城では、執事長は代々セバスチャンと名乗れと先代の
王から言われているの」

「なる、ほど？」

「お待たせしました。夕食でございます」

なら、いちいち？世って言うの面倒だから（？）でいいよね？い
いだろ？

いいタイミングでセバスチャン（？）さんが、料理を持ってきて
くれた。

鳥みたいなの丸焼き、サラダなど3人では、食べきれない
量。さすが王族

「それじゃあみなさん御一緒に、いただきます」

『「いただきます」』

……見た目がヒドイ物があつたけれどもおいしゅうござい
ました。

食べてすぐなんだが、メグが寝てしまったので部屋に移動
なぜか、ミーナがついてきたけれども今はスルー。理由？決まっ
ているだろう。疲れたからだよ。

「おやすみ、メグ」

俺の声に反応したのか寝言を言っていた。

その後、ミーナと他愛もない話をしていたけれど、夜も遅いから
早く寝るとセバスチャン（？）が言いにくたので寝ることになった。

「そついえば秋、歳は？」

「ん？15だけどそろそろ16になるな」

「え！？15なの？てつきり10か11くらいだと思ってた」

身長のせいでそこまで年下に見られていたか…やっぱり不憫

「ミーナは、いくつ？」

「私は、17よ」

「おつ、予想が当たった」

「まあ、そろそろ寝ましようか」

「そうだな、おやすみ」

そこで、俺は睡魔に身をゆだねた。

難しいことを考えるのは、明日からにしよう時間はたっぷりあるのだから

5 話目 我儘王女と執事さんと依頼内容（後書き）

どうも、熊海苔です。

感想・レビューください！なんか寂しいです

お気に入りに登録してください！なにかありがとうございます。

やる気が出てきます、感想が来ればさらに、やる気がでると思います
すいません、調子に乗りました。

6 話目（前書き）

そろそろ、城から出発します

6 話 目

カタカタカタ

どうも秋です

今早朝 4 時半に起床してから色々と準備に勤しんでおります

カタカタカタ カチチヨキツ

何をしてるかつて？

馬車用の座布団を作ってるんですよ。

あれ痛いんだよ、震動が

よし！あと1つ

今のところ 4 つ完成してる訳だが備えあれば憂いなしって、言うからね

『むう、んあ？』

「おはようメグ」

『おはよ…う、ご飯まだ？』

「寝ぼけてるな、顔洗ってこいよ？ほら、ミーナも起きろー」

「うるさいな… ……あと5分」

「そんなありきたりなこと言っても、意味ないぞ。早く起きろ！朝飯抜きにするぞ」

ガバツ！ものすごいスピードで起き上がったな

「ごはん！」

「メグが帰ってきたらな。てか、ミーナも顔洗ってこいよ」

『朝飯は？』

こいつら二人とも低血圧か？まあ、全部完成したから本格的に起こしにかかるか

「机の上に並べてあるよ。ほら、ミーナ顔洗ってこい、洗わない限り飯食わさないぞ」

「洗ってくるー！」

自分の欲望に素直な姫様のようで…扱いやすいけどな

「そんじゃ、食うか？飯」

『いただきますーす』

「ちょーと待ったーまだ、私が席についてなーい」

「たく…、んじゃ今度こそ」

「…『いただきます』」

二人とも、うまそうに食べてくれてなによりだ、

作ったかいがある

「なにこれ、すっごく美味しい！これ全部アキが作ったの？」

「まあな、自炊はそれなりに出来るからな」

親が家にあんまり居なかったから、身についたんだよな料理のスキル
言ってなかったが、5つ上の姉が居たんだが家事のスキルはまった
くの0だったしな

「『ごちそうさまでした』」

「お粗末さまでした」

『秋ちゃん、またレベル上がった？』

「そうかな…、でもここの料理長がコツを教えてくれたからかな？」

とりあえず、皿の片付けに取り掛かる。
と、そこへセバスチャンさん登場

「なりませんぞ！姫様！魔王の退治に付いて行くなど」

「許可取ってなかったの！？」

「うん、まあね。言ったら止められるからさ」

「行かせませんぞ！このセバスチャン2世、命に変えても阻止しますぞ！」

「あの…個人的には、魔王は、退治じゃなくて話で決着をつけたいんですが…」

「無理です」

そんなはつきり言わんでも…生き物が死ぬの見たくないもん。吐いちゃうからさ

『やってみないとわかんないと、思うよ？セバスチャン』

3人揃って懇願の視線をセバスチャンに浴びせる

「ぐっ、わかりました。王様に聞いてみましょう」

「あれ？今王様は、居ないんじゃない？」

「魔法で伝令を飛ばしますから」

「なるほど」

魔法は便利だね、早く色々使えるようになりたい

おお、そうだった久々に素振りでもするか

「出発できるまで時間は、ありますか？セバスチャンさん」

「十分ありますよ」

「じゃあ、素振りしたいので呼んだらまたこの部屋に来てください」

「承知しました。では、後ほど」

んじゃ、自分の部屋を出すか
ほいっと

「わっ何これ！扉がなんで出てきたの！」

「あゝ、スルーして、ね？」

『秋ちゃん早く入ろうよ、ナハトとレイもいるからさ』

「はいはい、ミーナちょっと待っていてくれ」

「うゝん、わかった早く戻ってきてよ？」

ほい、ただいま俺の部屋、さあ道着に着替えるぞ

・・・

でかい、これまでジャストな大きさだったのに、道着と袴がぶかぶかだ

袴は、おればいいか。よしっ準備OK

「ただいま」

「おかえり、で、その服と持ってる物は何？」

「道着のことか？あとこれは、竹刀だ」

「しない？どう見ても何も斬れなさそうなんだけど…」

「斬るための物じゃねえしな。稽古するための物だし」

「へゝ、アキのいた世界では、そういうものがあつたんだ」

ちりーん、間延びした音に変わったな

「お呼びでしょうか？」

「毎回早いですね、金メダルとれますよ」

「はい？」

「いえ、わすれてください。訓練場みたいな所つてありますか？」

「ありますとも、そこへお連れすればいいのですね」

「はい、お願いします」

『私もついてく』

「私は、抱きついてく」

後ろから抱きつかれると歩きにくい…

なんでやめろゝとか、言わないかって？無駄だから
そうこうしてる間に訓練場に到着

ミーナには、離れてもらってさっそく素振りを開始

「基本は、これで終わりつと。竹刀だけど型をやってみつか」

1本目、完璧。2本目、まあまあ。3本目、知らん！

型が終わったから何をしようかね

「丸太を5、6本用意できますか？」

「ああ、できるがどうするんだ嬢ちゃん」

ムッ、女扱いしおって

これでも男だぞ中身だけ…

「訓練に使うんですけど」

「よし、準備しろ。御手なみ拝見といかせてもらっよ」

少し待っていると人の形をもした丸太5本が運ばれてきた

「刀は、双虎でいいか…では、いきます」

まず比較的近くにあったヤツを居合斬りで真っ二つにして、近距離
にある丸太に切り掛かる！

斬る、駆ける、斬る、駆ける！

「最後！龍殺し！」

もう1本を構える

2本を別の生き物のように使い乱切りで丸太をばらばらにした。

（スゲー）

（あいつ、何物だ？）

（てか、俺超好みなんだけど）

（お前、あれはいつてて12だぞ）

「私は、15です」

（（聞こえてた！？））

「アキ、弟子にしてほしいんだけど」

「いきなりどうして？」

「いやいや、あんなの見たら弟子に入らないのは、おかしいと思うよ？僕は」

「うーん、人が多いと教えるにくいしな、魔王も倒しに行かないといけないから。」

アスクには、旅について来てもらうよ。

練習方法は、ヴォルドさんに叩き込んだけばなんとかなるだろうし」

「うむ、承知した」

「わっ！いつから居たんですか」

「ついさっきからだか？早く教えてくれ」

筋肉質だけどフルで教えたらヴォルド持つかな

「ぶっ倒れないでくださいよ？」

「私を甘く見てもらっては、困る。それでも隊長なんぞな」

「それじゃ、私についてやってください」

「ぜえぜえぜえ」

案の定、最初から張り切りすぎてスタミナ切れだ

「だいじょうぶですか？」

「アキは…なぜ…疲れてな…いんだ？」

「鍛えかたが、違うんですよ」

「あの隊長が、先にバテるなんて……」

まあ、この世界に来てから体力がバカみたいに上がってるからな、これまでの、練習量なら一日中できるっぽいし（ちなみに、夏合宿で去年2、3人倒れたらしい）

「私も負けてられない。ここに残って修行する騎士団でな」

「魔王の所に行く時にアスク君は連れてっていいですか？」

「別にかまわんぞ？」

「僕に拒否権は無いんですか！」

「「ない」」

「二人揃って言わなくても…」

仲間は、多い方が旅は楽しいじゃないか。面白い方が楽しし男手も欲しい力仕事とか

「アスク！アキに絞られてこい」

「わかりましたよ。隊長より強くなっても知りませんよ？」

「はははっ、その意気だ！」

…乗せられたなアスク、まあドンマイ

「アキー、許可が下りたから出発するぞー」

「ああ、わかった、それじゃあ行きましようかアスク君」

「行こうか。それと呼び捨てでいいし、そんな笑顔を僕に向けないでくれ…回りの視線が痛い」

『秋ちゃん、早く〜』

「今行くから待ってるよ?」

「やっと出発したか」

「はい」

「たのんだぞ、静の者よ」

「承知しました」

6 話目（後書き）

次は、日曜日に更新します

というわけで熊海苔です。10話までいったら番外みたいな物を書こうかなと

思っていたりしています

そろそろテスト期間なので更新ができなくなります

ですので日曜日はできるだけ更新します。目指せ！1日3話以上更新
それでは、みなさん。しいーゆーあげいん！

7 話目

「ちよつ、私の取らないでよ!」

『いいじゃんか、慣れてるんだから』

こんにちは、秋です。

馬車の中では、座布団の取り合いが発生して大変に、賑やかになつております。

「そろそろ、喧嘩はやめろよ? アスクがぶつ倒れてるから」

「ほとんど…アキのせいだよ…あんな厳しい鍛練させて」

「あれくらいでへばつてたら、この旅では足手まといになるだけだよ」

「姫様、それはひどいです」

「姫じゃなくてミーナって、呼べって言ってるでしょ?」

「しかし…」

ぶつちやけ、收拾がつきません。自分の力不足でもあるけどでも馬車の中での女子は、無敵だから助けに行けない訳です。

「口論は、それくらいにしとけ、体力なくなるぞ?」

「『はい』」

(意外とあっさり収まったな)

【秋は、自分の凄さを分かってないわね】

どうせ、わかってないよーだ。

「そついえば、私達つてどこに向かつてるの?」

「私の御祖父様の家よ」

「『御祖父様？』」

「ミーナ様の御祖父様の家ですか。懐かしいですね」

ほう、アスクは会ったことがあるんだな。ミーナの爺ちゃん。
話合ってるうちに到着

「御祖父様、入ってよろしいですか？」

「よう来たな。セントラルから聞いとるぞ。」

ミーナ、その可愛らしいお嬢さんは？」

「初めまして、峰治秋です」

「ほ、日本人か。ふむ、拙者、マイケル・ジョンソンと申す。アメリカ育ちじゃ」

「いえ、時代設定間違ってますから……」

「……………」

「て、えゝ！お、私と同じ境遇なんですか！？」

初耳だ。てことは、ミーナは俺の居た世界が第二の故郷？

「まあ、そのことは、部屋で話てあげるから、家にお入り」

まさか、俺以外に世界を渡った人がいたなんて…

とりあえず、部屋に入れてもらい、ミーナとアスクには部屋を出て
もらって

マイケルさんの話を聞くことに

「最初から説明すべきじゃな。長い昔話だと思って聞いておくれ」

「はい」

「まず、わしの事からじゃな。おぬしと同じくらいの歳の時にわたし
も喚ばれた。

喚ばれた理由は、戦争を止めてほしいと言うものじゃった、しかし、

わしは戦おうとしなかった。

するとどうじゃ、敵が攻め込んできて、国境付近にあったわしの居た村は、

蹂躪され逆奪、放火もされたし娘達は連れていかれた。

その時わしが感じていた感情は恐怖などではなく、抑え切れないほどの圧倒的な怒りじゃった、

わしも神から力を貰っておったからその力を怒りに任せて奮った、敵は倒せた。

しかし、あとになって村人が掛けてきた言葉は、恨みの言葉じゃった。

『なぜすぐに、その力を使ってくれなかった』、

『お前のせいで娘は連れ去られ、妻は死んだ。恩を仇で返しやがって最低だ』

これを言われた時、わしは何も言い返せなかった。

自分のことしか考えないで王の言った言葉を無視したのは、

紛れも無い自分自身だったのだから、その後は、せめてもの罪滅ぼしにと戦争の終決に尽力した。

さて、君がこの老いぼれと同じ過ちをしないことを、祈っているよ」

話をしめた時のマイケルさんの顔に浮かんだ微笑は、哀しく、苦しく、辛そうな感じだった…

「それで、解決したんですか？」

「いや、解決するはずがないから君には、誤った選択をして欲しくないんだよ」

「なら、私も…いや、俺も話さなきゃならないことがあります。

俺は、秋じゃなく恭介…峰治恭介が本名です。元の世界では男だったけど、

この世界に来て性別が変わったんです」

「だから、違和感があったんじゃない」

「違和感ですか？」

「いや、気にせんでいい、話は終わった。さあ、行きなさい」

『じゃあ、出発しようか？』

「そうだな」

「行きましょ」

「なつ、なんで居るんだ！話盗み聞きしてたな？」

「なんのことかな？恭介君？」

うわっ、性格悪！

「じゃあ、出発！目指すは、隣町ね。手綱はアスクよろしく、アキは後ろに乗るから」

「「えっ！？」」

「拒否権は？」

「んゝ、ない」

あゝ手綱引いてた方が楽だったのに…

「そう、ガツカリしないの、色々教えてあげるから」

「だから、嫌なんだよ！毎回そう言っておいて抱き着いたりするだけじゃん」

「えゝそんなことないよ。あ、そうだったね」

この人自覚ないよ。危険すぎる！今は、魔王なんかよりミーナの方が危ない！

「いや、俺は屋根に乗るから、な？」

「ダメでしょ？口調が戻ってるよ？」

『そつだよ。屋根の上は、危ないよ』

いかん、メグまで毒されてる

「メグは屋根の上に一緒に連れてく」

「なんで私は、のけ者なのよ！」

いや、メグと俺が危ないからだろ

パチン、…なんかミーナとメグの間でアイコンタクトで意思疎通があつた気がする…

『いい天気だね〜』

「そうだな」

『あのさ。恭介』

「ん？どうした？」

『私が勝手に恭介をこの世界に連れて来たこと怒ったりしてない？』

「う〜ん…」

今日の朝から、あんまり元気がなかったのは、これが原因だったのか
今更だけど、引け目を感じてたんだな

「気にしてねえよ、もう終わった事だし、その事でギクシャクしたらやだしな」

『そう、だね』

「過去の事に捕われて今を無駄に出来ないからな。それに楽しきやいいんだよ」

『うん、うん』

「だあ、泣くなよ。俺が悪いヤツみたいじゃねえか」

本当、面倒なヤツだな

泣き止むまで頭を撫でてやる。

『うつ、きよ、恭介え〜』

「ほら、泣き止んでくれ、な？」

頭を撫でるのは、逆効果だったな。

メグをあやす秋は、一定のリズムで背中をぽんぽんと、叩いてやっていた

「落ち着いた？」

『うん、毎回ごめんね』

「いいよ、別に、泣きたければ泣けばいいんだし、我慢するもんじやないさ」

『うん、これからもよろしく』

「それでさ、二人にはナハトとレイの事話した方がいいよな？」

「まあ、二人とも仲がいいこと、恋人みたいね」

「なっ」

『あはは、言い過ぎだよ。ねえ、秋ちゃん？』

みんなわかるだろ？不意にあんなこと言われたら、顔が赤くなるに決まってる。

だから今、顔が真っ赤になってると思う

「やっぱり、この子。元男とは、思えないくらい可愛い〜！」

「抱きつくなー！鬱陶しい、メグもくつつくなよ」

『秋ちゃん可愛いんだもん。私の嫁になって〜』

ああ、メグがどんどん腐の付く人種の仲間になってゆく…

下に居るアスクは、こっちを見て苦笑している。あいつ、絶対仲がいいなとか思ってるぞ。

ほんと離れてくれないかな、町が見えてきたんだけど…そういう趣味の人だ思われたくないしさ

てか、魔法の使い方教えてくれないかな？誰か。刀だけじゃ心配な

んだが

と考え事をしていたら、みんなは馬車を降りていた

「ちょっと、おいてかないでよ!」

「アキが遅いだけだろ?」

うつ、言い返せない。しょうがないじゃないか考え事にふけてたんだから

それで、どこに行くんだろう?金は持ってないはずだが…

『ギルドにレッツゴー!』

「ギルド?依頼をこなして報酬をゲットのギルド?」

「ああ、登録しなきゃいけないから、早めに行つてこつと思つてさ」

「ふむ、経済的に厳しいもんね私達」

「ミーナ様が、無駄遣いするんだよ。これが…」

アスクが苦労する姿が思い浮かぶよ。

「そのミーナが今まさに無駄遣いをしようとしてるけど、いいの?」

「え、ちよつマジで?」

「うん、ほらあそこ」

俺の指さす先でミーナとメグが露店で買い漁ろうとしていた指輪くらいならと思っていた、しかし露店の商品は高いからイタイ出費になると予想される

「ミーナ様、無駄遣いはやめてください!」

「いやだ。買つ!それでアキに付けるう」

「いや、私は要らないから、無駄遣いはさけてくれればうれしいんだけど…」

『わかった、今回はやめとく。お金が貯まったら3人で服を買いに行こうね』

「とにかく、早く行くぞ」

「僕は、行かなきゃいけない所があるから三人で行ってて」

ギルドに到着したはいいいんだけど、周りの視線が自分達に集中してるのが怖い

たぶん、あんな女子供が来んじゃねえよみたいな感じだろうと想像する。

（おい、なんだ？あの嬢ちゃん達は）

（まさかギルドに登録しに来たとかじゃねえよな）

（そんなことないだろう。あんなヤツらだぜ？）

（でも美少女二人に美女一人だぜ？ちよつと脅してやろうか）

（賛成だ）

たく、聞こえてるつつーの、メンドくせえな。あの手のヤツらほどしつこいのは、

居ねえんだよ

「よう、嬢ちゃん達。俺らと遊ばねえか？」

「あん？うつせえよ。用事があるから失せろ」

（ちよつ、それはさすがにヤバイよ）

（まあ見てろ）

「んだと、人が下手にでりやいい気に、なりやがって」

『秋ちゃん、どうするの？コイツら』

「ちよーと、痛い目に遭ってもらうのさ」

満面の笑みを浮かべた秋の顔を見た人達は思った、この少女を怒らせると命が危ういと。

それほどに、この時の秋の笑顔は怖かった

「ま、ず、は、そのモヒカン！ちよっとおいで」

「やんのか？ああん」

「うっせえぞ、伸されたいか？あん？」

相手の反応を見る前に、鋭く、貫く様に拳に魔力を纏わせて相手の鳩尾にアッパーをかました。

魔力を纏わせたのは無意識だったがかなりの威力になっていた。モヒカン男は物凄いスピードでギルドの外に吹っ飛んで行った。

「まだやるか？」

「「すんませんでしたー！！」」

「ふんっ、……あの受付のお姉さん」

「は、はい、なんでしよう？」

「私達ギルドに登録したいんですけど」

「畏まりました。では、この用紙に名前と年齢、性別、使う魔法の種類を書いてください」

俺以外書き始めてしまったが、魔法の種類ってなに？
そもそも魔法ってどうやって使うの？

「あの」

「なんでしようか」

「魔法の種類って何なんですか？」

「放出系かエンチャントかです」

「両方と書くのはありますか？」

「大丈夫ですよ」

ええと、名前は秋のほうでいいか、年齢は15つと、性別……女、

魔法は両方
これでよし

「書けました。これで終了ですか？」

「あとは、このブレスレットを着けてください」

「この石は何ですか？」

「それは、ギルドが決めたランクを示す物です。依頼にはD、C、B、A、S、SSがあり

それぞれに黄、緑、青、赤、白、紫の石があり、ランクが上がる事にそのランクの石を

ブレスレットにはめ込んでいきます。Dの人はDランクしか受注することが出来ません。

なので、自分のランクの依頼をこなしていき、一定数依頼をこなすとランクが上がるので、

がんばってください」

「もう登録は終わった？」

「アスク遅い、おかげで変なヤツに絡まれたぞ」

「ごめんごめん、依頼は僕が居ればBランクまで受けられるから、怒らないでよ」

「むう、わかった、ならこの依頼を受けたい」

【それはさすがに内容が厳しいと思うのだけれども】

久々の登場ですね。レイさん、今まで何やってたんですか？

【ナハトとポーカーしてたのよ】

「アキ、別にいいけどこの依頼内容はキツイと思うよ」

「大丈夫、私だよ？」

「まあいいけどさ、この依頼を受けたいんですけど」

「畏まりました。何名ですか？」

「四人です」

「Bランクの方は」

「僕です」

「ほかの方の安全は保障出来ませんがよろしいでしょうか？」

「大丈夫です。私のストレス発散に使わせていただきます」

「はい…では、お気を付けて」

依頼内容は、ヴェオウルフ3頭の討伐、この狩りによって物語は動き始める…

「ギルドに加盟したか」

「そのようです」

「お前がまず様子を見てこい。頼んだぞ？」

「承知」

7 話目（後書き）

どうも、熊海苔です。

いやはや早いものでもう7話目です。

評価してくださいね。感想、レビューも待ってます

8 話目

どうも、秋です。ただいまクエスト中です。
ヴェオウルフ3頭の討伐がメインターゲットのクエなのです。

「そついや、狼くんは強いのか？」

「強いのか弱いのかまでいるらしいなアスク？」

「そうです。強いになると言葉が分かる者が居るらしいです」

「へー、今回ののは強いのか？」

「あんまり強いのは、出てこないはずですよ」

なんかつまらんな、こう意外に強いヤツが！的なことになんないかな。

というか、ミーナの持っている武器が意外だな、まさかナイフを二本使うとはな

「そついや、ミーナがナイフってのが意外だな」

「そうかな？私は、ナイフ使いやすいと思うけどな」

「何と言うか二本ってところかららしいな」

てか、最近レイとナハトが出てきてないな。サボりか？

『ねえ、秋ちゃん』

「どうした？」

『あれって狼だと思っただけだよ……』

「ん？ああ居るな十頭くらい………なんで十頭！？」

「囲まれつつあるけど、どうしますか？」

「私がやる、最近ストレスが溜まってると。全部殴り飛ばす」

言うや否や、秋は地面を蹴った。一気にヴェオウルフとの距離が縮む。

秋の手足から闇が滲み出て来た、すれ違う瞬間重力を纏った拳で相手の頭を地面に向かって殴る。

「うらあ！」

ズドン

狼の頭が地面に当たる瞬間クレーターができた。

重力を纏った攻撃は、ヴェオウルフを突き抜けて地形を変えるほどの威力があった。

そこからは、魔物にとっては地獄だった。

「量が多過ぎるだろ！ちつ、テール！」

秋がそう叫んだ途端、秋の手の内にハンドガンが出現した

いや、三七口径は、ハンドガンではない。さらに威力のあるマグナムだ

「ッ！消し飛べ！」

銃口から出た弾丸は、1発ではなく4発だった。

4発の弾は、激しく動くヴェオウルフの頭を貫いた。さらに4発撃ち、

残りの1頭を撃った時、戦局はヴェオウルフ側に傾いた。

「ふつ、貴様がアキか、まだまだ未熟だな。一つ一つの攻撃が甘い！」

「何！喋っただと、アキ！逃げろぞ。そいつが居るってことは、このクエストはBランクなんかじゃない！」

「知るか！敵に背中を向けたら、死ぬだけだろ！」

「しかし！」

「コイツは、俺が食い止める。だから、早く逃げる！全員だ！」

「ふん、だからお前は甘いんだよ！」

話をしている間に距離を詰めていたヴェオウルフのタックルを食らって吹っ飛ぶ

くそっ、あのスピードじゃ弾が当たんねえ。なら

「龍殺し、双虎！レイ、ナハトも頼む！」

【あいよ】

【わかった】

「やっと本気を出したか。殺りがいがある」

右からナハトの斬撃、左からレイの魔法、時間差で前から二本の刀で切り掛かる

【うおら！】

【ライトニングアロー！】

「そうきたか、だが甘い」

攻撃が当たる瞬間、敵が有り得ない動きで避けた。

そこに、思いつき振りかぶって止められない状況の秋が突っ込む

「うおりゃー！」

「単純だな。ふっ」

「ぐああああ」

反射的に刀を出して自分の腹を守ったが、刀が蹴りに耐えかねて折れ蹴りは威力が下がったものの

腹にくらってしまった

「はあはあ、まだだ、まだ終わっちゃいねえ！重力と炎を双虎に集める、ありったけだ。

俺の魔力も付与する、いいな？ナハト、レイ」

【任せろ！】

【わかった】

そこにできたのは一振りのレーザーだった、炎を重力で凝縮しさらに、自分の魔力で強化することによって高出力になっていた。

「ほう、そんな隠し玉があったとはな」

「てめえは、俺がここでぶった斬る！」

「くらえ！わんこ！」

「俺は狼だー！」

しかし、手ごたえがない。よく見ると誰かが俺とわんこを止めていた

「君、その技をそれ以上使うな。それとカイザー、貴様はどこかへ行け」

「ちっ、お前か…いいだろう、今は退いてやる」

「あのあな…た…は…」

そこで俺は気を失った

誰かが揺さぶってくる。鬱陶しい、まだ寝させろしつこい…ミーナか？ミーナだろうな

「んだよ…人が寝てるのに…」
「アキ！よかった！よかった！」

いきなりミーナが強く抱きついてきた。いつもと違い彼女は泣いていた
たぶん安堵かなんかの涙だろう。

「ごめん、心配かけた」

「……………なんで……………」

「へ？」

「なんであんなヤツがアキを、小脇に抱えて森から出てくるのよ！」

「『そつち！？』」

「そうだ！メグ！その人は？」

『下でアスクと喋ってるよ。アスクの師匠なんだって』

「なら、話が早い！」

急いで階段を駆け降りたせいか、途中でこけかけてしまった

「あ、あのすいません！師匠さん！弟子にしてください！」

「ふむ、起きたか。なぜいきなり弟子にして欲しいと？」

「ええと、あのわんこがあなたを見て引き揚げたことも理由ですが、あの技を途中で止めたことが気になったんです」

「まあそれだけ解っていればいいだろう。弟子に迎えてやろう。俺の名はヴァイシャだ」

「あの！私は秋って言います。これからよろしくお願いします！」

最初は取っ付きにくい感じだったのだけれども、微笑んだ顔は、人懐こい感じの笑みだった。

「明後日ここを出発する。それまでに、ミーナの買い物について行ってやれ。」

お前が倒れて一番心配していたからな」

「わかりました。それは、悪いことをしたと思ってます」

「アキ、気を付けてね。泣きやんだ後のミーナ様の相手は大変だから」

「忠告ありがとう……」

今は、もう夜だがさっきまで寝ていたから眠たくない
やることがないので、夜空を見るために部屋のベランダから屋根の上に出た

『寝れないの？秋ちゃん』

「ああ、今まで寝ていたからな。メグお前はいいのか？」

『夜空が綺麗だから見てたんだ』

「ああ、俺の居た町より空気が綺麗だから、星もよく見えていいな」

『そうだね。この世界に来てよかったと思う？』

「後悔はしてないぞ。ここに来て良かったと思う、命の大切さがよくわかったし」

まあ、俺は2回キレちゃったけど……」

『あれは、怖かったよ。特に雰囲気がね……』

「明日は、ミーナに引つ張り回されるだろうし、寝るか」

『そうだね。一緒に寝ていい？』

「別にいいぞ」

その後、部屋の中に戻り床についた。

たとえ現実が辛くても、夢と言う逃げ場があれば人は真っ直ぐ前を向いて歩いてゆけるはずだから……

俺は、夢と親友、姉ちゃんに助けられた時、

それに気が付いて下を向かずに胸を張って歩けたのだから

8 話目（後書き）

どうも、本日二度目です。

部活のあとで書いたので秋のテンションやらキャラが若干崩壊してしまいました。

戦闘になると性格変わるのは、気をつけないといけませんね〜

一休み1回目 峰治家の姉（前書き）

これから、番外編みたいなのをちよくちよく挟んでいこうと思います

一休み1回目 峰治家の姉

あの日から3日たった。でも、弟は帰ってこない
あの日の朝きちゃんと起きなかった自分が腹立たしい

「でも、こんなこと思っけていても恭介は帰ってこないしね…」

それに姉のあたしが、こんな顔してたら心配するだろうし

あたし 峰治優奈は、弟と二人暮らしだった、父は恭介が産まれてから3年後に事故で他界し
母はそれなりに有名な海外の会社の社長だから年に数えるほどしか帰ってこない

ピンポン

間延びした家のインターホンが鳴った

「はいはい、まったくこんな時に……どちら様？」

ドアをあけると金髪の小学生くらいの可愛らしい少女がいた

『あなたが、恭介のお姉さん？』

「そうだけど…弟なら家にいないわよ」

『知ってます。弟さんに会いたいですか？』

今この子なんて言った？「弟さんに会いたいですか？」と言った気がする

それはどういう…

「あなた！恭介の居場所を知ってるのね！？あの子は、どこに居るの！」

『質問に答えてください。会いたいですか？』

「もちろん！どうすれば会えるの」

『2時間後に恭介の部屋に入ってください。では、また後で』

「ちよつと、待ちなさ」

あたしが、彼女の手を握ろうとした瞬間。彼女の姿がかき消えた

「え？あれ、なんで居ないの」

気味の悪い子だ。でも、恭介に会える

****そして2時間後****

「入っていいのよね？」

だいぶ前に勝手に入って怒られたことがあるしな

「でも、会つためだからしょうがない。よしっ」

意を決してドアを開く、そこには男と女それに黒髪の少女がいた。

「あの子、嘘をついたわね」

「？あ、姉ちゃん！久し振り」

黒髪の少女があたしを見つけてこっちへ来た。

「あなたは？」

「うわっ、ヒデー3日経っただけで弟の顔忘れるか？普通」

「もしかして恭介？」

「ん？そうだが、ホントどうした？姉ちゃん」

久し振りに見た弟は女の子になっていたけれども、話し方が恭介だった。

自然と恭介を抱いていた

「馬鹿！どこ行ってたのよ。心配掛けて」

「ごめん…でも、もう戻れないんだ。時々この部屋に行くからその時に会おう？」

「分かった、これでも大学生だから勉強しないといけないしね」

「そうそう、その意気だよ。じゃあ、またね、姉ちゃん」

「うん、また…」

弟（妹？）が元気でよかった。あたしもがんばろ。

これから、ずっと

一休み1回目 峰治家の姉（後書き）

どうも、勉強で大変な熊海苔です。

ちかじかテストがあるので更新できなくなりますが、

テストが終わったらパソコンにへばりついて続きを書くので
これから、駄文ですがよろしくお願いします

9 話目

どうも、秋です。

今日は、メグとミーナとで買い物に出かけます。
なぜか、嫌な汗が止まりません、なぜでしょう？

「アキ、早く行くわよ！今日は、あなたの服を買ったから」
「なんで私の服？これでいいじゃんか」
「いつも同じ格好じゃない」

いつも洗濯してるし、毎日同じ服を着てるわけないんだけどな

『早く行こう？秋ちゃん』

「はいはい、でもちゃん付けはやめて…」

「あのお店に行こうよ」

前方のミーナが指指す先にあった店は、本当に俺にとっては入るのはかなり勇気がいるのだが…

「早速、中を見てみようよ」

「押すなよ、自分で入れるから！」

『離れたら逃げるでしょ？秋ちゃん』

チツ、ばれてたか。いやほんと勘弁して、そんな店に入る勇気は、俺持っていないから

「うあ……あう」

「メグ、このワンピースなんてどうかな？」

『これも良いと思う』

「……あの～周りの視線に耐えるのが辛いんだけど…」

「じゃあ、このワンピース着てきて」

「話聞いてます!？」

『諦めた方がいいよ、ミーナってスイッチ入ったら、当分オフにならないらしいから』

「うぐ……わかったよ、着ればいいんだろ？」

「さあさあ、着てきて」

「覗くなよ？」

着たくないんだけどな～

そうだ、コートを上から着ればいいんじゃないか

「……………どうやって着るんだ？上から被るのか？」

うん、男子で着かたわかるヤツいるか？男子ならこんなの着かたわかるわけないよな？

「ミーナ、着かたわかんないんだけど…」

「じゃあ、着させてあげるよ」

「いや、教えてくれたら自分で着るから!」

『聞いた相手が悪かったね秋ちゃん』

なんでこの人、目が血走ってんの？マジで怖いんだけど

「すきあり!あれ?なんで上付けてないの？」

「あなた、俺の中身知ってるでしょ?あれを付けられる訳無いじゃん」

「でも、あれ付けないとワンピース着た時たいへんだよ？」

「うぐ、反論出来ない」

「だから大人しく着ましようね」

結局着る羽目に…不覚にも可愛いと思ってしまったので死にたくな
った

「ほら、似合うじゃない！コートも意外と合ってるし」

『秋ちゃんが、女の子ぽくなってる』

「それ以上言わないでくれ…かなり恥ずかしいんだ」

「さつき、自分で可愛いと思ったでしょ？」

「なっ！そんなことない…」

見抜かれてしまった。俺そんなに顔に出てたかな？

『秋ちゃん、乙女化しつつあるよ』

「言っつなよ…気にしてたんだ。店のラインナップにちょっと、笑顔
になっつちまつたしな」

「ほら、口調も直して」

「やだ。口調変えたら、ミーナ調子に乗るじゃん」

『一理あるね。でも、面白そうだよ？アスクを騙すとか』

まあ、でも面白そうだな

「あとは、ポニテにしてつと、アスクに会う時はコートの代わりに
このジャケットを着てね」

「わかったよ。アスクの前でだけな」

「ダメ、アスクを騙すまでよ」

それは、精神的にくるものがあるのですが、でもしないとミーナの
機嫌が悪くなるからな。

「はいはい、今回だけにしてくれよ？」

「よろしい それじゃあ、さっそくアスクの所にいこ」

「ちよつと待った。寄りたい店があるんだけど…」

「どこ？雑貨屋さん？」

「武器屋だよ。刀が二本とも折れちゃったからさ」

『あつ、うゝん、何でもない』

「とにかく、急ご」

3分くらい他愛のない話をしながら歩いていると、武器屋が見えてきた。

それなりにしつかりした店構えだ

「いらつしゃい」

店の店主は中年の優しそうな人だった。

店の中を見て回ってみると、目当ての代物があった。ヴァイシャが俺の武器を見て驚かなかったから

もしかして、と、思っていたが予想が当たっていてよかった。

その代物とは、身の丈ほどもある太刀だった、細かな装飾はなく実戦的な拵えの業物である

「これにしょ」

「いいのかい？そんな物で」

「これが目当てでしたから」

薄く笑っておく、おじさんが意外そうにしていたから

「それは、なかなか売れなかった物だから、おまけでもう1つ選んでいいよ」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えて…このナイフを2つ頂けないでしょうか？」

「いいよ。しめて52ゴールドね」

ここでお金についての説明なんだが、1ゴールドあたり100円だ
いたい元の世界のドル
のようなものだ

「きつちり52ね。またのお越しを」

店を出て足早に宿に戻る、そろそろ夜だからからまれる確率が上がるからだ。

だが、今日はからまれる事はないと思う…なんせ、でかい太刀を背負った少女に金髪の幼女を引きずる
同じく金髪の美女という謎の集団だからだ。

「ただいま。アスク、晩御飯まだ？」

「もう少しで準備できるそうです」

『さっきのアレ欲しかった…』

「今度、買ってあげるから不貞腐れないで、ね？」

「あの、アキさん？」

「どうかしましたか？アスク君。顔を赤くなんかして」

「どうしたは、そっちだよ。何かキャラ変わってるよ？服装も違うし」

うーん、確かにこのキャラを演じてると疲れるな。でも楽しいからいいや！

「どうもしてませんよ？気にしないでください」

「あつ、なら付き合ってください！」

「ヤダ！」

「そんなこと言っなよ。女の子なんだから」

くそっ、コイツ俺の演技を逆手に取ってきやがった。絶対のってや
んないぞ

「うつせ、と言うか。一緒に外に出ようか？ちょっとコイツの切れ
味を見たくて」

「ごめんなさい。調子に乗りました」

「明日出発する。各自睡眠はとっておけよ」

明日からまた馬車に揺られながらいくのか…憂鬱だ

ドゴオオオオオン

「なんだ！？行くぞメグ、ミーナ！」

「一体なにがあつたの」

「知らんしかし、何かが爆発した」

『見て！秋ちゃん。馬車が…』

「ッ！あしを潰されたか…。しょうがない、明日から歩きだ」

「ヤダー疲れる」

（ナハト、レイ、明日から俺達を運んでくれないか？）

【男は乗せないぜ？】

【体重の問題で、女の子二人までならOKよ】

（サンキュ、明日からよろしくな）

「あしは、私が用意しておく」

「ならいいけど、私は寝るね。おやすみ」

「おやすみ、いい夢を」

『言わなきゃいけないことがあるんだけど、二本の刀は時間が経て
ば直るからいいとして』

なんでそんなに「夢」って言葉にこだわるの？』

「それは、今度話すよ。俺には、辛い話になるからさ」

その日の夢は、なぜだか悲しい夢だった。まるで現実のように…

9 話目（後書き）

この話は、番外より時間系列は先です。

次回より修行が始まる予定ですのでお楽しみに

「そんなこと言って大丈夫か？」

登場人物には、言われたくない

「あつそ」

そうです。

以上、熊海苔でした

10 話目

どうも、秋です。

本日より修行が開始されました。

てか、師匠が厳しすぎる

「ミーナ、もっと集中しろ！アスクとメグもだ！」

「もう無理」

「はいっ！」

『ムムム！』

ヴァイシャはエンチャント系の魔法が得意らしく3人に教えています？

あゝ、叩き込んでます。の方があつてな

俺？魔力の制御の訓練をしること、コレかなり大変だな。

頭が痛え

「集中を切らすところら一帯が吹き飛ぶぞアキ」

「マジ！？」

いかん、それは非常にまずい。死にたくないもん

集中集中、心を静めて、自分の中の魔力を感じる。でかい漆黒の塊が見える

塊は、荒れ狂うように質量が変化している

「し、師匠？」

「ヴァイシャでいい。どうした？」

「魔力を感じることが出来たのだけど、どうすればいい？」

「魔力はどんな色をしていて、どうなってる？」

「色は…漆黒、荒れ狂うように質量がでかくなっていった」
「なら、魔力の容量の枠を大きくするイメージをしる。量に合わせてな」

魔力の周りの枠を大きくする感じでつと、だいぶ穏やかになったな。

（メグ、これでリミッターを解除したらどうなる？）

《質量が3.5倍のスピードで大きくなる》

（ようするに？）

《秋ちゃんの周囲3mが凹むと思う》

（それだけ？）

《それだけ》

なら、いつちよやってみつか。え〜と

「解除」

「「「？」」」」

ゴオオオオオオ！

「「「！？」」」」

うわっ、スゴ！操るのが大変だ。さっきの塊がどんどん膨張している

「アキ…髪と瞳の色が…」

「ああ、元に戻るから大丈夫」

『 その力は神の如く 大地を裂き、海を割る 其の者
名を白銀の鬼神と申す 』

歌うように、メグが言った。俺を含めてみんなが聞いていた。

なぜ、いきなり言っただのか不思議そうにしていた

『実は秋ちゃんって「白銀の鬼神」の生まれ変わりなんだよね』

「……」

『あ、あれ？』

それって、俺が危険人物って言うこと？みんなから、凄い目線を感じるんだけど

「どういうことなの？」

『え〜と、世界で神様の次に強いはず……』

「なんでそんなことを、包み隠さず言うかな」

『いやあの、そういうの苦手だから』

魔力を消して、笑顔でメグをこちらに呼ぶ

『な、なに？』

「正座」

『はい……』

その後2時間ほど、修行中なのに説教は続いたという。

「まあ、気にしないでくれ」

「う、うん、わかった」

「承知しました」

「……（コクリ）」

「それで修行の話なんだけど、ヴァイシャどうだ？」

「お前は、次の段階に入る。メグは、教えることがない。ミーナはサボり過ぎだ。」

アスクも次の段階に入る」

「それで、次の段階って？」
「武器に魔力を纏わせて安定させる」
「でも、私は出来るぞ？それ」
「安定していない」
「いいじゃん、なんとかなるよ」
「また、気絶するぞ？」
「頑張らせていただきます」

ホント、ヴァイシャ怖いな。え？最強が聞いて呆れるって？勝手に言ってる
その時、ヴァイシャが「そろそろだな」と呟いたのは誰も知らない…

翌朝

「アキ、起きろー！」

ミーナが押し掛かってきた

「むきゅっ！」
「あっ…ごめん」
「うう…痛い。で、どうした？」
「師匠さんがいなくなっただ！」
「はい？」

少しの間、思考が停止した。そりゃ、止まるぜ？いきなりだもん

「一体どういう」
「書き置きを残して居なくなったの」
「書き置きの内容は？」
「『お前達に教える事は、ほとんどない自分達で考えて強くなって

「見せる」だって」

「らしいっちゃ、らしいな。ヴァイシャの言いそうになった」

「人数減ったけどどうする？」

「なんとかなるでしょ」

「それもそうだな」

修行の途中で新たな出会いがあるのをその時は、知らなかった。
—
人を除いて…

10 話目（後書き）

テスト週間真っ最中ですが投稿しました
熊海苔です。

来週にはドドン！と投稿できます。はい

「そんなこと言っているのか？」

む！秋のくせに失礼な、ちゃんとやるから大丈夫！

「本当に？まあ、がんばれよ作者」

言われずとも大丈夫だよ多分…そもそもなんだよまったく……

「ああ、自分の世界に…え〜と、読んでくださってる皆様、ご感想、

ぜひください！これからも、『世の中平和なのが一番いいと、今更
思っ』を」

「「よろしく願いします！」」

11 話目

どうも、秋です。

いきなり茂みから出てきた人を気絶させてしまいました。

〈回想開始〉

「そーいや、コントロールの安定化って、どうやるんだ？」

『ずっと同じ量の魔力を纏ってればいいんじゃない』

「なるほど、んじゃ、ついでにジャブでも打つかな」

両手両足に重力と炎を纏った。そして、大振りの右ストレートを出そうとした瞬間

ガサガサッ

「!？」

やべ、止まんない…

人だったら避けてくれ

ゴスッ!

「げべらっ!？」

以上、回想終了

現時点に戻る

「…あれ、大丈夫かな？」

『助けにいったら?』

「…そうする」

吹っ飛んで行った方向へ探しに……あつ、居た。うわっ、気絶してるよ

「見つけたけど」

「引きずって連れてきて!」

「了解」

ズルズル、コイツ重たいな、あつ、男か。しかも鎧着てるよ。道理で重たい訳か

「…ただいま」

「そいつ? 吹っ飛ばされたヤツって」

『そいつだね、鎧の胸の部分凹んでるじゃん』

「えぐ! ひざ枕してあげたらどう?」

「えゝ、つつか、アスクお前、脈絡がないな」

「それは、いつものことよ」

「アスク以外ならしても良いんだけど…」

「してあげたら?」

「なんか、差別されてる気がするんですが!」

「まあ、殴っちまったしな、せめてもの罪滅ぼしかな?」

座る時、スカートがめんどくさいな。……よし、綺麗に座れた。うんで、頭をももにと。

「これ、かなり恥ずかしいな… / / /」

『赤くなっちゃって』

「…可愛い」

「あとで、二人にもやってやるよ」

「『なっ!… / / /』」

ふん、お返しだ

おっ、下から唸り声がするな

「ううん、ここは？」

「あつ、起きた？ふ〜、一時はどうなるかと焦ったよ」

「あ、あの〜／＼／」

「ん？どうかした？」

「貴女は？」

「私？私は、秋よろしく」

「どうも、アルフ・ノアースです」

「それで？アルフさん、いつまでそうしてるつもり？」

あつ、なんか俺以外みんな怒ってるな

「いや、柔らかくて気持ちがいいからつい……」

「あう！」

ミシ

世界にひびが入った。

しかし、救世主が来た

アルフと同じ茶髪の女性だ

「アルフー、どこ行っただのー」

「あの〜」

「はい？」

「ここに居ますけど」

自分の膝の上を指差す

静寂

「どうもすみません、うちの弟がお世話になりました」

「いえいえ、私が殴り飛ばした事が原因ですし…」

「殴り飛ばした？」

『修業でジャブを打ってる時に、いきなり茂みから出てきたんです』

「そういうことでしたか、やはり迷惑をかけてるじゃない、アルフ」

「す、すまない。この森は、危険だから出ると言おうと思ったんだ」

へえー、この森危険なんだ。何が危険なんだ？

「どこが危険なの？」

「あゝ、君の後ろにいるやつ」

「後ろ？ゲツ！食べられない猪モドキ！」

身体が完全に後ろを向く前に太刀を抜刀！右上から左下に袈裟斬り
アルペンタの頭が飛ぶ

太刀の刃の部分に炎が渦巻いていた

「で、どこが危険な森？」

「……………」

『秋ちゃん、出来る様になったじゃん！』

「何が？」

「だから、安定的に魔力を纏うことよ！」

「あつ、ほんとだ」

「「無視しないでください！」」

「ゴメン。それで、お名前は？」

「私は、姉のセデスです」

「あ、どうも秋です」

姉の方が常識ありそうだな、うちの姉と違って

「それで、あなた達はなんで森の中に？」

「修業が人目につかないようにですかね」

「そんなに危険？」

『だって、秋ちゃんの魔力量はかま　「それ以上言うな、話がこじれる」　わかった…』

「「？」」

「いや、下手するところら一帯が吹き飛ばらしい」

「は？吹き飛ば？」

「森全部がね」

「本当に？マジで？」

「大マジ、というか姉弟がここに居るのが不思議なんだけど、危険な森の中じゃん」

「あゝ、うゝん、君達が森の中に入って行っただから。

止めようとしたら、弟が居なくなっていたので仕方なく…」

怪しいな、なんか裏があるぞ。たぶん…

「なんか隠してない？」

「ッ！……実は魔王を倒そうと思って二人で旅を……」

「あつ、そうなの？なら、一緒にいこ？」

「いえ、これ以上迷惑をかけることは…」

「一緒に来なよ。大人数の方が楽しいよ？」

「いやしかし…うゝむ、それも一理あるしなあ」

『そうそう、一緒に行こ？』

「そもそも、付いて行っただいいの？」

「別にいいぞ？なんでそんなに悩む必要があるのか、わかんないしな」

「そこまで言われたら、何も言い返せない…わかったよ一緒に行こ

う。いいよね、姉さん？」

「アルフがいいなら、あたしは何も言わないわ」

「よっしゃー！クエストの受注と達成が楽になったぞー」

『ええと、メグって言います』

「私は、ミーナ。よろしく」

「これから、よろしく」

「んじゃ、今日中に森を抜けられるように、少し急ぐか」

「今日中に抜けるのは、たぶん無理だと思う」

「そんなに、デカイのか？この森」

『東京ドーム145個分は、あるよ』

「はあ、今日は野宿か…」

野宿すると朝起きた時全身から、音するから嫌なんだよな

「つつか、話をしたらもう夕方じゃん。どうする？」

「野宿の準備しよ」

「荷物は、どこにあるんだ？」

「こん中にある」

アルフとセデスが驚いてるな、俺はこのリアクションが欲しかったんだよ。

ポーチの中からテントを出してつと

「三人共、手伝ってよ。一人で組み立てるのは、大変なんだよ」

「何個組み立ててるの？」

「六人だから三つ」

「わかった、さっさと組み立ててしまおう」

「じゃあ、焚火に使う小枝を拾ってくる」

『私も、行く』

「私は、アスクとテントを組み立ててるね」

「あたし達は、何をすれば…」

「食材を切つといて」

「わかった、しかし材料はどこに？」

「ん？ポーチの中だけど、どうした？」

「さつきから、気になってたんだけど、そのポーチってどうなってるの？」

「金からドラゴンまで何でもいくらかでも入る便利な代物、別名四次元ポーチ」

実はコレ町を出る前に、ただのポーチを魔力を使って制作した非売品なのです。材料代20ゴールド

売るとしたら45ゴールドくらいかな。

御購入のさいは、ジャ○ネット高田まで

「ふゝん、そういえば旅商人が言ってたんだけど、レアールがウッドノースに、ユーランドがサンゴールドに戦争を吹っ掛けるらしいよ」

「えっ！それって確かな情報なの？」

「ああ、信頼のおけるヤツだから確かだ」

「アキ、お父様達が！」

「分かってるよ。まずレアール軍を止めるか潰す、それでユーランド軍も同じく、これでいいな？」

「ありがとう、アキ！」

「王様！情報が入りました。レアールが攻めて来ます」

「なんだと！？本当か！」

「本当でございます。もう一つ知らせが…」

「なんだ」

「国境にもものすごい勢いで向かう人に乗せた魔物が二頭、うち一頭の背に金髪の人物が二人乗っていたとのことだ」

「まさか……ミーナか！しかしミーナは、アキという者と共に居るのでは？」

「王様、どういたしましょう？」

「こちらにも、軍を動かす。できれば途中で娘の安全を確保してくれ。出陣だ！」

「承知しました。では、騎士団に知らせてまいります」

「ミーナよ、無事でいてくれ」

王の独り言は、自分以外誰も居ない謁見の間に虚しく反響した

まったく、よくこのスピードで走って誰も落ちないな

「レイ、国境まであとどれくらいだ？」

【あと4分てとこね。もつと飛ばす？】

「やめろ、みんなが落ちたらどうするんだよ」

『落ちはしないと思うけど、十分間に合うから飛ばさなくてもいいと思う』

ん？あれって騎士団の連中かな、他にも色々居る見ただけど…

「アキ！止まれ！ヴォルドだ」

「見りゃわかる、レイ、ナハト止まれ！」

【止まってどうすんだ？】

「戦場でミーナを守ってもらう」

【そつえば姫だったわね】

「そつえばってなによ！」

とりあえず、騎士団の少し前で停止、話をしに行く

「久しぶりだな、アキ」

「お久しぶりです。といつても4日ぶりですがね」

「そうだな、しかし何故コチラへ？」

「レアルが攻めてくると言う情報を聞いたので」

「それならば話が早い、助太刀してくれないか？」

「うゝん、殺したくないんですけどね。わかりました、最低でも八割は倒します。残りは頼みましたよ？」

ここでマメ知識なんだが、大群での行軍は少数よりも時間がかかる、レアルもだが俺達だってそうだ。兵糧もかなりの量がいるしな。それに下手に急いで戦の時に兵達の体力が無くなっていたら元も子もないから隊長は、

誰でも出来るものじゃない

「言ってくれるな。しかし我等とて遅れはとらんぞ？」

「ぶっちゃけ、このパーティーメンバーが本気を出したら、レアル軍は1日以内に壊滅出来ますよ」

「なんだと！？それは、本当か」

「でもまあ、疲れるのでやめときます」

「騎士団長！敵の数は、二万です。龍騎兵が五百、馬が三千、魔導士が二千五百、歩兵が一万です。どうしますか？」

かなりの数だな。敵は本気と言うことか、しかし龍騎兵ってなんだ？ドラゴンに乗っているのか？

「龍騎兵ってなんですか？」

「その名のとおり、ワイバーンに乗った兵だ。一番厄介なヤツだ」

『秋ちゃん、そろそろだよ』

「わかった。ヴォルドさん今から先制攻撃をかけます。
多分この一撃で大半がやられると思うんで。メグ、ミーナ、セデス
は、

自分が撃てる一番強い魔法を使ってくれ」

「任せて！」

『はい』

「分かったわ」

てか、これだけで全滅するんじゃない…

（刀に炎と重力を纏わせたら、自由にやっていいぞ）

【やり〜暴れ回っていいんだな？】

【私は、他の人達を援護しながら戦うわ】

（了解、頼んだぞ二人とも）

「さてと、ホワイトテール、炎弾装填！炎神、我、求めるは、紅蓮
の炎 炎華！」

今戦いの火蓋が切って落とされた…

11 話目（後書き）

次から戦闘に入ります。ちゃんと書けるかな？心配です…

「弱気はやめろよ。何とかしろ！」

だって一方的な戦闘になりそうなんだもん

「「駄作ですが、これからも読んでくださっている方！お願いします！」

ご意見、ご感想もお待ちしております」」

以上 熊海苔と秋でした。

一万PV記念（前書き）

やったー！一万超えた！

「で、どうするんだ？」

秋と恭介で遊ぶ

「二人！？」

一万PV記念

作者「というわけで」

秋「どういうわけだよ!」

ミーナ「別にいいんじゃない?」

メグ「そうだよ!」

作者「あ!そうそう、みんな力は平凡にするから」

作者以外「はあ!?」

作者「じゃあ始めよう!」

秋「だが断る!」

作者「二人ともよろしく。秋を捕まえていてくれれば、い…ゲフンゲフンだから」

二人「逃げちゃダメ」

秋「うぐっ、でもまだ一万だぞ?」

作者「感謝の心をわすれたらだめだぞ?」

秋「反論できない、しかし…」

秋以外「始まり始まり！」

ミーナ「何やるの？」

作者「暴露話とかが定番だろ」

秋「たとえば？」

作者「秋の身体測定の結果」

二人「ぜひぜひ」

秋「やめい！これ以上はダメ！」

作者「逃げないなら許してやろう。まあ、じゃあこの小説について
だいいか」

作者以外「適当！？」

作者「え〜と、国の名前」

ミーナ「何？それがどうしたの？」

作者「思いつきで決定」

秋「ヒドッ！一番最初からヒドッ！」

作者「世界の名前は……」

メグ「考えてないの？」

秋「いやまさか」

作者「すいません……」（全力で土下座）

ミーナ「ずさんすぎない?」

メグ「ひどすぎ」

作者「言い返すこともできません…なので!今回みんなで決めよう
と思います!」

秋「まさかだな」

メグ「じゃあ」

作者「メグ、アイスクリーム食べる?」

メグ「食べる」

残り二人「……」

作者「メグの好物はアイスだったりする。秋の好物は芋」

ミーナ「芋!?」

秋「お恥ずかしながら…」

作者「あの、世界の名前の件は?」

秋「そうだった。じゃあみんな一つずつ言ってきやいいんじゃないか？」

作者「そうだな。じゃあ……ミーナなんかある？」

ミーナ「そうね……アルカディア」

秋「なんか聞いたことがあるような、ないような……」

作者「気にするな。じゃあ次は秋」

秋「ポテトワールド」

作者「好物にはしりやがった！？全然小説の内容と関係ないから！」

秋「芋があれば、みんな仲良しだ！」

ミーナ「アキが壊れた……」

作者「じゃあ次……」

メグ「ドキドキ」

作者「恭介」

秋（恭介）「なんでだあああああ……！」

作者「やっちゃったぜ……！」

秋（恭介）「もういい、反論する気力が無くなった」

作者「というわけで、アルカディアに決定！」

秋「くそ！ストライキだストライキ」

作者「作者の権限で拒否。これぞチート！」

ミーナ「まあ、そういうわけで決まったから。落ち着いて」

全員「これからも『世の中平和なのが一番いいと、今更思っ』をよろしく願います」

一万PV記念（後書き）

レイ&ナハト「出番が…」

気にするな

それでは、本当にこれからもお願いします！

熊海苔でした！

12話目 浸入阻止限界地点（前書き）

今回からサブタイトルに題名（？）を書いていきます

12話目 浸入阻止限界地点

どうも、秋です。

今さつき戦が始まりました。てか、先制攻撃をしました。

『神の名において 汝、火の精霊王サラマンダーに命ずる

汝、我に力を示せ 煉獄！』

「我が王家に伝わりし光の精霊に力求む ライトニングマキシマム
！」

「水の精霊王ウィンディーネに力求む 氷海より出し氷王の吐息
絶対零度！」

うわっ、エグツ炎の柱と光の柱、氷柱ができてるよ

「ナハト、レイ！刀に魔力付与を頼む！」

【あいよ、じゃあ暴れ回ってくるぜ！】

【はいはい、無理はしないでね。秋】
「行ってくる！みんな後ろは、頼んだ」

あれだけの魔法をくらって残ってるって、どんなバケモノだよ…
まあ、さっさと終わらせますか

「龍殺し破、双虎炎！」

（リミッター解除）

手足に炎と重力を纏い、刀も炎と重力で強化している秋の攻撃を防
げる者は、

レアル軍にはいなかった。

剣で防ごうとする者は、剣ごと身体を両断され、

騎兵のほとんどが首のみを斬り飛ばされる。敵側から見れば鬼神の如き活躍だろう、

しかし、この戦いを生き残った者はみな口を揃えてこう言った

『ヤツは、鬼神の如き活躍をしていた、だが、我々に切り掛かる時
小声では、

あるが確かに「ゴメン」と言っていた』と…

「何者だ！ヤツらは！あんな化け物がウッドノースに居るなど聞いてないぞ」

「アステカ將軍！どうしましょう！」

「ヤツらよりも、ウッドノースの正規軍を狙って攻撃しろ！魔導士部隊攻撃開始！」

「はっ！サンダーを撃て！」

「ヴォウド隊長！敵は魔法で反撃してきました！」

「魔法は、ミーナ姫とメグ殿が防いでくれる！騎兵隊は、右翼より馬上槍で突撃

歩兵は左翼から攻める。中央は騎士団が応戦する」

「御意！」

「メグちゃん、他にどんな魔法が使える？」

「マスター級の魔法なら全部使えるよ」

片手間で上級以上の魔法を詠唱ありとはいえ連射している

二人もかなり恐れられてるのを二人は知らない

「くそ、やはりこの戦術で来たか。龍騎兵を3出せ。歩兵の方へだ」
「はっ！」

「やはり、敵の将はヴォルドか…」

「ナハト！こっちに来てくれ」

【なんだよ】

「空にいる龍騎兵をやる、だから乗せてくれ」

【その提案、のった！】

「んじゃ、行くぞ」

ナハトの背中に乗るか否や上空に向かって飛翔していた。

見えてきた！うわ、レウスみたいなのがまだ、わんさかいるな

「どう倒していく？」

【片っ端からだろ】

「上等！上に乗ってる人間は、俺が倒すからワイバーンは、頼んだ」

「なんだ！アイツは！？なぜ神龍種に乗ることができる！」

双虎炎で敵を焼き切る、龍殺し滅でワイバーンごとぶった斬る。
数分もしないうちに、龍騎兵は倒されていた。

レアル軍は未だにウッドノース軍を攻めあぐねていた。

「くっ！予備戦力の半分を騎兵のいる左翼に投入しろ」
「はっ！」

それは、歩兵はあまり積極的には攻めず、騎兵で片翼を潰すという戦術に

なれていなかったこともあるが、レアル側にエンチャントが出来る者が少ないことも

関係していた。ウッドノース側は放出系よりもエンチャントを重視した戦闘スタイル

だから、遠距離で力を発揮するレアルとは違い近距離で戦闘ができるこの状況が

ウッドノースに有利に働いていたからだ

「將軍！龍騎兵が全滅しました！」
「なんだと！？」

その瞬間、虎の子を失ったレアル軍は負け戦になるとアステカ將軍は直感した。

ここで判断のミスをすればレアルの未来を担う若者達を無駄死にさせてしまう

撤退命令を出さなくては、と

「撤退だ！」
「はっ！撤退！全軍撤退！」

これでよい、これでよいのだ

「アステカ將軍、元帥達がしんがりは任せろのことです」

「わかった。また、ともに酒を飲もうと伝えてくれ」
「はっ！」

「終わったな」

【齒ごたえのないやつらだった】

「まあ、下に戻ろう」

その時には、地上の敵もほとんどが倒されていたり撤退していた。
しかし、魔導士のマスター級は数名だけが残っていた

「うえー、まだ終わってないのかよ…、さっさと倒すぞ」

【俺は、やんねえぞ】

「わかってるよ…じゃあ行ってくる」

まあ、腕疲れたから双虎だけでいいか…

てか、この高さから飛び降りるって、俺バカじゃね？

「ちよっ、ヤバいって…あゝもー！エンチャント！」

手ではなく足に魔力を集中的に集める。

「ほっ、ンで、まあめんどくさいけど走るか」

魔導士に向かって斬り掛かる。まず…一人！

「くっ、ヤツに攻撃を集中的に撃て！」

「たく…だから嫌なんだよ…えーと、ほい」

魔力を左手に集めて障壁を作る。そして斬り伏せる

「くそっ、な、なんだヤツは！？」

「すまん、静かに眠ってくれ」

「う、うわあああああああ」

マスター級なのに錯乱するなよ…危ねえな。まあ、これで最後だ！

「ふう、これで終わりつと」

『秋ちゃん、大丈夫？』

「「アキ」」

「あゝはいはい、生きてますよ。う、うええええええ」

【秋ったらまた？】

『まただね…』

ほ、ほつといてくれ！

「ア、アキ、城に来てもらっぞ。いいな？」

「今回も拒否権はないんですね？いいですよ行きます」

「助かる。この戦で一番貢献した人を連れて行かなかったら王様に怒られてしまうところだったんだ」

「それじゃあ、行きますか」

「王様！」

「どうした？」

「朗報です。戦が終わりました」

「なんだと！？それは本当か」

「はい、アキ殿達の独壇場だった模様です」

「戦が終わったのだ、パーティーの用意をしろ。貴族も呼べよ？後で色々言われても困るからな」

「わかりました。すぐに料理の支度と皆さんを呼びます」

「うむ、頼んだぞ」

しかし、戦争を一日で止めるとは…やはりただ者ではないな。
だが、こちらに牙を剥かないように手を打つ必要があるがな…

「その名前で呼ばないでくれ…」

「いえ、“黒銀の鬼神”様を、その名前以外で呼ぶなんて滅相もございませぬ」

「そもそも黒銀って何よ！？何色なんだよ！」

黒銀って何？ぶっちゃけメタリックブラックじゃね？

「……いえ、黒銀の鬼神様は、貴女様だけですから！」」「」

「様だけはやめてえええええ！」

その後、説得に移動時間をすべて使ったのは秘密だ

「おぬしがアキ殿か？お初目にかかる。ウッドノースの王セントラルだ。」

さっそくだが、今回の勝ち戦のパーティーに参加して貰いたい。よろしいか？」

「別に大丈夫ですよ。明後日にはウッドノースを出発しますけど」

「ならば、前回宿泊した部屋で準備してくれ」

無言で頷いておく

パーティーね

この服装で出られるかな？まあ、なんとかなるか
異次元にフォーマルウェアがあるしな。

「失礼します。パーティーでの御召し物をご用意しました」

「はい？あのそれってドレスとかじゃないですよね？」

「ドレスですよ。可愛いんですから、ちゃんと着飾らないとまらないです」

いや、そんな熱弁をされても、中身男ですから。

でも、ドレス可愛いじゃねえか。コンチクショー！

「着なきやダメですか？」

「ダメです。そんな服装でパーティーには出させません！ちゃんと着て下さい！」

「でも」「無理矢理着せますよ？」あゝ、何か無性に一人で着たくなってきたな！

「よろしい、じゃあまずコレをどうぞ」

「着なきやダメ？……うう……はい、そうですね。こんな服装じゃダメですもんね……」

着ますよ、着ればいいんですよ！

「駄々をこねないでください！」

「じ、じゃあ背中に傷がないか見てくれませんか？」

「それくらいなら、お安いご用ですよ。……ふむふむ、薄くですがありますね。

隠れるような物にしますか？」

「いえ、確認したかっただけですから。それより何色が似合いますかね」

「そうですね……髪と瞳が黒ですから……青なんてどうでしょう？」
「じゃあ、それにします」

しかし、自分に免疫がないからなゝ、風呂なんて何回ぶっ倒れたことか……

しかも、スタイルよくないけど見た時のダメージは大きいし……

全部脱がないからなんとかなるか……

「まだですか、早くしないと着替え手伝っちゃいますよ」

「ちよつ、それだけは勘弁してください！」

「じゃあ、手伝いますね」

「なんで!？」

「ノリです。大丈夫です」

「大丈夫じゃありません!ノリでこないてください!」

急げ俺!スピードに俺の貞操がかかっている!

でも、後ろ留められない、腕吊りそう

「ほら、一人じゃ着れないじゃないですか、だから手伝うと言ったんです」

「お手数かけま…ひつ、ど、どこ触ってるんですか!」

「いや、ノ……」

「ノリでとか言ったら、はっ倒しますよ?…ひゃつ、また!さわ…んつ…てますよね!？」

「いえいえ、面白いものだからつい……」

はっ倒してもいいかな、この人…我慢の限界と言う物があるんだと思っただよ

でも、女の人だから追い出すだけにするけどさすがに…

「出てってください!!!」

「うわっ!」

ピシヤッ

カチャッ!

これで安心だなっと

よし、背中のヤツ留まった

「どう？似合ってるかな」

「……………」

「うう、やっぱり似合ってないか。でもまあ、これでパーティーに出ます」

「……はっ、危ない危ない、では服が決まったのであの部屋で待っていてください」

ドレスを着たまま部屋に帰還、パーティーが終わるまで着替えてはダメとのこと

「ただいま〜疲れた〜」

「うわ〜綺麗、それで感想は？」

「ん？感想？ミーナどゆこと」

「その感想」

痛いところをついてくるな。ん〜どう言ったものか

「はつきり言うとか可愛いと思う」

『秋ちゃん、かなり乙女化してるね』

「言うな、気にしてるんだ」

「アキ様会場においでください」

「は〜い、じゃあ行くか。ミーナ、メグ」

『うん』

「エスコートよろしくね アキ」

またあの長い廊下を歩くのか、気が滅入るな…

『「っ、着いた〜」』

「まったく、今からパーティーだと言っのに何疲れてるの？今からの方が大変なんだから」
「さいですか…」

やだなー 一番目立つの

「ふ〜……よし！じゃあ行くぞ」

おおおおお！

やっぱ帰りたいたい。迫力が凄すぎる！
あと貴族のでっぷりしたオッサン達の視線がウザい

（ほお、美人ではないか）

（父上、彼女を嫁に欲しいです）

（いや、わしの愛人に……）

「そこ変な会話をしない！」

「「「すいません！」「」「」

『秋ちゃん人気だね』

「やだよ、こんな人気…あれ？ミーナは？」

『王様に連れてかれたけど、なんで？』

「ん？いやメグなら大丈夫そうだからいいけどミーナって俺より二つ年上じゃん？」

（あれで十五だと……）

「外野黙れ！」

『うんそれで？』

「変なヤツに相手されてないかなと、心配で…」

『じゃあ呼んでくれば？』

「そうだな、呼んでくるよ」

周りのヤツらは避けたいしな。てか人多！
進むのが大変すぎる…
ふう、やっかついた

「アキ？どうかした？」

「え」と……姫様、私と一曲どうですか？」

「ッ！……はい、喜んで」

その時はミーナが心から笑ってくれて、すごく嬉しかった。
踊れるか心配だったけれども…

12話目 漫入阻止限界地点（後書き）

テストなんか嫌いだー！

どうも熊海苔です。つい叫んでしまいました
今日は連続投稿なので、また

13話目 Shall we dance?

いや、ダンス難しい！

「ほら、誘つてどうしたの」

「ダンスなんて初めてだし、ドレスも踊りにくいし…大変なんだよ」

そもそも、誘った俺が馬鹿だったんだが…

「逆にリードされてるな私」

「そうだね。あのさ」

「ん？どうした？」

「アキさ自分のことを“私”って言うの慣れてないでしょ？
なら、仲間と喋る時は無理に言わなくていいよ」

「いいの？」

「その代わり、人がいる時は口調も変えること。いい？」

ああ！卑怯だ！うーんでも一理あるな。従うしかないな

「その代わり魔法教えて」

「まだ知らなかったの！？」

「うん…剣術だけでいいかなと思ってたから」

「じゃあ、明日は午前中買い物、午後練習でいい？」

「わかった」

「まあ、曲も終わったことだしパーティー楽しんでね

あと、心配してくれてありがとう」

あーばれてたか、元気になってくれただけ儲かりもんな。
んあ？貴族のボンボン達動くのが早いな。囲まれた

「君がアキかい？僕と一緒に踊らないか」

「いえ、私と踊ってください」

「抜け駆けとは卑怯だぞ」

「あの、落ち着いてください。お願いします」

手間が掛かるなコイツら、落ち着きというものを持てよ
まったく…

「どうして私なんですか？他の方のほうがお綺麗じゃないですか
見た目もこんなんですし」

「そこがいいんだよ」

ちっ、コイツロリコンか、面倒だなロリコン
しかも、ニコニコしてるよ。うう寒気が…

「いえお断りします（ナハトでどうかしよつと）」

「相手がいるのかい？」

「僕じゃ役不足なんだね…」

「では、これで…失礼します」

（ナハトへ出てきてーあ、人の状態でね）

【わかったよ、話は聞いてたから。なんで呼ばれたかは察しがつく】

（成長したなナハト）

【あん？どういう意味だ】

（だいぶ大人しくなったって意味だよ）

バルコニーに行かないと目立つと、ナハトに言われ、とりあえず向
かうことに
出てきたナハトは、いつもと服が違い燕尾というヤツ（後で教えて
貰った）

を着ていて、ガラの悪い兄ちゃんではなく面倒見のいいお兄さんという感じ
になっていた

「ナハト… かつこいい！」

【お前なに抱きついてんだ？】

「あゝいやゝつい…」

【まあいいや、踊るんだろ？早く踊ろうぜ】

「今夜だけ口調を上品にして！お願い！」

これをやると大体の人が頷いてくれる。上目遣い

【ちっ、分かったよ。これでいいかな？】

「ナハト最高！」

【早く踊りませんか？（周りの男どもの視線が痛い）】

「あ、うん、そうだね」

促がされて踊ったけれども、ナハトはなんでこんなに上手く踊れるのだろう？

けれども、気持ちよく踊ることができた

【ほら、水持つて来たぞ】

「ありがと。そういえば、なんであんなに上手く踊れたんだ？」

【レイに相手をさせられたから】

「なるほど… 納得した。でも今日はありがとね」

【別にいいさ、今現在楽しませて貰ってるしな】

悪戯が成功したような笑顔をナハトが浮かべている

「一体なにをした」

【それ】

「水？これがどうかし……これお酒！？」

【一気飲みしやがって、半分で止めるつもりだったんだけど、お前がー気

しちゃうから止められなかった。まあ、楽しい時間をありがとう。
んじゃ、俺は戻ってるよ】

「あつちよまつ……逃げられた」

あゝ騒いだら酔いが回って来たかも

『秋ちゃん、どこ〜』

「ふえ？ここらよ〜」

呂律が…回らなくなってきた

『秋ちゃん！？どうしたの？！』

「お酒のんだらこうなったんらお？もつと飲んでくる〜」

くただいまから音声のみでお楽しみください〜

「おじさ〜ん、お酒ちようだい〜い」

「これは、アキ殿酒はまだ早いはずぞ」

「む〜、いいもん自分で取ってくる！」

「ああ！アキ様お酒を飲んで！」

「あははははははは、もっともつと〜」

「なんの騒ぎ？」

「ミーナ様、アキ様を止めてください。

勝手にお酒をがぶがぶ飲んでるんですよ！」

「アキそれくらいに「お姉ちゃんだ！」お姉ちゃん！？」

「一緒に飲も〜よ〜」

その後パーティーが終わるまで秋の暴走は続いた

「うゝ気持ち悪い…ふらふらする…」

『ほら、しっかり歩いて』

「ここまでなるまで普通飲むかな」

「部屋まだ？」

「あとちよつとだから、頑張つて」

『やっと着いた』

「ううこのドレスじゃまだなうう脱げない…」

秋がうんうん唸りながら、ドレスを頭から脱ごうとして暴れてる
実にかわいい、愛でたい！

「まあいいか…おやすみ」お姉ちゃん、メグちゃん…」

『「……………」』

少しの静寂

『今ちゃん付けで呼ばれた…』

「まだお姉ちゃんって…」

二人が固まっているところで無邪気な寝顔で寝ている秋がいた

13 話目 S h a l l w e d a n c e ? (後書き)

秋を暴走させすぎました

14話目 一目惚れ

「今からホントに買い物に行くのか？」

「昨日約束したじゃない」

「昨日は……うう頭痛い気持ち悪い」

どうも、俗に言う二日酔いになっている秋です。

いやはやこまでお酒に弱いとは思っても見なかったよ

『じゃあこれ飲んで！』

「なにそれ？薬？飲む、ぜひ飲む、いや飲ませてください！」

日本語がおかしい？はっ、そんなこと今はどうでもいい！

この症状が治まるならなんだってやるさ

「うわっ食いつき方が凄いわね……」

「そういえば、二人とも朝から何でニヤニヤしてるんだ？」

「それは、昨日の晩にね、メグちゃん」

『そうだね、あれは強烈だったね』

なんか墓穴掘った気がする……使い方がおかしい？ほっといてくれ

「ほら、さっさと行くぞ！」

「『ふふふ』」

さてと、男に帰れるようになったし今から、一回物陰に隠れて男に戻って

脅かすか

そうと決まれば、ダッシュ！

「あつちよつと待って！」

『じゃあ私はここらでおいとまするね』

「あ！裏切り者！」

ふうここまでくれば大丈夫だろう
ほい、変身つと

「久々に戻ったな服装はつとOK！」

さてミーナを探すかな

まったくどこに行つたのよ！アキは…

「しかも私だけ置いてけぼり…」

別に悲しくなんかないんだからね。

これはその…アキが心配なの！いい！？わかった？

「アキ〜どこ〜」

く探し出して約30分

「アキ〜？どこ…うわっ！」

そこでミーナは小石で蹴躓いてしまった。

ゆっくりと近づいてくる地面、しかしミーナが地面とキスすることはなかった

「大丈夫か？」

一人の少年が抱きとめてくれたのである（ミーナ主観）

「あの…ありがとう…」

「別にいいよ。お礼なんて、俺はそんなつもりで助けた訳じゃないし」

その時ミーナは、不覚にもその少年にドキッとしてしまった
それを恭介（秋）は知らない

「あのお名前は？」

「ん？俺か？恭介だ」

「恭介さんですか。私はミーナと言います」

「うん、知ってるよ」

そうだ！この人にアキを探すのを手伝ってもらおう

「あの人を探しているんですけど…手伝っていただけませんか？」

「別にいいけど誰を探してるの？（俺だろうけどな）」

「私の最愛の妹なんですけど…」

「わかった。手伝おう（ツッコミどころが多すぎる！）」

やったー！誘えた誘えた！

本来の目的を見失ってきているミーナだった

14 話目 一目惚れ（後書き）

3つ目の連続投稿です
もう書き貯めがありません。

あしからずです

15話目 休憩中だったはず…

どうも、秋です。

緊急報告です。ミーナが男に戻った状態の俺に恋したようです
メグなんか、さっきから笑いを堪えるのに大変そうだ

「で、その恭介さんとやはらは、どんな人なんだ？」

「聡明そうでカッコイイのだけれど可愛くて、とてもいい人よ」

かなり惚れこんでいるようで…

その恭介さんは、目の前で話を聞いているよ〜もう告白しちゃってる
よ〜

と、言うこともできないからちゃんと聞き役に徹してる訳なんだよな
それをいい事に熱心に恭介の良さを語り始めてるし

「でねって、アキ聞いている？」

「ん？ああ、聞いているぞ」

『ミーナは恭介に会いたいの？』

「会いたいに決まってるじゃない」

『じゃあいい事教えてあげるよ。恭介は、ミーナのすぐ近くにいる
』よ

はかつ！なんて事を言ってるんだよ。

はあ、もういいよ、ミーナに白状する。

「ミーナ、悪いんだけど」

「どうしたの？アキ」

ここで俺は恭介になる。

後ではらして色々言われるより今言つといた方が被害が少なそうだからかな

「恭介は、俺だ」

ミーナが言葉もなく口をパクパクさせている
少しの間の静寂

「じゃあ、あそこで私を助けたのも」

「元に戻っていた俺だ」

「私とのデートに付き合ってくれてたのも」

「俺だ。てか俺を探すためじゃなくて、あれやっぱりデートだったんだな」

「うう、舞い上がったた私って一体……」

【久しぶり秋】

「おう、久しぶり、今度は何やってたんだ？」

【ナハトが競馬で一山当てたから遊びに行ってたのよ】

相変わらず向こうで好き勝手やってるな

「ナハトは？」

【大食い選手権にお金目当てで出てるわよ。今現在】

「なんかもう、人生エンジョイしてるな。なんの大食い？」

【激辛ラーメン】

「うっわ、かなりきつくない？のど焼けるよ？」

【ナハトだから、大丈夫よ】

「そうだなww」

『そこで納得しちゃうの！？』

「ナハトだもんな」

あの傍若無人かつ戦闘狂兼負けず嫌いなやつだもん

負けそうになつたら無理やり勝とうとするようなヤツだし

後から聞いた話だとナハトはちゃんと優勝したらしい25杯完食で

「てい！」

「はう！空手チョップはさすがに痛いよ…」

「人の話を聞いてないからよ」

「うう…ごめん」

「レイは帰っちゃったから…まあいいか、そういえばノアース姉弟は？」

「さきに魔王の所に行くって」

なんか倒したら貰えるのか？

ジャガイモ？里芋？長芋？なにが貰えるんだ？

と、いけないいけない、芋ワールドに入るところだった…

「まあ、後で追いかければいいか。にしても何しようか今から…暇だし」

コンコン

ドアが小気味いい音を出したかと思ったときにはメイド長さんが入ってきてました

俺を着せ替え人形にしようとした張本人ですよ

「あら、アキ様にメグ様、姫様も帰っておいででしたか。アキ様、王様がお呼びです」

「わかりました。謁見の間でいいですよね？」

「いえ、王様の自室へ来るようにとのことです。場所は姫様の部屋の3つ右側です」

「ありがとうございます。じゃあ、行ってくるな」

「いつてらっしゃい」

『がんばれ』

「はいはい、どうも」

やれやれ、城ってなんでこんなにデカイかな。移動がめんどくさい……と、思いつつもちゃんと部屋に向かう秋だった

コンコン

「入ってよいぞ」

「あ、失礼します」

ここも変わらず……と、言いたかったが和風に言うと素朴な感じの部屋だった

まあ、世の中わからないこともある訳さ。たぶん……

そこにいたのは、初老を迎えた威厳のある髭をたずさえた穏やかな表情の王と

気品がありミーナと似て少しつり目の優しそうな王妃がいた

「どういった、用ですか？」

「うむ、実はなアスラ・マク　王様、自重してください。それは、言ったらだめです」すまぬ

ええとロストテクノロジーの遺産の回収も頼みたいのだが……よいかな？」

「魔王の城に行く道中でいいなら、いいですよ」

「それとなんだが、ミーナの近衛騎士になってくれぬか？」

このえきし？なにそれ？めんどくさいのかな

「簡単に言つとミーナの専属騎士だ。ミーナを守りつつ戦ってくれればいいだけだ」

「ようするに、ミーナをずっと守っていてくれ…と、言うことです
ね？」

「うむ、その通りだ。こちらも頼めるか？」

「なら普通に大丈夫ですよ」

「ならば、これを受け取って貰いたい」

王様 セントラルが取り出したのは深紅の剣だった。

受け取った秋が鞘から刃を抜くと拵えと同じ深紅の刃をもった立派な剣が現れた

「その剣はエクスク あなた？」 すまん……………だが王家の秘剣であることは

理解しておいてくれ」

「わかりました。では、失礼します」

「どうでした？彼女は」

「ふむ、かなりいい子ではないか。彼女になら娘を安心して預けられる」

「ふふ、私も同意見よ。これからが楽しみね」

その後、王の部屋を出た秋は城内をぶらぶらしていると訓練場から声が聞こえてきた

ふと気になり訓練場に立ち寄ってみると騎士団の面々が剣道の稽古をしていた

みんな上手くなってはいるが振りがあまいと言うか、ちゃんと左手で振れてない

「みんな、こんばんわ」

「アキか、どうだ？我々も上手くなっただろう？」

「うーん……しいて言うなら、右じゃなくて左手で振ること握るのは小指と薬指だけ」

あとちゃんと振りかぶっていいよ」

「アキ厳すぎるよ……もう肩が取れそうなほど痛いんだから」

「だろうね。じゃあ今日は私が見るよ」

「うむ、頼んだ。私では見きれない者が多いから助かった」

「じゃあニーダから……うん、右手に力が入りすぎ、左で振って」

「わかった、指摘ありがとう」

「次はアスク、ずっと私が見てたんだから注意した事に気をつけてやってみて」

「わかった」

「うん、そうそう、いい感じ……調子に乗ってちゃダメだからほら、力が入ってる」

ホントみんな上達が早いな、剣じゃなくて刀なんか持ったことないだろうに

とくにアスクとニーダ二人ともメインが、ランスとか戦斧なのに
なにこの上達度……ええい！ウッドノースの騎士はバケモノか！

「セトラさんが次です」

「ふふふ、僕はかなり上手くなったよ？」

「調子に乗ってないで早くやってください」

「わかった」

うわっ、言うだけあってかなり上手いよこの人

「けど……雑すぎだろ。この人」

「ガーン!!」

「最後にヴォルドさん。お願いします」

「ああ、こちらこそ頼む」

ヴォルドは、他の騎士団のみんなよりも格段に上手く出来ている

「さすがですね。一番上手いですね。どれだけ稽古したんですか？」
「毎日23時間ほどやったな」

すごっ！人間の域こえてね！？マジでバケモノか！？

「ええと……大丈夫っぽいので私は帰ります」

「うむ、時間を取らせてしまつてすまなかつた」

「いえ……」

多少疲れながらも部屋へ向かった
自分の過去をみんなに話すために…

15話目 休憩中だったはず…（後書き）

もう一回更新します

一休み二回目 追憶

「そろそろ、一段落したことだし私、うーん俺の過去を話そうと思う」

『無理して言わなくてもいいからね？』

「大丈夫だ、これはみんなにも、聞いてもらわなきゃいけないからさ。」

うんじゃ話すぞ」

これは、まあまあ昔の話になる。ええと、12歳の時の話だ。

みんなは、自分がこの歳の時何をしていたか覚えているか？

俺は憶えている。あの日あんなことさえ起こらなければ俺の人生の歯車は、

狂わずに生きてゆけたのだから…

その日学校にいつも通りに行き席に着こうとした時、机に落書きをされている

ことに気がついたそこには、死ねやら女男などの罵詈雑言が書いてあった

まあ、そのように言われるのは慣れていた。

なんせ、容姿が容姿だったからだ、目が大きく、肩まで伸びた黒髪身長も女子くらい、男らしさの、おの字もないような感じだった。

高校までにかなり背が伸びたけれど

まあ、俺は全く気にしていなかったのだが…

そのせいで、男子から中二が終わるまでに二桁の告白

それが原因で女子からのイジメが悪化

美人の姉と街中を歩いている姿を友達だったヤツに見られて

男子からのイジメも悪化

話は変わるがこれから関係あることだ

俺の姉には、数年前からストーカーがいた。

ほとんどは、俺が自分の容姿を使ってフルボッコにしたのだが

その時のストーカーが相手にされないことに逆ギレして、

その日の夜、襲いに来た。これまでどうり素手だったらなんとかな
っていた

のだがストーカーは包丁を持って襲ってきた。

ここからは、鮮明に思い出せるから会話の部分も入れようと思う

「恭介！た、助けて！」

「またストーカー？」

姉ちゃんは、すごく動揺していた。いつもならゆるい雰囲気なのにだ

「そうなんだけど、今回ののは殺しにきてるんだよ！」

「ッ！姉ちゃん危ない！」

視界の隅に包丁を振り上げた男が姉の後ろにいたから俺は姉を抱い
て横っ飛びに

飛んだ。しかし、反応が遅れたせいか背中を深くはないが切られて
しまった

「きよ、恭介！大丈夫！？」

「なんとかね。それより家に逃げ込もう」

「うん」

姉には強がってみたけどかなり厳しい、出血とともに力が抜けてい
くような

感じた、とりあえず包帯で止血しておき親に連絡をしておく

「あつ、母さん？俺だけど警察呼んでくれない？」

『どうしたの恭介』

「ストーカーが姉ちゃんを殺しに来たんだ。だから早く！」

『わ、わかったわ、それでどこにいろの？』

「家の中、木刀もあるし大丈夫かなと思って」

『怪我しないでね？』

「わかったじゃあ後で」

まあ、嘘は言っただけでなんとかなるだろう

「ふふふ、やっと追い詰めたよ？優奈ちゃん」

「やだこないで！」

「君が悪いんだろう？僕を無視して」

「のされる！変態野郎！」

手にした木刀を横に薙ぐ

しかし、ストーカーに包丁で防がれてしまった

「君が女の子だったら良かったのにね」

「うるせえ！姉ちゃんを…優奈を離せ！」

「やだよ。コイツは、僕が殺すんだ。いたぶってからね」

「ッ！」

姉ちゃんの腕から血が出た。

あんなヤツに姉ちゃんと俺は殺されるのか？

いやだ。死ねない死にたくない。俺にだって意地はある

力の差は歴然としていた、けれども俺が尻尾を巻いて逃げたら

姉ちゃんが死んでしまう

それでいいのか？

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だいやだいやだ

イヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ

イヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ

コンナトコロデシヌノ？

ダレモマモレズニ？

ナニガテンサイケンシダ、シヨセンアソビジャナイカ。

ダレモマモレナイチカラナンテナイニヒトシイ

それくらいなら、あいつを殺してでも止める

「なんだ、諦めたのか。つまんないの」

「こ……でも……やる」

「なんだって？」

「殺してでも止めてやる！」

「ひっ！」

たぶんその時、俺は殺気立ってたんだと思う。後に後悔するんだから
途中の戦いはあまりにグロテスクなため略すが結果を言っと

俺はそいつの腹を木刀で刺していた。

まあその後、出血の量が多すぎて俺はぶっ倒れたけどね

その後俺は3、4日病院で寝ていたけれども

姉ちゃんに叩かれて起きた。寝起きは最悪だ

「恭介！なんであんなことしたの！」

「姉ちゃんがたった一人の姉弟だから失いたくなかったんだ、

それであいつは、懲役何年？殺人未遂だから結構な時間出てこない

と思うんだ

。それで何年？」

「ストーリーなら、」

それを聞いた時すぐには理解できなかった。姉の口はこう告げた死んだと、しかも殺したのが俺

警察は正当防衛としてくれた、けれども俺はあんなヤツとは言え殺してしまったんだ、この手で人を…

だからメグが来て異世界に行きなさいって言うてくれたときすごく嬉しかった。

姉ちゃんに助けられもした、親友はそのことを気にせずに話しかけてくれた

それでどうにかなると思った。けれども周りのやつらは

人殺しと言ってきた、死ねなら耐えられた。女男も耐えられたでも、人殺しって言われるのは耐えられない。

自分でもそのことで自分を責めていたんだから

「と、まあこんな感じだ」

「あのさ、アキ」

「どうした？」

「私達とお風呂入りたがらなかったのは、背中 of 傷のせい？」

「ん、そういうことだ。けれども、昨日はこの傷を隠してちゃ、前に進めないと思ったから背中 of 開いたドレスを着た訳だしな」

『やっぱり、その話は秋ちゃんにとっては辛いよね』

「こんな私だけでも、これからの旅について来てくれるかな？」

『もちろん』

「僕は、隊長の所に戻ります。いや、そういう意味じゃなくて

変に気を使っちゃいそうだから…」

「わかった、じゃあなアスク」

「はい、御武運を師匠」

「師匠はやめて…／＼／＼」

『秋ちゃんらしいな』

「馬鹿にしてる？」

「まあまあ、じゃあお風呂に行きましょうか」

「だが、断る！」

「ダメ逃がさないわよ？」

「ちよつ、やめっ」

『ミーナ早く行こうよ』

「姫様、のぼせないようにしてくださいね」

「助けてくれないの！？」

「大丈夫、痛いのは最初だけらしいので！」

『その時は、私が秋ちゃんの貞操を守るからだいじょーぶ！…！』

一休み二回目 追憶（後書き）

まだ更新します
全力で（笑）

16話目 召喚されし者

話は少し過去に遡る

「17になったら に来てね」
「うん、いいよ」

そんな約束を忘れて今日、僕は17回目の誕生日を迎えた。

「「誕生日おめでとう。和馬」」
「ありがとう、みんな」

そう僕は、大切な彼女との約束を忘れてすごしていた

「うーん、なんか忘れてる気がするんだけどな」

「いつもの夢のことか？」

「うん、大地はどう思う？」

「考えても仕方ないだろ。それよりコレ食ったら外行こうぜ」

「早く食べないと無くなるわよ、和馬」

「あつ、全部食べないでよ？姉ちゃん」

「こういうものは、早い者勝ちよ」

そうこれまでどつりに平凡な生活を送ると思っていたこれまでもこれからも…

『はや……きて』

「え？なんか言った？」

「ん？なんも言っていないぞ」

「あれ？うん、じゃあ今のはいつたい…」

「まあ気にするな、ケーキも食い終わったことだし外行こうぜ」

「あつ、ちよつと待てよ！大地！」

そうそう僕の名前は滝本和馬って言います。
今年高二になりました

「うんでさ、うんそうそう、それで…」

隣で僕の姉ちゃんを口説こうとしてるのが大地

「あつ、おい信号だぞ。和馬！」

「え？」

考え込んで赤信号を渡るうとしていたらしい
目の前にはトラックが迫って来ている……

「和馬！？」

最初に感じたのは、浮遊感、次に地面との衝突による痛み。轢かれ
ただ僕死ぬのかな…

「和馬！ねえ！和馬！」

姉ちゃんがなんか叫んでもよくわからない
周りにいた友達もなんか言ってるけど聞こえない

薄れ行く意識の中で僕は彼女と再会した

彼女は、空に浮いていた

咄嗟に彼女を見失ってはいけないと動かすと激痛の走る手を伸ばし

た。

彼女に届くようにひたすら上に上にし
かし、そこで僕は意識を失った。

16話目 召喚されし者（後書き）

今日はもう無理です…

指がもちません…

A r i s h i a様の小説にクロスオーバーさせていただいているので
ぜひ、ご覧になってください

17話目 魔王降臨

意識を失った後僕は、真っ暗な場所にいた

「ここは？」

「やっと会えた。この時を待っていたよ和馬君」

「やっぱり君か…ここはどこ？」

「世界の狭間、死の世界とも呼ばれてる場所」

死の世界… やっぱり僕は死んだんだな。早死にか

「それで君は？」

「やっぱり名前は覚えてないか… 私は雪に華って書いて雪華、和馬も記憶にあるでしょ？」

「まあね… まさか17になったら死ぬなんて考えてもみなかったよ」

「あつ、そろそろ時間か… じゃあ後でね。カズくん」

後でね？ いったいどういう…

「ん？ 向こうから光が差し込んできてるな」

なぜか脚が勝手に光に向かって動きはじめた

真っ暗闇を抜けるとそこは祭壇の上だった

「祭壇？ いったいここは……」

「やっと現れたか、来るのを楽しみにしていたぞ。魔王よ」

「雪華じゃないよな…… 誰？」

妙な言葉遣いの赤い髪の美女は、変なことを聞くなと、小声で言ったが名前は教えてくれるようだ

「クレアだ」

「はあ」

「はあ」とはなんだ、私の名だ。以後そう呼べ」

女 クレアは少し怒っているようだ。というか、ホントどこどこだ？

「ここは魔王城だ。和馬、お前は魔王として召喚された」

「誰に？なんで僕なんだ」

「私と雪華だ。お前は人間の中で一番基本スペックが高かった、それだけだ」

でも僕は体力テストでは全部平均だったはずなのに能力が高いって矛盾する気が…

「とりあえずそのことは後回し。雪華はどこにいる？」

「今の時間帯なら部屋にいるはずだ。部屋はそこを右に曲がって9つ目だ」

「ありがとクレア、じゃあまた後で！」

「まだ若いな、とっ、仕事はまだあつたな」

9つ目って言うてたけど部屋が一つ一つ大きすぎてかなりの距離を歩かなきゃなんないな

「あ、あつた……雪華いるか？」

「ちよつと待ってて……よく来たね。カズくん、さあ入って入って」

「え？あ、ちよつ」

無理矢理入らされてしまったが、またあとで入る必要があるようだ

……汚い

「カオスだな。あとで掃除しにくる……」

「あ、いやゝ片付かなくて……それより聞きたいことは、ないの？」

「ある。まず雪華は何者だ、クレアは？呼んだ目的は？なぜ僕は生きている、以上だ」

「はわわわわ、一気に言わないでよ！……えゝと、私は魔王の婚約者で、クレアさんは魔王の側近。」

理由は勇者が来るかもしれないからと、ロストテクノロジーの回収。最後に私とクレアさんで再転の魔法を使ったから」

「えゝと、まずロストテクノロジーって？失われた技術？」

「んとね、どちらかと言うとその技術で作られた物だね」

オーパーツみたいな物かな？それは、楽しみだ

「じゃあ、再転の魔法って？」

「簡単に言つと、まず人が死ぬと器と魂に別れて、魂は世界の狭間に行くわけ、

その魂を魔力で召喚主の世界に引きずり出して新しい器を与える魔法」

「かなり大変ばいな。聞いた感じ」

「だから私とクレアさんとじゃなきゃ出来なかったの。他の人じゃ魔力が足りないから」

「なるほど、話が変わるけど僕はどうなんだろう？」

「何が？」

「んゝ、能力みたいな感じのあるかなつと思って」

あつたらいいんだけど…

自分の身を守るし

「なんか一つは、絶対つくらしいよ。稀に二つ持つてる人がいるらしいけど」

「例えばどんな能力があるんだ？」

「え〜とね、武器の召喚、変幻、召喚、極稀に魔眼を持っていたりする」

雪華は、ホントに稀だけどねと呟いていた。なら僕はどんなんだろう？

「じゃあ僕はどんなんだろう。というかどうやって調べるの？」

「私が調べてあげようか？」

「いや、私が調べよう」

「クレア（さん）！？」「

ん。どうした？」

「いきなり出てこないでください。ビックリするじゃないですか」

「そうガミガミ言うな。私の方が能力のことまで、調べられるだろう？」

「えっと…じゃあ、お願いします」

クレアは、僕の頭に手を掲げて目をつむった

「ほ〜、おもしろいな…三つか、しかも魔眼に武器、変幻か…規格外なヤツだな。お前は」

「三つ！？それ本当なのクレアさん！」

「私が嘘をつくとしても？「思います！」……」

「あー、気を落とさず…」

「ああ、ありがとう。では話を戻そうか、武器は大鎌、変幻はなんでも可能だ。問題は、魔眼だ」

「なんでですか？」

「うむ、ではもっとも忌み嫌われている魔眼は？雪華」

「断罪の眼でしたっけ」

「その通りだ。そして和馬の魔眼は、“断罪の眼”だ」
「そんな、あの眼は伝承だけなんじゃ……」

本人を置いてけぼりにして話を進めないでよ。

話の中心人物が置いてけぼりってどうかと思うんですが。

「質問なんですがなんなんですか？ “断罪の眼”って」

「別名狂気の断罪者、回りにいる者を関係なく殺すことがある魔眼だよ。」

所持者の意思とは関係なく、な」

嫌だなその魔眼、関係なくってことは仲間も巻き込むことになるもんなん

「それは、どんな条件下で発動するの？」

「通常状態ならば任意で使えるが暴走については、流石に私も知らない。」

断罪の眼は情報がないのだ。他の力ならば使い方は、教えられる」

「その時は、頼むよ。それにしても断罪の眼、か。厄介な物を手に入れちゃったな……」

これからは、特訓しなきゃダメだなあ

「それでは、これ以上話しても進まないから解散だ。
和馬、明日私の部屋に來い。お前の隣の部屋だ」

「……そういえば、僕の部屋ってどこ？」

「私がついでに案内しよう。いいな？ 和馬」

「わかった。雪華また明日な」

「うん、またね」

そのあとクレアと二人で並んで歩いていると、だいたいすれ違う人達に誤解をされて

は、訂正することをしてしているうちに、5分で着く距離を15分もかかって移動した。

「ついでにあがっていくか？雪華の部屋より綺麗だぞ。」

「あ！綺麗で思い出した。雪華の部屋掃除しないといけないんだっ
た。じゃあ明日行くな」

「ふむ、そうか。ではまた」

え〜と、ほうきにちりとり、雑巾、バケツつと、

まさかこの世界で初めての仕事掃除なんてことになるとはね

「雪華〜掃除しに来たぞ!」

「あつ、ちよつと待って〜うん入っていいよ〜」

「それじゃ、お邪魔し……………さつきより散らかってない?」

「えへへへ、散らかしちゃった。カズくんが来るから大丈夫かなと思
って」

「は〜、だからと言って散らかさないでくれよ……………さてと、やり
ますか」

全般的に床が散らかってるだけか…じゃあ棚にしまえばなんとかな
るな

「じゃあ、物を棚に上げるから、それは手伝って」

「うんわかった」

「それじゃあ、本はその棚に入れて…あー…違う、そっち、そうそ
うそれ」

雪華に指示しつつも僕は、本を種類別に分類して床に積み上げる。そして空いた場所からほうきて、掃きゴミをちりとりで回収する

「カズくん、どう？」

「ん？ああ、その本とかはあっちの棚：うんそれ、あとは雑巾で床を伏ただけだから

ベッドの上において」

「わかった。あとちよつとだから待って」

「ちよつと早めにな。それでも2時間は経ってるからさ」

え？経ってないだろ？いえいえ、経ってるんですよ
これが、描写の時間が少ないのは謝ります！作者が！

「ラストスパートだー！」

床をホコリが残らないように、かつ素早く拭き取っていく

「「終わった」」

「今何時かな？」

「ん」と、6時過ぎだな」

「じゃあ、カズくんの部屋に遊びに行く！」

「別にいいけど、何にもないぞ？」

「それじゃあ、行こう！」

話を聞いちゃいない…

今のところ二人としか会ってないけど二人とも話聞かないから、
もしかしてこの城にいる人全員聞かない人じゃないよね

「おじゃまします。あつ音楽プレイヤーある！何の曲が入ってる

の？」

「マイ○ルの曲全部」

「なぜ！？キング・オブ・ポップしか入ってないのはなぜ！？」

「いや、全部神曲だからかな、マ○ケルの曲は最高だろ」

「そんな熱く語られても……」

ムツ！馬鹿にしおったな

マ○ケルは神だぞ！

「じゃあマイケ○の良さを今から教えようじゃないか」

「え？いや、ちょっとま……」

「ふう〜語った語った」

「あう〜」

雪華が元気ないみたいだけどなぜだろう？

「おい、和馬、雪華、夕食だぞ」

「あつ、もうそんな時間か。行こうか、雪華」

「……あ、うん」

「どうした。雪華、いつもなら食事の時ものすごく、はしゃいでいるじゃないか」

「うん……まあ……ね」

「ふむ、あとで理由を聞こう。どうせ和馬がなにかしたんだろう」

僕のせい？なんで？

「まあ、早く行くぞ。冷めてしまっ」

「今日のごはんは？」

「唐揚げだ。ピザもあるぞ」

「ホント！行く！今すぐ行く！」

「生き返るの早っ！！」

雪華ってピザ好きなんだ…お好み焼きじゃダメなのか？

「さあ、食べるぞー！」

「なにそのテンションの差！」

「雪華は、三度の飯よりピザだからな」

「恭介くらいたちが悪いな…クレアは、何が好きなんだ？」

「……………いろいろだな」

まさかの好みが和菓子！？

「ふむ、今日はいろいろがないからな。明日にでも買いに行くとするか」

「いつてらっしゃい」

「何を勘違いしている。和馬お前は、荷物持ちだぞ？」

「なんでさ！」

「か弱い娘に重たい荷物を持たせる気か？」

「うぐっ、反論できない」

上手く言いくるめられた和馬は、納得がいかないものの目の前にあるピザの数にビックリしていた。

「六枚？」

「私と和馬は一枚ずつだ。残りは雪華が全部食べる」

「ピザはいくつでも食べられるもん」

途中、和馬のピザに雪華が襲い掛かってきたが、楽しい食事風景だった。

17 話目 魔王降臨（後書き）

感想、ご意見、待っています

番外 番宣ではないと言っている！（前書き）

ぶっちゃけ番宣です。

あげたことは後悔していない！

番外 番宣ではないと言っている！

作者「今回、次の作品バンパイア・レクイエムを出すことになったので自分の作品の

中でクロスオーバーさせます」

秋「ぶっちゃけ番宣だな」

メグ「というわけで翔一と天音が登場です！」

翔一「どうも一応主人公です」

天音「ヒロインだそうだ」

秋「適當すぎるだろ！？作者！作者！面かせや？！」

作者「今の発言は私のせいじゃない！！」

翔一「あと、バンパイア・レクイエムをよろしくお願いします」

天音「番宣終わったから帰っていいかの？」

秋「口調が変わったぞ。あと、ミーナがないぞって思った人、ただいま公務中ですので今回出てきません」

天音「これが妾のデフォルトじゃぞ？」

作者「帰ったらダメだぞ？これからトークに花咲かせるんだから」

ナハト「久しぶり！使い魔コンビが帰ってきたぜ！」

レイ「さて、作者さん？どうしてくれようかしら？」

作者「すいません！本当にすいません！」

レイ「謝るだけですんだら、警察なんかいらないわよ。さてとお仕置きタイム」

作者「ちよっ！待って！ヤダ！マジでーら、らめええええええええ
！！！」

翔一「さらば、作者……お前のことはわすれない……」

天音「ご愁傷様じゃな」

秋「つうわけで、作者がレイに連れて行かれたから、残りのメンバーでトークでもするか」

ナハト「賛成だ、それで何を話す？」

天音「裏話とかかの？」

秋「それ前にしたからダメ」

メグ「じゃあ、好物について語ろう！」

「『『『収集つなくなるからダメ!!』』』」

秋「じゃあ、某主人公さんに誰か呼ぶか。ナハト重力よろし

く」

ナハト「あいよ。刀にエンチャントすればいいんだな？」

秋「んじゃ、でりゃあ！」

調教中除く全員「……………」

？「おい、ここはどこだ？」

秋「小説の中つすね。どうもこんにちわ、ロックオ…狙い撃ちさん」

狙い撃ち「いや、俺の名はロック…どうしたんですか？狙い撃ちさん」…わかったもう

いい著作権の関係に引っ掛かるもんな」

翔「というわけで、狙い撃ちさん、映画ががんばってください」

狙い撃ち「メタ発言はやめろ！」

メグ「では、今回の被害者はロックオ…狙い撃ちさんでした！戦争根絶がんばってくださいね」

狙い撃ち「あ、ああ、まかせろ」

秋「じゃあね」

ナハト「狙い撃ちさんはログアウトしましただつてよ」

作者「うう…汚されちまった、汚されちまったよ…」

レイ「ふう〜、スッキリ」

翔「まあ、作者が帰ってきたから、この企画も終わろうぜ」

全員「両作品とも駄作ですがお願いします!!」

18話目 たまには、息抜きも大切 前編

そして話は秋達に戻る

レアルとの戦争から3日目

「アキ…貴女、お父様にかなり簡単に丸め込まれてない？」

「ナ、ナンノコトカナ？私にはさっぱり…」

くっ！女の勘というヤツか！やはり、伊達ではないな…

「わかったよ、白状する。ロストテクノロジーの遺産を回収することと、ミーナの近衛騎士になって

ほしいという事を頼まれた」

「よりによつてロストテクノロジーなの？まためんどくさい物を…」

「？そうなん？なんか面白そうだけど」

バタンツ！

「君がアキかい？」

うわっ、変なの来た。さらさらな爽やか系金髪イケメン君、でも笑顔がうざい

「お兄様？！なぜここに？」

「『お兄様？！』」

「うむ、そうだ。僕は王子のアヴァロンだ」

「それでその王子が私などにどのような御用で？」

「僕と結婚し「お断りします」……」

「やです。ならミーナを貰います」

「あ、そうそうアキ、私まだキョウスケのこと諦めてないから」

ミーナさん？それは告白にしか聞こえませんか？それでも自分、付き合ったことありませんよ？

メグが隣で脹れてますし、あれ？てことはメグも俺を……？まあ、そんなことないか

「妹は渡さないぞ！」

「うっせえ！シスコン！ついでにロリコンだろ！」

「んなっ、つあっ、ちょぎ！」

とまあ、どーでもいいことで言い争っている二人を傍観しているメグとミーナだった

同時刻

サンゴールド国内、王都市場

「お、お待ちください！」

「やーだよー 今日は公務やんないも〜ん」

「ゼッド殿、シンシア様をお止めください。私達では無理です」

荒い息をしながら大臣達が言ってきた

「やれやれ、だからシアは自重しろと毎回毎回……」

「うわっ！ゼッドを使うの卑怯だよ」

「公務は、俺が手伝うから城に戻るぞ。シア」

「やったー！ありがとゼツド」

こっちはこっちで王女と將軍の間で成り立たない会話をする能天気さを爆発させていた

「ふむ、結果的に君は猫派と」

「で、お前は犬派と」

「『どんな話の発展の仕方しとんだあああああああ！！』」

「「うをつ！？」」

「何なの！？その話！何でそうなるの？！」

「そのシスロリコンのせいだ」

「君のせいだろ！このひんぬー」

「ああ！言いやがったな！それでも気にしてたんだぞ！」

『ねえ、ミーナ……』

「何？」

『秋ちゃん、普通に女の子生活エンジョイしてるよね？』

「うん、さっきの発言で完璧に乙女化してるって確信したよ」

「まあ……」

「『愛でやすくなったからいいんだけどねえ』」

む？なにか言われた気がする……ん？何だろう？

まあいいか！アヴァロンも倒したし！

「わ、我が一生に一片のくいなし！み、水色だったぞ……ミーナ……」
「んなつ！」

「さあ買物に行きましょう。ア・キ？」

ああ！！はめられた！

こいつら手を組んでやがったな、どうりでミーナが突っ掛かってこない訳だ。うん、納得

まあ、納得しても状況は変わらないんだがな…

「また行くのかよ…ココに帰ってきてから何回目だ？」

「いいじゃんか」 女の子にとって買物は楽しみなのよ」

『それか、一緒にお風呂に入るか。どっちがいい？』

どっちもいやだな、でも拒否権ないだろうし…

む、買物は危険だし、風呂も危険だし、考え物だな…

「どっちもいやだ」

「OK両方ね」

『いや、秋ちゃんがココまで積極的だったとはね』

「んな！んなこと言ってるねえぞ！勝手にきめな」レイ直伝のお仕置きしてあげようか？」行かさせて

いただきます！」

レイめ！変なことをミーナに教えやがって、後で見てろよ……

にしてもレイのお仕置きは耐えられんからな

「じゃあ、まずこの前行った服屋さんに行こうか？」

『行く』

「はい……」

ん？流されすぎだっ？レイのお仕置きを知らないからこそ言えるんだぜ？

あれは、一生係わらないほうがいいもんだ。

まあ、んなことを考えていると、悲しいことに店に着いてしまった…

「ねえねえ！このスカートいいと思うんだけど。どう思う？アキ」
「いいんじゃない」

「このボトムスもよくない？」

「その言葉、ココでもあるんですね！？」

『うん、それには私も驚いた』

「じゃあ、これとこれとこれ着てきて！」

「んあ？え、ちよつ、何で！？」

「いいからいいから」

まさかだな。これを着ると？男の俺に？まあ、体は女ですけどね！

「き、着たけど…見せなきゃダメか？」

「ダメ 早く出てきて」

「ううやだな…」

俺が着せられているのは、俗に言うゴスロリを着ています。

このスカートがなんかモサツとしててすごく不安になります。はい
カチュウシヤも着けなれてないからなあゝ

「うん、似合ってる、似合ってる。ほら周りのお客さんを見てみな
さいよ」

なんかかなり注目されてて凄く恥ずかしい…

「「「「か…」」」」

「か？」

「「「「カワイイイイイイイイイイイイイ！…」」」」

「にゃあああああ！？」

「なにこの子すごい可愛いんですけど！」

「お、お持ち帰りいいいい！」

「天使k t k r」

「ちよつ、や、やめて…くださ…い！ちよつなんで服に手を突っ込んでるんですか！？」

あゝやばい…なんかくらくらししてきた。背中に当たる膨らみも気になるし、この甘い香りも…

『ミーナ、そろそろ助けてあげようよ…』

「んゝそつだね。そろそろ助けてあげよつか」

もうダメだ。

【おい！気を失うな！】

【そつよ、今はダメ】

おお、久しぶり。でもさこれきついんだけど…ん？誰かが手を引いてくるな…誰だ？

「大丈夫？アキ」

「助けるのがおせえよ」

「じゃあ、その服買ったし、次のお店でも行こうか？」

『よし、行こゝう』

え？まだ行くの？こんなにされたのに？m j d？

「どこ行くんだよ…」

「んゝ、そうねえゝなにか食べましようか」

『もうそんな時間なの？アイス買ってくれる？』

「あつたらね。なかつたらアキに作ってもらって」

『はい』

「何食うのさ？」

「ん？郷土料理だけど？」

「ウツドノースの？」

「ほら、行きましょう？」

服屋からその店は、近くにあるらしくすぐに目当ての店についた

「いらっ…姫様また来たんですかい？」

「いつものお願い。三人前ね」

「わかりましたよ。じゃあその席で待っていてください」

出てきた食べ物…和食だった

「メグ…これ見たことあるんだけど」

『奇遇だね。私も思ってたところだった』

「どうしたの？」

「いや、なんでもない…」

うん、見た目と同じで味も大丈夫だ

「『ごちそうさま』」

「最後に武器屋に行く？」

「ん、今日は別にいいよ」

「でも、用事あるから寄らせてもらっね」

「私に聞いた意味は？」

「ない」

さいですか…んでも用事ってなんだろう？

「おお、いらっしゃい！何かお探しですか？」

「またも参上、やさしいおっさん」

「頼んでいたものは出来ましたか？」

「はい、出来てますよ。ええと、100ゴールドになります」

「うん、やつぱりここに頼んでよかった」

「エルフに頼むのが大変でしたけどなんとかしてみましたよ。それでそんな刃を潰した剣なんかどうするんですかい？」

「秘密よ」

「そうですかい、ではまたのお越しを」

「じゃあ、帰りましょうか」

「そうだな」

「まあ、帰ったはいいいけどまだ試練が残ってるんだよね」

「少し憂鬱になる秋だった」

18話目 たまには、息抜きも大切 前編（後書き）

いや〜テストが燦燦たる物でした！

留年したくないなと思う、熊海苔です

小説を書く時間がないです。はい

かなりピンチです小説も勉強も部活も

なので、不定期になるかもしれませんが、暖かく見守ってください

感想等受け付けています。

19 話目 たまには、息抜きも大切 後編（前書き）

感想をくださった A r i s h i a 様、
香多詩路様、ありがとうございます。

そしてお礼が遅れてすみません

19 話目 たまには、息抜きも大切 後編

「にしても城までの坂、無駄にぐねぐねしてね？」

「そう？これくらい当たり前じゃない？敵が攻めてきた時に楽だもの」

そっとうもんか？あの強さの騎士団がいるから大丈夫なんじゃないか？

「あれだけ強くなったのは、アキのおかげよ」

「エスパー！？なぜ地文が読める！」

『ちょ、ちよつと秋ちゃん。メタ発言はだめだよ！』

うう…メグに叱られてしまった。これは自重せねばな

「んんゝまあいつか、で今から何を……………」

『逃がさないよゝ。一緒に泳ごゝ』

「お風呂で泳いじやいけません！」

「じゃあ、その監視のために一緒に入ってね」

あつ、はめられた！うぐ、逃げ場がない…門に居たナーシャの目も妖しかったし…

うゝん……………そうだ！メグで防ごゝつと

）

そんな時に俺の携帯が鳴った

「ん？なんで携帯が鳴るんだ？異世界だろうに…はい、もしもし、

どちら様でしょうか？」

『どうも、初めまして。そこに居る神の上司です』
「ん」とメグのことですか？」

そこでそばに居たメグが首を傾げる。うむ、可愛いな、今の仕草

『ああ、今メグって呼ばれているんですね。ちなみに、本名ペルセフォネって言います。』

自分は上司のクロノスって言います。以後お見知りおきを』

「どうも、じゃあメグに変わりますね」

『ありがとう、聡明な女s「ちなみに俺は男です」それは失礼しました』

なんか、神ってクセのある人たちだな

「ほい、電話だよ」

『え？私？』

「そうそう、あと、これからは口で喋ろうね。作者との約束だよ？」

『ああ、秋ちゃんが電波を受けてる…でも面倒だから口でしゃべろっと』

「そんな簡単なものなのね…」

ミーナが呆れていたのを二人は知らない…

「はい、お電話変わりました。メグです」

『ペルセフォネ？元気だったかあ？仕事もせずにごほつつき回ってるんだ？』

「うう…クロノスさんですか？これは…その…」

『アルテミスも怒ってるから、一回帰って来い。いいか？』

「わかりました……」

『ゼウスは相変わらずデレデレだけど…11時には帰って来い、以上』

ツーツー

「なんか怒られたっぽいな。まあ、メグなら大丈夫だろ？あと素朴な疑問、ペルセフォネだから冥府の女王なんじゃないの？」

「えーと、それは人間が勝手に言ってるだけ、神は家族じゃなくて会社みたいな物だし」

発覚！神様は会社だった！？……笑えねえーな。オヤジギャグよりひどいな

「さー！お風呂入りましょー！！」

「あ！逃げ忘れた……」

「れっつこー！」

「おーい、発音がおかしいぞ」

「秋ちゃんとお風呂」

「もーヤダー、この子達……」

うわー、グチグチ言ってる間に着いちゃったよ…

「ふふふ…もう逃げられないわよ」

「え？何その展開…お約束の展開？え？マジ？ちよつ、服に手をかけるな！」

「秋ちゃん？逃げられないよ」

「お前もかあああああ！」

と、騒いでいる間に手際よく服を脱がされてしまった。

「うう……は、恥ずかしい……ちよっ！こっち見るなバカ！」

手で隠しながらペタンと座り込んだ秋を見て、ミーナ達は暴走寸前だった。

や、ヤバイ食べちゃいたい と、思うミーナ
あのまま部屋にお持ち帰りを！ と、思うメグ
もうかなり犯罪の域に入ってる二人だった。

「お、俺は先に入るからな？」

「私達も行く！」

「だが断る！」

そういうと、俺は全速力で走り風呂に向かった。しかし風呂場のタイルは濡れている訳だ
つまり……盛大にすっ転んだ。

「……………」

「うわゝ痛そう……まさか後頭部から行くなんて」

「ちよっ、アキ！大丈夫！？」

「らいじょーぶ……じゃない。すごく痛い」

答えてからタイルの上をのた打ち回る。これは、痛すぎる、気絶するかと思った

んゝ治まってきたな……てか、うゝん風呂でつかいなゝ

「ふふふ、大きいでしょ？」

「まあデカイな……っ！か前を隠してください／＼／」

「何で？女同士なんだからいいじゃない」

「俺はお・と・こ……！」

「今は女の子じゃない。問題ないわよ？」

「もう観念しなよ！秋ちゃん無駄だよ？」

「もつやだー！！！」

「ほらほら、いい子だからお風呂入ろうねえ！」

「抱き上げるなあ！頭を撫でるなあ！」

そのままお湯を掛けられて体を洗われ始めた。

「じ、自分で洗えるから、やめて！」

「顔を赤くしちゃってえ！カワイイんだからあ！」

「ううう……なんで俺ばっか……」

でも洗うのが上手いから気持ちが良いな……と、いけないいけないのまれる所だった

でも、気持ちいいからいいやあ！

「あら？いきなり大人しくなっでどうしたの？」

「ん？気持ちいいからどーでも良くなった！」

「ふうん、ほら洗い終わったから湯船に入りましょ！」

「わふっ！目に泡が！」

「はあ！いい湯だなあ！」

「それにしても、綺麗な髪に肌ね！」

「ええい！触るな！」

「いいじゃない！」

「いや、あの、ホント勘弁してください！」

こー、あれだ、背中に当たってる物がすんげー気になるんだよね。

「ふふふ、そーゆうことか！」

「そうそう、だから離れてくれ！」

「ヤダ」

「あ…やば…もう限界…」

そして気を失った

19 話目 たまには、息抜きも大切 後編（後書き）

作者「今回ゲストでヴォルドが来ています」

ヴォルド「お久しぶりだな」

作者「なんか言い方にトゲがある…」

ヴォルド「私が話に出てこないではないか！」

作者「すみません…当初の予定ではこの話に出る予定だったんだけど、時間がなくて…」

ヴォルド「なら番外編を書け！」

作者「考えときます…はい、感想、ご意見、誤字脱字の指摘等、お待ちしております」

20話目 新たな能力、ゲットだぜ！（前書き）

ついに、禁断の能力を手に入れます。

ぶっちゃけノリで書いていたらこんなことに…

20話目 新たな能力、ゲットだぜ！

目が覚めると朝だった。そして湯船に入ってから記憶が曖昧だった。

だいたい、あのメンバーで風呂に入るのが問題なんだよ。

俺は、体は女だが中身は男なんだ。耐えられるわけない、しかものぼせたし…

「おはよう、アキ」

「ん、おはよう、ミーナ。昨日は心配かけたな」

「そのこっちこそゴメンね、無理矢理お風呂一緒に入っちゃって」

「ああ、気にするな。過ぎたことだろ？まあ、後でお仕置きだな」

「やつぱり怒ってる！？ホントにごめんなさい！なんでもするから許して！」

「なんでも？ホントに？」

「なんでもするから！」

そこで、いい事を思いついたとばかりに秋は笑った

最近、自分ばかりが物を買ってもらっていることを気にしていたから、お返しを考えていたのだから

「じゃあさ、メグとミーナの服を買いに行こう」

「え？私とメグの服？なんで？」

「いやさ、最近俺ばかり物を買ってもらっていたからさ。自分のお金でなんか買ってあげたくてな」

少し自重気味に笑う秋を見て、ミーナは驚きで目を見開いていた。なんせ、これまで自分が物を買ってもらった時、大体の相手がミーナを狙ったの贈り物で、

お礼としての物など貰ったことがなかったからだ。家族を除いて

「ダメか？なんか恩返ししたくてさ」

「ううん、ありがとう、すごく嬉しい」

「まだ買ってないから、一緒に買いに行こう？」

「うん！」

その時のミーナの笑顔はこれまでの笑顔とは、違った笑顔だった。そのことに秋はドギマギしながら笑い返した。

「そっぴや、メグは？」

「んと、神様のお仕事だつて」

「お、ちよつと待っててくれ」

その時、秋からは黒いオーラが出ていた。それに気がついてミーナは、うわ、あれはかなり怒ってるなと、考えていたりした

「一応聞くけど、どこに行くの？」

「神の国？エデンの園だつて」

「何をしに？」

「メグを引きずってくるために」

「ん、じゃあ待ってるね」

「ああ、ゴメン」

秋がそれを、キスされたのだと気付くのに少々時間が掛かったなにせ、いきなりの事だったのだから

「ンッ えへへ、じゃあ早く帰ってきてね」

「んあ？へ？は、はい」

あゝ、ヤバイなんか頭がぼろとする。てか、あれファーストキスなんじゃないかね？俺の。

え？mjd？初めてがお姫様？うわゝ、姉ちゃんに殺される……

「ナハト、アレお願い」

【見せ付けてくれるなゝまあいいか、はいよこれくらいでいいだろ？】

【私達の方がすごいものねゝ】

「ひとの部屋で何やってんだあああああああああ……！」
「ど、どうしたの！？アキ！」

【実は俺たち付き合ってるんだ！】

（後でO H A N A S Iしような）

「んじゃ、行つてきまゝす」

そして、自分で買った太刀を振るつた。

すると、次元の裂け目ができた、そこへテクテクと入っていった秋だった

「宅急便でゝす」

「はいはゝい、待つててください。ハンコ取つてきまゝす」

「ここでも宅急便であるんだ……」

「あら？あなたは、たしか……そうそう秋ちゃんね」

「へ？」

後ろから声を掛けられて飛び上がりそうになる。

「あなたは？」

「ああ、自己紹介がまだだったわね。私はヘスティア、人は炉の神つて呼んでるわね」

「すみません、ギリシャ神話は知らないもので……」

「まあいいわ、まずゼウスの所に行きましょう。話はそれから」

「あの、今クロノスさんが……」

今クロノスはハンコを取りに行っているからな、ここから動く訳には……

「ん？呼んだかい？」

「あれ？さっき……あれ？」

「ほら、行きましょう」

ヘステイアに背中を押され神殿の中に入ってしまった。

数分歩くと玉座のような物に腰掛けている人（？）がいた

「ふむ、よく来たよく来た、エデンの園まで人が来れるとはな。我はゼウス、社長のようなもんだ」

「俺はアレス、軍神だ」

「わしはヘファイストス、鍛冶の神じゃ」

「あたしはアルテミス、狩りの神」

「私はアテナ、知恵の神よ」

「僕はハデス、冥界の王」

「とまあ、なんたら神、王うんぬんは人が勝手に言っているだけだがな」

「あの、メグはまだ来れませんか？」

その言葉にゼウスが眉を顰めた

「一つ問おう秋、なぜペルセフォネにこだわる？」

「仲間だから」

質問に少しムツとして答えた

「ふんっ、そんな理由か、ならば私のペルセフォネは渡さん！欲しくば我に勝って奪え！」

「上等だ！この野郎！人が黙って聞いていればメグはお前の物？ハッ！冗談は休み休みに言え！」

「ならば……食らえ！天照！」

「お前！チートか！？くそなら、峰崎流壺の型！『絶』！」

説明しよう！峰崎流とは、今秋が考えた流派である！

「なかなかやるな！峰崎流！ならば！俺のこの手が真っ赤に燃える！お前を倒せと

轟き叫ぶ！爆熱！ゴットフィンガー！！」

「なら！フタエノキワミアーーーー！！！！」

ドゴン

拳と拳のぶつかり合いで生まれた衝撃波で地面がえぐれる

「ふっ、来い！エクスカリバー Mk-？！」

「双虎！」

「飛天御剣流……」

「龍翔閃！」

「九頭龍閃！！」

キンッ！ズガガガガガガガ

「ふっ、私の負けだ！連れて行け」

「ああ、なかなかいい戦いだった」

「ついでにこれをやろう」

「これは？」

「チート能力だ好きに使うがいい」

「ありがたく頂戴する……メグ！行くぞ！」

「はい、じゃあねえみんな」

「待て！秋！」

「ん？どうかした？」

「お前に受け取ってほしい、この槍を」

「あたしもこれをあげる」

「これは？」

「ああ、これはキリストを殺したと言われるロンギヌスの槍だ」

「それで、あたしが渡したのは、「いいません」……へ？」

「神の宝具だぞ？いないのか？」

「いいません」

と、はつきりとした口調で言う。

それに渋い顔をしたアレスとアルテミスだが引き下がってくれた。

「とりあえず代わりに、情報をあげよう。あの世界に人間と言う種族は君と魔王以外存在しない」

「え？」

「じゃあな、帰るんだろ？ほら！」

「て、蹴って送り出すなああああああ！！」

そのまま戻ったが、途中で上からナパームが降ってきた。
あんな物、神が使っているのか？

「「ただいま」」

「お帰り、じゃあ、さっそく行きましょ」

「うい」

「どこに行くの？」

「ミーナとメグの服を買いに行く」
「ホント？やった」

メグがかなりはしゃいだままだったが、この前と言うか昨日俺の服を買いに行った店に行った。

まあ、昨日ので俺が有名になったらしく、昨日よりも人が多かった。

「ねえねえ！ミーナ、このキャミソールかわいくない？」

「この、ショートパンツも中々……」

「あんま高いの買うなよ？」

「このワンピースもいい！」

「アキ！このブラよくない？」

「なぜ私に聞いてくる！？」

「むう、ねえ！メグちゃん、このブラいいよね」

「私に喧嘩売ってるの？」

「それ以上話が展開したら買ってあげないぞ？」

「じゃあ、これだけ買って！」

「私はこれだけ」

「あいよ、これください」

「はい、しめて53ゴールドになります」

「ん」と……5万3千円！？あつ、すいません。お金です」

「はい、お預かりしました。またのご来店を」

笑顔で送り出されたが、財布の中が寂しすぎてブルーになっている
秋と

欲しい服を買ってもらって上機嫌なミーナとメグだった。

「ありがとね、アキ」

「ありがとお」

「ああ、まあ二人が満足なら俺はいいよ」

すると、ミーナ達二人がいきなり内緒話を始めた、すこしすると秋の両サイドを二人がとり歩みを止めた、何事かと思い秋も足を止めるすると二人が秋の肩を持って頬にキスをしてきた。

「え？え？な、ななな、なんでキスするのさ」

「ふふふっ」

「「お礼のキス」」

「そ、そんな女の子が気軽にキスしちゃいけません！！」

その後、周りから優しい、ほんわかした視線を向けられている事に気がついた三人は、足早に城へ向かうのだった。

20話目 新たな能力、ゲットだぜ！（後書き）

明日も投稿します

21話目 断罪の瞳（前書き）

ついに2万4千PVを越え、ユニークも4千を突破！

ひとえにこの小説を読んでくださってる読者の皆様のおかげです

21話目 断罪の瞳

秋達がレアルとの戦争を止めてから四日後、和馬がこの世界に来て八日後。

魔王城で異変が起きていた。それは…

「和馬！大丈夫か！」

事件の発端は、和馬が執務室で書類を整理してる時に駆け込んできたクレアだった。

「ん？大丈夫じゃないぞ、書類が多過ぎて死にそうだ」

「ふう、無事か…」

「人の話聞いてる？クレアの分も僕がやってるんだぞ。仕事が倍だよ？」

そう、僕はクレアの分も処理するようになって四日目、仕事の量的に執務室から出られるのは食事の時だけ…現在四日連続で徹夜中だったりする

「さすがに可哀相だな。わかった、明日より私の分は私がやるう」

「やった！寝れる」

「その代わり、護衛のために和馬の部屋で寝させてもらう」

「なんでさ！護衛って何さ！」

「和馬、お前は今狙われている。しかも相手は、魔物だ」

クレアの話によると、とある魔物が退屈だから魔王をぬつ殺して人間に戦争を

ふっ掛けようという魂胆で動いてるらしい。さらに情報だけだが、

凄く強い勇者的な人がウッドノースという国にいるそうで、魔王城に向かつてるらしい。

「だから護衛か」

「うむ、そうだ。魔王に死なれたら私が雪華にボコボコにされてしまう…」

そこまで言っただけでブルリと体を震わせた。いやな思い出を思い出したらしい

「わかった。けど今日分から手伝ってくれ。そうしないと僕の部屋に入るのを許可しない」

「うう…わかった。和馬も性格変わってきたな」

「気にするな、僕もそれは不思議だったんだが、たぶん、魔王になったからだと思うようになった」

「なるほど…」

それから事が起きたのは、深夜だった。

この世界では4月から夏らしく今夜も寝苦しいほどの気温だった為、部屋の窓を少し開けて寝ていた。

その窓から四足獣の影が音も無く入ってきた。しかし殺気を消さずに侵入したため、

クレアは気がついていていた。

「まったく…和馬を襲う気なら殺気を消して入ってこい」

「気がついて…ていたか」

「ほお、喋る事ができるか、ということはそれなりに強いと言うことか」

「なめる…なよ」

「なら外に出ろ。ここじゃ狭いだろ？」

「わかつ…た…いい…だろう」

ヴェオウルフは言うな否や窓から飛び出ていった。

「和馬、起きろ。刺客だ。お前も来い」

「んあ？何？朝食作る時間？」

「刺客だ刺客、起きろ」

「ん？まだ夜じゃんか……」

「刺客だと言っているだろう」

「刺客！？どこに居る」

くっ！呑気に寝てる場合じゃないぞ

「外に出た。私は今からヤツを始末してくる。窓から見ている」

「ん。わかった」

（しかし、再転の魔法で使った魔力がまだ、戻っていない私では、勝てるかどうか…）

そう、再転の魔法はクレアや雪華のレベルでも

全魔力の2/3を消費しないと魔法を完成できないのである

しかも、魔力は半分までなら回復も早いが半分以上消費すると極端に回復スピードが下がる。

クレアが全力を出すには、あと二、三日必要であった。

しかし、刺客が来た今そんな悠長なことは言ってられない。

「もしもの時は頼んだぞ。和馬」

「ちよっ、一体どういふ…」

和馬がすべてを言う前にクレアは、窓から飛び降りていた

「まっ…たぞ…始め…るか」

「闇神、我、求めるは　深淵の闇　黒龍！」

クレアの手の中から夜の闇より暗く濃密な闇の龍がヴェオウルフへ襲い掛かる！

しかし、ヴェオウルフは軽々と龍を避けた

「そん…なもの…か側近」

（やはり魔力が足りない！）

「次は…オレ…だ」

さっきの龍を遥かに上回るスピードでクレアに襲い掛かる

「くっ！破炎！」

「そんな…もの…効かん…ぞ」

クレアは、攻撃したもののヴェオウルフのスピードは落ちずクレアの肩に食らいつく

「くううっ！」

ヴェオウルフは噛み付いたまま遠心力をつけクレアを城の壁にたたき付けた

「かはっ！…」

「クレア！？」

僕は、クレアが壁にたたき付けられた時には窓から飛び降りてクレアの元に駆け寄っていた。

噛まれた肩からは血が留めなく流れていた。クレアが死ぬ？

まさか、あのクレアが？

いつも僕と雪華を弄んでいたクレアが？

眼に痛みが走る。関係ない。あいつがクレアを傷付けた僕の間を大切な友達を……ヤツは僕が殺すすべての罪が見えてくる。はつきりと鮮明に……

[illegible]

さあ、裁判を始めよう！我が裁いてやろう。圧死。斬死。溺死。毒死。窒息死。

さあ、好きな死に方を選べ。我は、すべてを裁く者。人も魔物も悪魔も天使も神もだ！

すべての罪が我には見える」

「貴様が……魔王……か」

「魔王？　我はそんなちんけな者ではない。お前は、どんな死に方がいい？　くはははははははははは！」

「だ、断罪の眼の暴走……と、止めなくては……」

腕に力を入れようとしたが力が入らないヴェオウルフの毒が廻りつつある…

「クレアさん！？大丈夫！？今手当てを……あ、あれがカズくん？」

「すまない……私の力不足だった」

そこにいる和馬は死神が持っているような大鎌を持ち。

いつもの優しい黒眼ではなく、ひたすら清んだ清みきつた、

しかし奥の見えない六芒星の蒼い瞳、断罪の眼が発動している狂気
じみた眼でヴェオウルフを見ていた

「死ぬのは……お前……だ」

「我を殺す？貴様が？くくくく、くはははははは！」

貴様は、我に指一本触れることはできず死ぬ。

それが貴様の運命、因果、結果だ。貴様は、死刑、斬死だ」

やはり、和馬の声とは違う声で話す和馬

「ぐあ」

「執行終了。さあ、貴様らはどんな死に方がしたい？」

すでにヴェオウルフは細切れになっていて私達を見て言ってきた

「カズくん！目を覚まして！カズくん！」

「和馬、断罪の眼に負けるな、意思を強くもて！」

そこで和馬がピクリと身震いをした

「僕から……出ていけ……お前何かに体……を取られて……たまる……か！」

「やめろ、出てくるな！」

「く、くそつたねええええええ！」

さつきまでの記憶がないがクレアを雪華を守る事が出来た。しかし、その戦っていた時の記憶がないのがおかしい。

「正氣に戻ったか？和馬」

「どういう意味だ？それに今起こったことを教えてくれ」

「ふむ、わかった。和馬お前は、私が吹っ飛ばされたのは覚えて
いるか？」

「ああ、けどそこから記憶が曖昧なんだ」

「……お前は、断罪の眼で暴走していたんだ」

「……暴走……」

「カズくん、何ともない？怪我は？」

雪華が動揺している。たぶん、眼の暴走のせいだろう。

あの狼野郎が細切れになつてる時点で僕の想像を越えている。

そして二人の表情から、断罪の眼はかなり危険なものが窺い知れる

「僕は、どうすればいい？」

「寝るぞ。聞きたければ部屋で話してやる」

「わかった、じゃあ部屋で話してくれ。自分の事だからな」

「うむ」

言うや否やクレアは、僕の部屋の窓へ跳んでいつていた。よく届く
なあそこ5階だぞ？

「早く来い和馬！」

「いや、無理だから！そんな大ジャンプ出来ないから！」

「こんなの簡単だぞ？魔力を地面に向かって噴射させるだけなんだからな」

その簡単なことでも魔法初心者の僕には難しいのわかってるのか？
モン○ンの初期装備でル○ツを倒すのくらい大変だぞ？

「うう、わかったよ。やるって…」

足に集めるのか？

あっ！変幻で鳥かなんかになればいいじゃんか。では、無難に鷹になろう

そこに現れたのはデッカイ、ものすごくデッカイ鷹だった

「我ながらデカイな。怪鳥じゃんか」

「いいから、早くしろ」

と、まあこんなやり取りをしつつ部屋に戻った和馬であった

「さて、本題に入るとするか…」

「ああ、頼む」

「これからやることは、まず精神力をつける訓練だ。断罪の眼の暴走は、

初期段階なら本人の精神力次第でなんとかなるからな。まあ、対策はそれくらいしかない」

「なるほど……じゃあ話が変わるがああ狼野郎には、雇い主見たいなのが居そうだけれども、どうする？」

書類整理の仕事の時聞いた話だがヴェオウルフは知能は低いらしい、しかし最も強い状態の者の知能は人の次くらいまで上がっているらしい。

そして喋る事が出来るのはそこその強さからならばだいたい喋れる

「今回襲ってきたヤツは、頭が良さそうじゃなかったからさ」

「ふむ、では明日からの訓練の間、和馬の処理分は私がやっておく。

和馬は訓練を第一に考えて行動しろ、情報収集は雪華にやらせる。いいな？」

「ああ、わかった」

「では、寝るか。和馬お前は下だぞ。ベッドは私が使う」

「ああもう、わかった、いいよ。またか弱いなんたらだろ？」

「よくわかってるじゃないか。では、おやすみ」

今日から当分、床で寝るのか…つらい
明日全身が、バキボキいうな

22話目 再会したZE！（前書き）

今回はかなりカオスです。

それでもおkと言う人はどうぞ

22話目 再会したZE！

そして、日にちが延びてしまったが出発当日。

まだ、朝が早いと言うのに騎士団のみんなにミーナの両親つまり王様に王妃様までが見送りに来てくれた

「ミーナ、アキ殿に迷惑を掛けぬようにな」

「大丈夫ですわ、お父様ったら」

「はっはっはっは」

ミーナさん、キャラが変わってます…

「アキさん？」

「はい、何でしょうか？」

「（ミーナは、お転婆さんだけど面倒見てあげてね？）」

「（はい、それにしても王様より王妃様の方がしっかりしてらっしゃいますね）」

「ふふふ、そうかもね」

「では、王妃様もお元気で」

「あなたも、体に気をつけていつてらっしゃい」

「私の母よりもしっかりしてらっしゃいますね」

「そうかしら？」

そこで本当におもしろそうに笑い合った。

王妃様とだが

「じゃあ、いつてきまーす」

「死ぬなよ」

「不吉な事を言うな！今度死ぬほどキツイ練習させるから、覚悟し

「といてね？セトラさん」

「冗談だよ、冗談」

秋がずっと半眼で睨んでいたが途中でやめて無視の方向にシフトした。

これが一番誰にでも効くからだ
と、そこでミーナに引っ張られた。

「えーと……姫様は私が命に変えても守り抜きます」

「うむ、では行け。娘と近衛騎士よ」

と、儀礼的な事を済まして出発した徒歩で………なんでさ！？
と言う疑問があるが、ただ単に今馬車がなかっただけである。なに
せ出発の日にちがずれているのだから
しょうがない、自分達で決めた事を自分達でやぶった訳だから、自
業自得である。

「じゃあミーナ、何処に行くんだ？」

「えーと、トウハの国の山岳地帯にロストテクノロジーの遺産があ
るらしいから、まず南下しましょう」

「りょーかい、にしても飯とかどうするんだ？」

「あつ、それもそうね。じゃあギルドに寄って携帯食料でも買って
行きましょうか」

「新鮮な食材なら、このポーチの中に入れれば半永久的にもつけ
ど、どうする？」

「じゃあ……あつ！秋さんにメグさん！………私は無視？」

「よお！ツカサ！今度はこっちに来てくれたのか」

市場の向こう側からツカサ（香多詩路様の『フラグをたてたいっ！』
の主人公です。）がてこてここと

走ってきた。

「うん！それが歩いてたら黒い穴があってね。そこに入ったらここに出てきたんだよ」

「あゝ、なんかごめんな？ウチの作者が無理言っただみで。でも……」

「「じゃがアイス同盟、此处に再集結！」」

「あのさアキ、私、話についてけないよ……」

「あつ！そうか、実はかくかくしかじかで……」

「ただいま説明中」

「…と、言う訳なんだ」

「じゃあ、この子はあの時のツカサって子で間違いないのね？」

「ああ、じゃがアイス同盟の事を知っているから本人だ」

「よっ！本編に出てみた。ツカサもお久」

そこには、なぜか作者が居た。なにこの展開、こんなでいいのか？コイツ、この世界ではゼウスのおっさんよりかなり上の神みたいなもんだぜ？

「お久しぶりです」

ペコッとお辞儀をする。

それに作者とミーナがピクツと反応した

「やっぱ、可愛いなあツカサは」

と言ってツカサの頭を撫で始める、撫でられてツカサも気持ちよさそうに目を細めているが

俺は、ぶつちやけ事態が把握出来ていない。いや、マジで

「香多詩路さんに許可貰ったのか？」

「うん、多分オツケー」

「あのさ、そんなメタ発言しまくっていいの？」

「ん」と、今回だけメタ発言解禁」

とりあえず、今の状況を整理しよう…まずツカサが来た。ここまで
はいい

次に作者登場………おかしい！なぜだ！

と、嘆いても状況は変わらないのだから。っとこれって…作者にと
ってハーレムじゃん！

（注意 ただいま秋は混乱しており正しい思考が出来ておりません）

「そういえば、ツカサ君？ちゃん？はどれくらいこっちに居られる
の？」

「うゝん、どれくらい居られるんだろう？」

「（おい、メグ）」

「（何？まあだいたい分かるけど）」

「（ミーナが人見知りしてないぞ）」

「（作者がなんかしたんじゃない？）」

まさにチート！ホント何でもありだな

「そつだ、ツカサ料理作るから食ってけよ」

「秋ちゃんの料理おいしいよ？」

「じゃあ、ごちそうになります」

そばにあった宿で台所を借りてちやくちやくと作ってゆく
1時間もすれば完成した

ちなみに、秋が料理を作っている間三人で談笑していた。主にじゃがアイスについての話だが

「出来たぞ」

「何を作ったの？」

「あゝと、無難に玉子焼きと鳥的な何かの唐揚げ、味噌汁、ゴハン。そして……」

「「ゴクン」」

「そして、じゃがアイスだ！」

「「「じゃがアイス同盟！」」」

そこで少し盛り上がってから食べ始めた

「すごいおいしいよ！これ」

「そうか、口に合って良かったよ」

……

「最後にじゃがアイスだ！」

「「わあ」」

「アレンジでジャムをかけてみたけど、どうだ？」

もぐもぐ、もふもふ

「ん！こ、これは……」

「あれ？ダメだったか？」

「すごいおいしいよ。バニラの香りにブルーベリーの味がとってもマッチしてるよ」

「そうか、よかった。でも、こんなに長く居ていいのか？」

「え？ああ！じゃ、じゃあ帰ります！」

「ん、気を付けてな」

「はい、みんなも元気でねえ」

来た時のようにてくてこと去っていった。

さて……作者とO H A N A S H I しいとな

「作者……」

「ん？何？」

「少し『お話し』しようか？」

「がくがくぶるぶる」

「さて、じゃあ向こうに行こうか」

「……………はい……………」

その後、路地から出てきた作者が「もうこんなことはしません。ごめんなさい」と言うくらい秋が言葉攻めにしたんだそう。

所変わってここはユーランド

「ねえ、クレイ本当にサンゴールドに戦争を仕掛けるの？僕は嫌なんだけど」

「何を申しますか、閣下。先日の会議で決まった事ではないですか」

「そうなんだけど……争いはダメだよ。父さんが言ってた『争いは憎しみを生む。そしてその憎しみは

また、憎しみを生む』って」

そう、ユーランドの王、若干18歳にして王の少年 スクルドは言った。

しかしスクルドがなんと言おうが結果は変わらなかった。彼は気付いていた自分がお飾りとしての王であることを

「しかしそれは理想論です。我々はサンゴールドに勝たねば未来はないですよ」

「それは僕も分かってる！けど、争わなくていい道があるのならば、僕はその道を選びたいんだ！」

「サンゴールドの女王殿が幼馴染だからですか？」

「ッ！それもあるが……」

「それではなく、それがあるからでしょう閣下。国の事に私情を持ち出さないでください」

「くっ……」

どうにかせねば！と頭をフル回転させるが何もアイデアが浮かばない。

黙り込んだスクルドを見て一度礼をしてクレイ　クレイ將軍は退出して行った。

「にしても、歩きはキツイよな」

「そうだね……もう夕方なのにウッドノースを出れないなんて」

「そろそろ、国境のはずなんだけど……」

「あれか？」

「そうよ、あれが関所とりあえず今日はあそこに泊まりましょう」

「おk、でも泊まる事なんて出来るのか？」

「もちろん」

こうして、関所の2階で夜を過ごした

22話目 再会したZE！（後書き）

今回は香多詩路様とクロスオーバーさせていただきました。
ありがとうございます。

ではまたノシ

23 話目 秋と恭介

朝、スズメっぽい鳥のさえずりで秋は目を覚ました。

昨日はツカサに会った後、関所までひたすら歩いていたら足が大変ヤバイことになっている。

そして、状況的にもヤバイ……

「すうー…すうー…」

「くうー…くうー…」

「なにこれ？なんで二人が俺の寝てたベッドに居るんだよ…」

そう、ミーナとメグが何故か秋のベッドの中に居る…二人とも秋の細い腕に抱きついて

メグはまあいい。しかし、ミーナにはこの前、ファーストキスを奪われているのだから、

ここまで近くに居るとドギマギしてしまっている秋だった。

可愛いらしい寝顔、柔らかそうなピンクの唇。その唇にそっと

「って、何しようとしてんだ！？俺は！しかもドキドキしてるし…」

「誰にドキドキしてるの？」

「そりゃあ、ミーナにだよ」

「何しようとしたの？」

「え、えっと…キ、キスを　　ってミーナ起きてたの？」

「アキ、どこにキスしようとしたの？」

「H A H A H A、ナンノコトヤラ」

もう自分のやろうとしていた事を分かっているのに聞いてくるってヒドいなあ

「まあいいや、私からするから」

「へ？……ンッ！？……ングッ！」

前回の時のキスと違い、舌が入ってくる。

いや、あのこれってディープキスですよねえ！？ちよつと！？ミーナさん？

あの、なんで抱きしめてるんですか？舌を絡めてこないでください。ちよつとお！？

「ンン……ふふふ」

二人の間に透明な糸が引く。

あつ……やべえ頭がポーツとする……

「い、いきなり何すんだよ。ミーナ」

「ん？キス」

「何で」

「アキが好きだから」

「え？ミーナは恭介が好きなんじゃないのか？」

「だから、アキが好きなの。前に言ってたじゃない『恭介は俺だ』って」

「だけど……」

「いい？私はキョウスケでありアキの貴方が好きなの」

「……………」

「女の子にここまで言わせておいて返事はないの？」

そこで、ミーナの告白を受けた時自分の中に違和感を感じる。大切な何かが離れたような感じた

「ああ、俺もミーナの事が好きだ秋は知らないがな」

「え？今なんて？」

「ん？何が？」

何か失くしちゃダメな物がない

あるのにない

この感覚はなんだ？

この半身を持って行かれたような感じは

一体何が起きている…！

「アキ？大丈夫？」

「ああ、大丈夫だと思う」

もちろん嘘だ、大丈夫なはずがない。

でも、ミーナに心配して欲しくないから

「とりあえず、メグを起こして出発しよう」

「うん、わかった」

ミーナがメグを起こしている間にさっきの事について考える。

あの半身を引き離されたような感覚について

あるのにないという矛盾した感覚

それは、まるで一つの物が二つになった感じ

二つ……人格？……俺と私……恭介と秋……ッ！

俺は誰だ？

恭介、秋ではない

違和感の正体はこれか？

（お……い……い……お……い）

（は？秋か？）

（そうそう、私だよ。それにしても何で私と離れちゃったんだろうね？）

（ああ、やっぱわかんねえか…でも、まあ居なくなっただけじゃなくて良かったよ」

（なんせ私達は…）

（一心同体だから、だろ？）

（うん、そうだよ）

（じゃあ、メグも起きたみたいだし一旦向こうに専念するよ）

（ん、わかった。じゃあ今度…公式の場の際は私が表に出るね）

（ああ、そんな時は頼むわ）

「おはよう秋ちゃん、ミーナ」

「おはよ」

「やっと起きたか、寝過ぎだぞ？」

「まあまあ…さあ、出発しましょ」

「ん、そうだな」

「ごはんは？」

「歩きながら食うから、安心しろ」

そう言うと、壁に立てかけてある太刀を背負う。そして腰には紅の西洋刀、剣を差す

ミーナは腰に二本の小太刀を付ける。これは俺がこの前作った物だ

「そっぴや、ミーナはツインテールにしないのか？」

「ん？して欲しい？」

「似合うと思うからさ」

「じゃあ、するからちよつと待って」

俺はミーナにポーチから水色のリボンを出して渡す
ミーナはものの数分でツインテにした。

「どう？似合ってる？」

「うわぁ〜ミナ凄いい合ってる！」

「ああ、凄い似合ってる。うんうん、ツンデレっばさが3割り増しだな」

「どういう意味よ」

「ははは…褒めてるんだよ。にしてもフェイトに似てるなぁ〜」

「誰？」

「気にすんな ただの妄言だ」

適当に誤魔化すとミナはちょっと不機嫌になってしまったが引いてくれた。

まあ後でご機嫌取りをしなきゃならんが……

う〜ん、この前貰ったチートで夜に月光蝶でもやるか？

無論、綺麗だからだが

「じゃあ秋、今から南に向かってたのを東南東に進路を向けるから」

「ん、りょーかい」

「それにしても全然魔物が寄ってこないね〜」

「ああ、今の所ずっと俺が殺気を全域に送ってるからな」

弱い魔物ならその辺で引っくり返ってピクピクしているだろう。にしても、秋って呼ばれるとなんか違和感を感じるな

「あのさ、二人とも俺の事は恭介でいいよ」

「ん？突然どうしたの？別にいいじゃ〜ん」

「メグの言うとおりよ、いきなりどうしたの？」

さっきあった事を説明した

「本当にそんな事って起こるものなの？」

「うつん、こんな事なんて稀だよ。ごめんね恭介」

「いや、別にいいんだがな」(どうする？秋)

(そうだな～なんとかなるよ！)

(その回答はなんだかなあ～)

(なんとかなるよあ～)

「まあ、気にせず気楽に行こうぜ」

と言ったものの解決策特になし、はは…自分の馬鹿さ加減にびっくりだ

で、東南東と言うとトウハの国にでも向かうのか？

「ミーナと恭介ってなんかあったの？」

「な、なんだ？いきなり」

「ミーナの恭介を見る目が変わってる」

「マジ！？」

やはりこう言われると振り向いてしまう

「バカ……」

「あつ、騙したな？」

「それで、何があったの？」

「いや、あの……」

「私が変わりに言っわ」

「ゴメン」

「それで？」

なにこれ？女の修羅場？怖すぎる……

しかも、神VS一国の姫だぜ？あつでもこれだけ見たらメグが圧倒的だけど、

ミーナの方が修羅場を潜ってそうだからなあ～

あれ？これってはー」……

（現実逃避はダメだよ？）

やめて、逃避させて

（ここからは、心を鬼にしていくな？）

わかりました。現実を見させていただきます。

「私と恭介、キスしたの」

「え！？」

「ストレートに言いやがった……」

「ふうん、じゃあ私はいららないんだ」

「何でそんな結論になるんだよ！」

「だって、私がいたんじゃイチャイチャ出来ないんでしょ？なら居ないほうがいいじゃん」

「馬鹿野郎！自分の事をいらないとかなうなよ！悲しいじゃんか自分で自分を否定したら

悲しいじゃんか！」

そつぽを向いているメグをこちらに向かせる。するとメグは目に涙を溜めていた。

ミーナにはすまないがメグを抱きしめる。

不安で震えてるか細い肩を強く抱きしめる

「メグはいらない、俺達にとって大切な存在なんだ。だからそんな悲しい事言うな。な？」

「うん……」

「ミーナ、こっち来て？」

「え？う、うん」

ミーナがこちらに來るとすぐにミーナも抱きしめる

「俺達は絶対3人だ。いや、秋と俺が離れたから4人か。誰も欠けちゃダメだ。2人ともわかった？」

「うん……」

（いや、恭介がここまで大胆だったなんて何が？

（場所考えてやろうよ。こういう事はさ）

あ……

道の真ん中で抱き合ってる3人だった

23 話目 秋と恭介（後書き）

なんか展開が凄い事になってしまいました！

あれえおかしいな？

ぶっちゃけ、ノリで書いてたらなっ たんですけどね

ではでは、熊海苔でしたノシ

24話目 ドSのSはなんのS？

ええと、二人を道端で抱きしめてから二日経った。

今3人で朝食を取っているんだが……なぜかメグのテンションがバカみたいに高い。

しかも、朝っぱらからおかげでかなり目立っている。

まあ、原因は昨晚のあれしか思い浮かばないんだが……と、言う事で回想開始！

「えーと、昨日は道端でいきなりすいませんでした」

「いいよ別に、あの言葉はすごく嬉しかったから」

「あはは……あんまし言うなよ。ミーナの目線が怖い」

後ろから凄い怖いオーラが……

あゝもう！何でこうなるんだよ！

まあ、今宿に泊まれてるからいいや

「ミーナ、こっちに来て」

「なによ……」

「むくれるなよ。ここに来て」

俺の横をポンポンと叩く。

ミーナは、いぶかしんだけれど隣に座ってくれた

「俺は多分、迷ってるんだと思う」

「え？」

「最初から俺を支えてくれたメグ、俺の事を好きになってくれたミ

「ナ。二人の中から一人を

選べ？そんなの出来るわけないじゃん。出来たとしても時間が要る、かなりの時間が……

でも、俺はっ！」

そこでミナが優しく抱きしめてきた

「それ以上は言わなくていいよ。考えるにしてもゆっくりでいい。焦らないで、私は答えを待つから」

「……ありがとう、でも、俺は決めなきゃいけない。二人から一人を決める事を、でなきゃ絶対

……絶対後悔するし、二人を傷つけてしまうから……でも答えは待つて欲しい、こんな大切な事

すぐには決められないから」

「大丈夫、私は待つから」

「うん、でもちゃんと答えは出して」

「ああ、分かってる」

「それじゃあ、今日も夜が遅いし寝ましよう。もちろん恭介が真ん中ね」

「君達に恥じらいと言う物はないんですか？」

「あるけど、今は女同士だし？」

「もういいや……」

あんなシリアス？かは知らないが会話のあとでよく言えるな……

以上回想は終了なんだが、二人の行動は怪しすぎる……

「恭介どうしたの？」

「ん？何でもない」

「怪しい……何隠してるの？」

「うーん、二人とも何か変だぞ？」

「ウグッ」

やっぱり何かあったか……にしても全然魔王の住処に近づかないな。
大丈夫か？この旅

「お前からこそ何隠してんだよ？」

「言わなきゃダメ？」

「可愛く言ってもダメ」

「分かったわよ。実はね。今朝シンシアから招待状が届いたのよ」

「シンシア？誰それ」

「サンゴールドの女王よ、私と同年なの。うちの国と仲が良かったから時々こういう招待状が届くのよ」

「へー、で行くのか？」

「行きたいのは山々だけど旅の途中じゃない」

「じゃあ、さつさとトウ八に行つてロストテクノロジーの遺産を見つけてサンゴールドに行こうぜ」

なぜか俺の発言は力があるらしくトウ八にいそぐ事になった。

そして三日が経った。うん、早いもんだな今国境だぜ？

「国境を越えるご用件は？」

「ウッドノースの『黒銀の鬼神』の二つ名を持つ者ですが、用はトウ八にあると言うロストテクノロジーの遺産の確保です」

「はい、王より聞き及んでおります。一度王宮にお寄りください」

「わかったわ、がんばってね」

「はいっ!!」

厨二病漂う二つ名だけど使い勝手がいいな。
何か色々な所にするする入れそうだし

「なんか企んでない？」

「いんや、なんも？」

「早く行こうよ！」

「メグはしゃぎ過ぎだろ……ほら、走るとこけ」

「むきや！？」

ズデン！

見事に顔面から突っ込んでいったけど大丈夫か？

おお、ゾンビみたいなのにそのそ起き上がってきてる姿は軽くホラー
だけど、頑張れメグ

「うう……鼻、痛い……」

「ほら見た事か、たく着物で走るな着物で……空飛びやいいだろう
が」

また、鼻を押さえて蹲ってしまった。

言わんこつちやない。

ん、このままだと前に進めんなあ、背負うしかないか……

「ん、乗れ」

「へも」

「恭介になるから大丈夫だって」

「うう、わかった」

うん、ミーナさん、そんな視線を送らないでください。流石に二人

も抱えてはこんな階段上れません
無理です

「そんな視線を向けるな」

「今度、私にもして」

「はいはい……」

「ふふふ」

ああもう、いつからこんなめんどくさいパーティーになったんだよ

……

はい、そうですね。昨日の抱いた件からですね。わかってましたとも

「おい、ついたぞ」

「どこに？」

「村に？お、第一村人発見！」

「すみません、王宮はどこにありますか？」

「ちつつ、すまないが、都はどちらにある？」

「都でしたら、この街道を真っ直ぐ行けばありますよ」

「うむ、そうか、かたじけない」

「いえ、では良き旅を」

少し自慢げにミーナを見る。ミーナは胡散臭そうな目で見てくるが
そこはスルーの方向で

「普通に話せばいいじゃない」

「うん？何かあっちの方がかつこ良さそうだからさ」

「はあ、どこからツツコムベきか迷わせる発言ね」

その言葉に俺は首を傾げる。

この人は何を言っているんだい？

「わからないなら別にいいわよ」
「？」

うーん、よく分からん。女はミステリー
しかし、背中に居るメグは言葉の意味を分かっているらしく、うん
うんと頷いている。

分かってないのは俺だけか？秋は俺と一心同体だから同じだろう。
というか、同じじゃなかったら俺は泣くぞ？いやマジで
まあどうせ、秋は女の子だから分かっているでしょうけど、フ……別に
寂しくなんかないNE！！

「恭介、ちゃんと歩かないとこけるよ？」
「おう、分かっている……」

流石にこの状態でこけるとものすごく危険だから気を引き締める。
そこまでの事じゃないのだが、まあ念には念をだ。

十分も歩くと森に出た、ウッドノースではなかった動植物達が独自の
生態系を組んでいた。

木の実を拾って食べるリスのような魔物などなど種類は豊富だ。

「のどかなあ」
「そうね、静かでいい所じゃない」
「お！あれ九尾の妖狐じゃね？」
「本当ね、あんな珍しいのが居るなんて……」

そして、気を抜いたせいか変身魔法が解けてしまう。しかし、今の
俺には関係ねえ！
あの尻尾をもふるだけだ！キャラ？ハッ、んなこと知るかああああ
あ！！

「人間どうし……た!？」

「つつかまえた!うわあ、もふもふだあ、あつたけえ」

「は、離せ!下種な人間が我に触るな!」

「うるさあい、もふらせる!Qちゃん」

「我はマラソランナーではない!」

おお、このネタが通じた?マジ?ヒヤッホー!親近感あるなあ、こういう現代的なネタがここじゃ通じなかったから、少し落ち込んでいたのに……まさか!まさか!このネタを分かってくれる人(?)が居るなんて感激だ!

「お前は仲間だQちゃん」

「我はQちゃんではない!我は九尾の妖狐の白玉天だ」

「へえ、じゃあ白ちゃん、尻尾もふらせて」

「もうやっていないではないか!」

「ちえっ、いいじゃんか……いいさ!レイを呼ぶもん!」

【はいはい、何かしら?】

「レイ!もふらせて!」

「あ、貴女は……虎王殿!？」

【あら、天ちゃんじゃない。お久しぶり】

「では、龍王殿もいらっしやるんですか?」

【いるわよ。ナハト、出てきて】

【ああ?おっ、白公じゃんか。元気にしてたか?】

「はい!」

あれ?なんか向こうで盛り上がったね?

なにこれ?俺の事放置かよ……てか、虎王やら龍王ってなによ?

王なの?あの二人、王を従えている俺って一体何者?

「話を聞け！」

【なんだ？】

「君達は本当に王なの？」

【ああ、そうだぜ？】

「それを、仕えさせてる俺って何者？」

【ああ、まあ私達が勝手にくつついて行ってる感じだから大丈夫よ】
「お二人がこんなヤツに仕える訳なかるうが！調子に乗るな！」

ブチッ

今のは怒っていいよね？

調子乗ってんのアイツだし、天狗の鼻はへし折らないとね……

「白玉天とやら……少し頭冷やそうか？」

「ふんっ、お前の指図など誰が受けるものか」

【きよ、恭介落ち着いて？】

【そうだぜ？熱くなるなよ。な？】

「大丈夫、グングニルで貫くだけだから、治癒力も限界まで上げとくし」

「ちよっ、恭介！それはあまりに……」

「その後、フルボッコにするし、心配するな」

【「「いやいやいやいやいやいや！！！」」】

「ん？どうした、三人そろって。まあいいや、逝こうか？白玉天」
「へ？」

そこにはもう、グングニルを投擲する体勢の恭介が居り、それをぽか〜んと眺める白玉天と言う構図

そして、グングニルは百発百中の神器
それを投擲した

「ぎゃああああああ！！いたああああい！！」

グングニルが胸に刺さるが治癒力を上げてあるためすぐに回復しようとする。しかし、槍はまだ胸に刺さったままで彼(?)を木に縫い付けてまでいる。

そこにゆっくりと歩み寄る恭介

「さて、この槍を抜いてフルボッコかこのままか、どっちがいい？」

白玉天に恭介が笑いかける。満面の笑みで

ミナ目線

恭介が女の子のまま白玉天(以降、狐)に満面の笑みで話しかけている。恭介、すっごい怒ってるなあゝそろそろ許してあげてもいいのに……槍が刺さったままだし、抜いてもらってもその後フルボッコでしょ？狐に合掌しとかなきゃね。はい、合掌！

「その娘、なぜ、我に合掌してい」五月蠅い「いだあい!？」

「恭介、死なないようにね？」

「ん、大丈夫だ死なせない」

(えげつな！死ぬほど痛くても死ねないってえげつなっ！)

【きよ、恭介？それくらいにしといてあげなさい】

あのドSレイが引いてる！？恭介がレイを超えた……

使い魔二人目線

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！

「おれは久しぶりに会った旧友と話していたと思ったら、いつのま

にか旧友が槍で刺されて虐められていた……!!」

な……何を言っているかわからねーと思うが、おれも何が起こったのかわからなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……。

DSだとか、鬼畜だとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

【ほら、ナハトも、どーでもいい事考えてないで天ちゃんを助けるの手伝いなさいよ】

【すまんすまん……二コ動の影響でさ……】

どんどん現世に侵されていくわね。ナハトはこれから大丈夫かしら？あとで恭介に相談するべきね

サイドアウト

「さーてと、どうしてくれようか。……………」

「うう……ごめんなさい」

「謝って済んだら警察はいらないんだよ。そもそも、人を侮辱しててさ。さらに自分で火に油を注いどいて何？その態度、馬鹿にしてんのか？あ？お前はカスか？」

そこで白玉天が首を横に振る

「違うのか、ならなんだ？油カスか？クズか？まあいい、おい、狐」「我は狐じゃない……」

「自分の発言に責任が持てないヤツが九尾の妖狐？ハッ笑わせるな責任が持てねえヤツなんざあ狐で十分だろ？あん？文句があるなら言い返してみろ。言い返せないなら黙ってる」

「我は狐じゃ……んなことどーでもいいんだよ。それしか言い返せ

ないのか？ならお前は一生狐だ。油揚げでも食ってる」ひつく……
ごめんなさい……」

【器が小さいわね……】

「あん？レイ、お前もこっちに来い。お前なんて言った？」

【だから、器が小さいわねって言ったのよ】

「ほ、これまでの事を見てきてそんな事をほざいてやがんのか？
流石にさ、俺でもストレス溜まるんだよね。ぶっちゃけここに居る
全員に説教したいんだけどさあ、時間がねえんだよな。だからさ、
これまで一番変な事やったヤツと逆鱗に触れたヤツだけで済ます気
なんだよ俺は」

【私は変な事なんか……】

おもいつきり木を殴る。すると一列木が薙ぎ倒される

「変な事をしてないだあ？てめえアホか？だからお前は……（後
略）」

10分後

「（前略）Sだから許されるだあ？ふざけんのも大概にしろよ。う
んなんで許されてたら法律やらなんやらはいらないんだよ（後略）」

40分後

「（前略）最後は泣き落としか？二人そろって（中略）んで言う事
は？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
iiiiiiiiiii！」

【もうしませんからあ、許してください。ごめんな……ひつく……さい
私が間違っていました。だから放置しないでください……ひつく】

「（恐るべし恭介パワー……）」

「（もう怒らせちゃダメだねあれは）」

「（でも……）」

「（泣いてるレイってめちゃくちゃ可愛い！！）」

あのレイがえっぐえっぐ泣いてるんだよ？ぺたんって座り込んで両手で目元をこしこししてるんだよ？可愛い…可愛すぎる！アキの次にお持ち帰りしたいくらい可愛い！

あれ？でも白玉天が快樂を受けたみたいな顔に……彼女（途中で人型に変身したから性別が分かった）はMなの？しかもドM？うわーいやだなあ

恭介はレイを超えたドSだった

24話目 ドSのSはなんのS? (後書き)

遅れました。すみません。

では、言い訳です。

1、部活忙しいよ！疲れるよ！

2、赤点だZE！

3、試験があつた

以上です。

はい、忙しくなさそうですねっ！ネタが思い浮かばなかったんですよ。

あつ、呆れました？ホントすみません。

実は絵も描いてたんですよ。萌え絵ってヤツですよ多分
それがあんまり出来が良くなく意地になって描いてましたらこんな
事になりました

反省はしています。後悔はしていません

25話目 トウハの国は、めいど・いん・じやばん！（前書き）

おまたせしました！

25話目 トウハの国は、めいど・いん・じゃばん！

つー訳で今王宮に居ます。

はしより過ぎ？だって王宮まで少しだったんだもん。
いいじゃないっすか。

「おーい、恭介？着いたよ？ねえってば！」

「んあ？何？王宮の事か？」

「どうしたの？具合でも悪い？」

「周りの視線がやばい……」

まあ、この状況だからな。男共の視線うぜえ
あつ！俺に対してじゃなくてナハトに対してか。ならいいや

（恭介、それは酷くない？）

酷くないから大丈夫だぜ！

【最近、俺の扱いが酷い気がするんだが……】

「我は応援していますよ！」

【ありがとな】

「まあ、元気出しながら恭介も悪気があってやってる訳じゃないんだからさ」

【そつだな、恭介行くか！】

「んあ？ああ、いいけど」

なんかいきなりナハトのテンションが上がったな。うゝんなんか怖
いな裏がありそうでさ

（それにしてもこの建造物、日本ぽいね）

そうだな。島国じゃないけど、周りの山脈のせいなんじゃない？

（と、言うത്？）

島国である日本はその風土と周りの国と離れていたからあの文化が出来上がった。

そして、トウハの国は山脈によって周りの国と外交をあまり行っていないため、こちらも独特の文化が発生した。それでその文化が日本の文化に似ていたと言う事だ

（なるほどねえ。話は変わるけど、恭介は誰が好きなの？）

「ブフツ！」

【「「！？」」「」】

「あ、いやすまん」

いきなりなんて事言いやがる秋！

（え？だって決めるんじゃないの？）

いや、そうだけどさあ言う場所を考えてくれないかなあ

（無理）

面白がつてるよねえ？

（そう思う？）

思う！

（にやはははは）

いやいやいやいや！笑い事じゃないから！こちとらかなり一生懸命考えてるから！

（へたれすぎて話にならないから、黙つとくねえ）

「はあ……」

「恭介、ホントに大丈夫？」

「ああ、心配するな。大丈夫だから」

と、もう謁見の間か案外近かったな。ここも和風か、例えるなら江戸城の天守閣みたいな感じ？

「こんちわ」

「無礼者！！」

俺が入ると同時に青年が刀をこちらに抜いてくる。だが、こっちはその速さ以上で鞘から抜刀術の要領で首元に抜き放つ。ただ斬られるのもシャクだしな

「なぜ、最後まで振り切らない」

「殺生は嫌いなんですね」

「ほっほっほ、お前の負けじゃな。武豊」

「そのようです。しかし、貴女は気をつけるべきです。この御方はこの国の帝ですぞ」

「あつ、そうだった……ウッドノースの王様と同じ態度で接してたわ。こりゃ、失敬、改めて私は黒銀の鬼神こと峰冶 秋です。」

「私はウッドノース王女 ミーナ・テス・ウラガーノです。以後お見知りおきを」

「鬼神の従者のレイです」

「同じく従者のナハト」

「九尾の妖狐の白玉天だ」

「ペルセフォネのメグです。私だけ敬語使わなくていいのかな？ 神様だし」

うん、なんだこのカオスなパーティーメンバーは鬼神に神龍、神虎、九尾の妖狐、王女、神様…… カオス過ぎる…… メンバー全員がチートだな

「待っていたぞ。鬼神殿」

「出来れば名前で呼んでいただけると嬉しいのですが……」

「そうか、ならば峰冶殿。お探しのロストテクノロジーの遺産はこの先の山の上にあるぞ。遺産を回収しに来たのであるう？」

「はい、帝様はご存知でしたか」

「ああ、予言の巫女がそう言っておったからな」

「なんだ？ 帝殿」

「うっ、草薙殿…… 来ていたのか」

「面白そうな者達が来る事は妾は予言したことだからの」

なんか爺言葉のロリが出てきたぞ。おい

なんか俺をなめまわすように見てくる。やめい！

「くつくつく、そなたが秋殿に恭介殿か」

「ッ！？ なぜそのことを？」

「妾に見破れぬ物はないのじゃよ」

「そう？ じゃあ私の考えてる事わかる？」

「ふむ……… む？ むむ？ 読めない？ 何故だ？」

「まあ、無理だろうな。メグ、何かやってるだろ？」

「うん、情報検索のキャンセルを掛けてあるよ」

「魔術か？しかし魔術くらいなら読めるはずじゃが……」

「レベルが違うよ。そこらへんの魔導士なんかと比べないでよ」

あゝ神様だもんな、そりゃ万能だわ。ゼウスはチートだったし、メグは魔法専門ならチートレベルな訳だしな。おお神様補正スゲーな

「まあ、本気を出してないゼウスとは言え神様を倒してる秋もすごいんだけどね」

「なに！？神を倒したとな」

「ああ、そういえばそんな事もあったなあ」

あれを倒したと言っならな。

「帝様！ここに鬼神殿がいらっしやると聞いたのですが」

「ここに居るぞ」

「拙者と手合わせ願いたく参上仕った」

「よいか？峰治殿」

「断る理由もないですからね」

「かたじけない！」

「では明日行おう」

「わかりました」

「秋、頑張ってね」

「おう！任しとけミーナ」

明日は大変そうだし寝るか

25話目 トウハの国は、めいど・いん・じゃばん！（後書き）

どうも、最近投稿する小説が多い！！と思っちゃってる熊海苔です。

やっぱりちまちまやるべきなんですよ。たぶん……

近況 ネタが思いつかないorz

なので、何か案があったら教えてください！ オイ

ではまた次回で

26話目 一つ目の遺産ゲット?だぜ

そして果し合い?試合?の日になった。
めんどくさそうだなあ

「そろそろ、時間だな。両者ともよいか?」

「うん、大丈夫です」

「帝様、かたじけない。審判役など頼んでしまいました」

「気にするな。見てみたかったのだよ鬼神とトウハの格闘王の闘いをな」

は?それ初耳ですよ?カクトウオウって何ですか?

(K-1?)

やめろ、怖い事を言うな

「では……」

そこ、溜めないでください

「始め!」

さて、どうす……

「はやっ!」

「はっ」

ガキイン

一撃が重い……しかしこの剣どつかで……

「その剣……ダークスレイブか？」

「やはり知っておったか……そうこれが遺産」

「めんどくさいなあ」

やっぱ、あれ使っしかないか……とりあえずテレパでつと
おい、メグ

（わっ！？ああ、恭介どうかしたの？）

アレスにグングニル借りてきて

（いいけど……どうするの？）

あいつに投げる

「気を抜いていて良いのか？拙者は強いのだが」

「弱い犬ほどよく吼えるって……ねっ！！」

太刀を投げつけて王家の剣で袈裟懸けに斬りかかる。しかし、その
太刀筋をいなされてしまう。

さらに左に持ち替えて双虎で居合い切り、相手がはじき浮く

「うを！？」

「これで！」

「なんてな」

「まだまだ！双龍閃・雷！」

さらに剣を振り下ろす！だが手応えがない……やっぱり
相手は先に距離を離すため後ろに大きく跳んだ
そして、睨み合いになる

「メゲー！あれは！？」

「貸してもらってきたよ。ほい！」

刃の部分に少し装飾がしてある2m弱の槍、グングニルを受け取る。

「今更だが、人の形を取っている時の名前は？」

「……村正」

「分かった。じゃあこの一撃で決めようか。村正」

「承知した」

王家の剣……めんどいからアロンドイトでいいか。アロンドイトを
左手で構えてグングニルを右手で構える

初撃が当たらなければ勝つ事は不可能だ。まあ、裏の手を使えばや
れない訳ではないんだけどね

念のため裏の手の準備もしておくけど……

「行くぞー！！」

村正が走ってくる。まだまだ……あと少し………今だ！

「うらっ！」

「甘いぞ！拙者は血を吸うまで鞘に納まらぬダークインスレイブだ。
そんな物でっ！」

「裏技その1、ただのグングニルに痛覚付与能力を付けておいた。
かすただけで後がめんどくさいぞ？」

「ふんっ、それごとき！」

剣ですらしながら突っ込んでくる。だが肩にかすったらしく傷がある

「これで！」

「チエツクメイトだ」

「な……に……？」

「裏技その2、3、4だ。まず、お前の強制実態化能力付与もちろ
んグングニルにだがな。3に三度目のヒットでの傷の無効化、最後
にこのアロンドイトの能力の増幅^{ブースト}だ。あと飛んで行った先に空間の
亀裂を作ってこつちに飛んで来るようにしてあった」

「なっ！……………があ！？」

「で？どうする？降参するか？」

（恭介、コイツどうするの？）

できればこのまま本体を封じちまいたいな。後々めんどくさそうだし

「こ……降参だ」

「ん、本体は封印させてもらうぞ。あれだけの力を持つてるんだ」

「くう……………承知した……………」

親指を犬歯で切り裂き本体にルーン文字を血で書く。封印のためだ

「よし！封印終了！！」

「あんまり変わらないようだが……………」

「くつくつくつ、今はな……………まあもう力は使えないはずだ」

「その含みのある言い方が気になるのだが……………」

「ふふふ、明日を楽しみにしているがいい。帝さん帝さん、部屋に

帰ってもいいですか？」

「あ、ああ、よいぞ」

「そりゃどうも。みんな行くぞ」

村正と帝さんがポカーンとしているが無視無視。部屋に戻って俺は寝たい疲れた

「うう……ねむ……」

「そういえば、秋よ。お主達は何の為に旅をしておるのだ？」

「んあ？ああ、なんか魔王を何とかしておくれとウッドノースの王様に頼まれちゃってさうしかたなく、ぶらぶらぐだぐだしながら向かってんの魔王城に」

「魔王か……ん？しかし今回の魔王は平和主義者だと聞いておるぞ？」

「平和主義者ねえ……ならカイザーって知ってるか？」

【ああ、あの喋るヴェオウルフね】

【あいつは強かったな。三人で攻めてもダメだったし】

「カイザー！？秋！カイザーを知っているのか！？」

「は？知ってるも何も戦ったぞ？」

おいおい、なんでそんなリアクションが返ってくるんだよ。大袈裟だろ。

「それでこれまでの事は魔王の仕業だと思っていたのだな？これは大変な事になるぞ……」

「……なんだなんだ？何事だ？……え？今回はもう終わり？次回に続く？マジで？」

「……【メタ発言ダメ！！】……」
「おおー！？」

26話目 一つ目の遺産ゲット?だぜ(後書き)

遅くなりました。

申し訳ないです。ネタがなかったんです

すいません言い訳ですね

27 話目 町へ行こう！その1（前書き）

和馬の話です。

27話目 町へ行こう！その1

場所は魔王城、魔王襲撃から1週間が経ったある日である。
職務室へ向かう影があった。この城の主和馬である。

「あのさ、クレア」

「なんだ？今かなり忙しいのだが」

「うん、この城が建ってる島って向こう側まで全然離れてないよね？」

「そうだな」

「時々、人が迷い込んでるらしいんだよ」

「ふむ、それで何が言いたいのだ？」

「もういつその事、島と陸を橋で繋いじゃわない？この島の魔族って友好的だからなんとかなると思うんだよね」

「なるほど……我々側は何も問題ないな。向こうの人間は知らないが」

「それで僕が聞きに行こうと思って……」

それを聞いてクレアが頭を抱えてしまった。僕、何か間違えた？

「今回の魔王は……歴代にそんなこと言った者は居ないぞ？というか、普通そういう発想がなかったな」

「やっていい？責任は僕がとるからさ。ね？」

「しょうがないな。そのかわりお前がちゃんと責任とれ。いいな？」

「じゃあ、行ってくる」

よしっ、最強の難関から難無く許可を手に入れたからもう大丈夫だ

村のある海岸に来たはいいけど……

どうしたものだろう？向こうに渡る方法が変幻しかない……でも、見つかったら怪しい目で見られるからなあ

うーん……

「あつ、魔王様。こんな時間にどうかなさいました？」

「ああ、ツクミのおばちゃんか。畏まって話さないで」

「そうかい。なら、どうしたんだい？和馬君。こんな時間にさ」

「ちよつと向こうに渡る方法を探しててさ。変幻しか思い付かなくて……」

「向こう？人に会いに行くのかい？なら、ウチの船を使いな。おんぼろだけど使えるはずだよ」

「ありがたく使わせてもらうよ」

「じゃあ、船着き場に行きな、おんぼろ過ぎて見つけやすいはずだよ」

「じゃあね。ツクミのおばちゃん」

おんぼろって……沈まないかすつごい心配だな……

「まったく、なんであんないい子が魔王になったのかね？世の中まだまだ不思議だねえ」

目の前にはかなりボロボロの船がある。腐ってるんじゃない？と思えるくらい色がおかしい。

「これは突っ込むべきなのかな？とりあえず……こんなのに乗ったら沈むよっ！船体の横に穴が開いてるってどういうことさ！？」

これは変幻するしかないかあ……でもまだ長時間の変幻出来ないからなあ

「よし、変幻！」

何変幻したか自分でもわかんないけど……この感じは……

「これ、ヒポグリフかな？四本足で前が鷲の足、ヒポグリフだね」

助走をつけて飛び立つ。身体に当たる風が心地好い、かなりの距離があるけれど何とかなるよね？

20分間ほど飛んだけどまだ距離はそこそこある。町？村かはわからないけど明かりは見えてはきている。でも、そろそろ元に戻りそうだな

「や、やばい……変幻が解けそうだ……うあっ」

変幻が解けて僕は海に落ちた。

27話目 町へ行こう！その1（後書き）

長らくお待たせしました。やっと更新です。
少し余裕ができたんで投稿できました

ほんと、忙しかったんですよ？いや、マジです
では、次にいつ更新できるかはわかりませんが
さよなら

感想ください

28話目 目指すはサンゴールド（前書き）

とりあえず、恭介一向トウハを出発

28話目 目指すはサンゴールド

翌朝

「ぎゃあああああ！？なんじゃこりゃあ！？」

と言う悲鳴で目が覚めた。うん、上手くいったみたいだな。安心安心

「あああああああきいいいいいいいい！きいいいいいいいさあああああまあああああああ！……！」

「おおー！？なんでキレてんだよ！？」

「お前が！元凶だろうが！馬鹿野郎！！」

なんでそんなに怒ってんのさ！？いいだろこれくらいのイタズラ。可愛いものじゃないか。

子供にしたぐらいでギャーギャーわめくなよ……

「若返らせただけだろ？」

「若返らせ過ぎじゃあああああ！！」

「俺じゃ制限効かないんだよ」

「なら、やるなよ！」

「キ、キヤラ崩壊しますよ？あと気にし過ぎるとはげるよ？」

「だあー！もう付いて来い！帝様に報告に行く」

いや、やだよ。めんどくせえ、あの人でしょ？あのほんわかした敵つい人でしょ？のーさんきゅーです。てかさ、全然目的地向かってないよね？俺ら、ダレ過ぎじゃないかと今更ながら思い始めたんだが……別にいいよね！ゆるゆる最高！

「わかりましたよ。はいはい行きますとも。だからさ？袖引つ張らないでくれる？伸びるから」

「いつてらっしゃい」

「行くぞ！早くしろ！」

そのまま引つ張り続けられること3分、帝の部屋の前に到着しやした。てかき、中に草薙って言うあのロリ婆巫女が居るっぽいんだよね。なんか言い争ってる音と物が壊れる音が響いてくるんだよ。

「これ、出直したほうがよくね？」

「拙者もそう思っていた所だ」

ガチャリ

「おお、秋殿……そなたは誰じゃ？」

「拙者です！村正です！」

「おい、帝。村正と名乗るシヨタが来たぞ？」

「貴女は兎にも角にも出て行っていただきたい！！」

「むうゝ妾は暇なんじゃがのぉ……そうじゃ！秋殿、ナハトとやらは神龍なのじゃな？」

「そうですね……どうしたんですか？」

「乗せてもらおうと思つてな」

「多分乗せてくれると思いますよ」

俺のその言葉を聞くと鼻歌を歌いだしそんな勢いで走って行ってしまった。

まあ、暇つぶしが見つかって良かったんじゃない？ナハトには悪いけどな

「全く……草薙殿は……おお、そうであった。入ってくれ村正」

「はっ、失礼いたします」

「失礼しまゝす」

「おお、秋殿も御一緒でしたか」

「はい、コイツが誰か分からなかった時の保険ですよ」

なんか、今日の帝さんの俺に対する言葉遣いが畏まったな。
ぶっちゃけ何事？なんでいきなり敬語なのさ

「そういえば、なんで敬語なんですか？」

「ああ、もし貴女がこの国と戦争したら敗北は決まって当然とわかつたので」

「なるほど……村正、お前はかなり小さくなってしまったがわしの護衛をこれまでどうり頼めるか？」

「無論、ありがたく受けさせていただきます」

「そうか……」

「それでなんですが、そろそろトウハの国を発たないとミーナの友人のパーティーの日にちに間に合わなくなってしまうので、では」

「お気をつけて」

「ありがとうございました。また来ますね」

まあ、あんまし長居すると向こうに迷惑だからな。

（みんな〜出発するぞ〜）

念話をみんなに出してみたが返事がない。あれ？反応ねえな……しやあねえ探すか

「確か、ミーナの反応がこの辺からあったはずなんだが………」

【ねえ、この本って貸してくれないの？（自主規制）してあげるから】

「なんでレイが居るか知らないが、そんなことをしようとするな。てか、もう出発するぞ」

【ねえ、ホントこの娘も（自主規制）させるからいいじゃない】
「俺の貞操をそうやすやすと使わないでくださいますか！？ 兎に角！ 5分後に門集合な！」

【わかったわよ……】

こいつは本当に曲者だなあ。俺の従者とか言ってたけど一番フリーダムだぞ

次に近いのが…… 白玉天とメグだな。場所は…… 中庭？

さてさて、今度は何してますかね。迷惑かけてないといいけど…… さっそく中庭へ向かってみると中庭周辺でお手伝いさん方が、ほんわかった雰囲気で中心にある大きな木の根元を見ていた。背伸びをして見てみると木の根っこを背もたれにして二人が寝息をたてていた。うーん、何か絵になるなあ

「たく…… 寝てるのを起こすのは悪いが起きてもらうか」

「眠いゝ我に構うな」

「やめてゼウス！ そんなに食べられないよぉ……」

「こ、こいつら能天気過ぎる」

くそ、こうなれば最終手段だ

「我ここへ、契約の文を捧げる。汝、我に力を貸したもう 転
移！」

よし、3人回収！ 次はつと…… ナハトが近いな。どこだ？ たしかロリババアを乗せて飛んでるはずだが……

「はぁ…… 汝ここに力を示せ、我、汝に贅を捧げし者 グラ

ビティフィールド」

ズドーン！！！

「いてえ！！恭介！！てめえ何しやがる！」

「5分後、門の前に集合な！」

ものすごいとびっきりの笑顔をナハトへ向ける

「わ、わかった……」

「巫女さんもほどほどにしろよ？」

「き、肝に銘じておこつ」

「じゃあ、また後でな」

最後がミーナか……どこだ？ふうむ……あの塔から見たら探しやすそうだな。

「着いたはいいけど……ミーナも寝てたか……」

しかも、塔の中に居たか……たく……時間は？3分か。まだ時間あるけど、どうしたもんかな

「時間もある事だし。背負って行くか。この体格差だから男になるしかないか……よっこらせつと、軽いな〜ちゃんと飯食ってんのか？」

ほんと、可愛いなコイツ。にしても、俺なんかのどこがいいんだ？見た目は〜いいらしいな……性格は普通じゃないのか？う〜む、本

当にわかんねえな女心ってさ

「うーん……恭介だめだよーこんな所で……むにゃむにゃ」

……なんつー夢見てんだよ。てか、夢の中の俺なにやってんだよ。

「まあ、しゃーねえか……おっ、ちゃんと集まってるみたいだな」

「【遅い!】」

「すまんすまん、じゃあ、行くか」

さあ、目指すはサンゴールド、日の金?なんじゃそりゃ

28話 目指すはサンゴールド（後書き）

次回は町へ行こうのその2です

29 話目 町へ行こう！その2

目を覚ますと、見知らぬ天井だった

「イテテテ、ここは？」

周りで何か目印になる物は……海

「あつ、起きました？気分はどうですか？」

「気分はあまり良くないよ。頭痛いし……それで君は？」

「私ですか？フイーって言います。昨日、夜の漁をしてたら貴方が倒れていたんで拾ったんです」

「拾ったか……とりあえず僕の名前は和馬。助けてくれてありがとうね」

「じゃあ、お礼に和馬さんと（自主規制）をさせてください」

「すいません。それだけは勘弁してください」

「むう……ならお尻に……」

「いや、場所とかの問題じゃないから！！もっと根本的な問題だから！」

「じゃあ……キスを……」

「なぜに！？」

「なら譲歩してディープキスで」

「あなた、一切譲歩する気ありませんよねえ！？」

「なら……今日一日デートしてください」

「うん、いいよ」

「あっさり！？」

いや、これまでのに比べたらかなりね健全だし大丈夫でしょ？あつ、そうだ。ここの町長と話つけなきゃ

「ところでフィーちゃん、町長の家に案内して欲しいんだけど……いいかな？」

「ガリウスさんの家ですか？ならいいですよ。近いですし」

「うん、ありがとう」

町長さんの家に向かったはいいいけど……お隣りさんって近すぎない？

「ガリウスさ〜ん！起きてますか〜死んでませんか〜？」

「なんか呼び方がひどいね……」

「そうですか？いつも通りなんですけど……」

少しすると家から色気ムンムンの熟女が出てきた。町長さんの奥さんかな？

「何？……まだ眠たいんだけど」

「ガリウスさん、お客さんですよ」

「客？そのヤバそうな子の事？ふ〜ん、その子の表情からすると交渉事のようなね……いいわよ。中に入って、フィー貴女もよ」

「なんで私もなんですか？」

すっごい嫌そうな顔のフィーに向かってガリウスさんがすっごい笑顔で言い放った

「この子を連れてきたのは貴女なんだから責任取りなさい」

「え〜そんなぁ……この家すっごい苦手なんですけど……」

「あのさ……フィーちゃん。ここで立ち話もなんだし上がらせてもらおう？」

「うう……しょうがないですね……」

ガリウスさんの後ろをぞろぞろとついて行く

あゝフィーちゃんの言ってた意味がやっと分かった。香水の匂いがキツすぎる。

「それで？今代の魔王様が一人で何のようなのかしら？」

「あれ？ばれてたの？」

「私を誰だと思ってるの？」

「町長さん」

「町長だけど、昔はギルドで名をはせたのよ？正体を見破るくらい楽なものよ」

なるほどなあ、もう正体もばれちゃったしまあ、いいか

「それで、本題なんですけど、この町と魔王城のある島を橋で繋げたくって」

「それってこの町に魔物を放ちたいって感じ？それとも他に何か考えでもあるのかしら？」

「考えて言ったら考えですね。ちょっと最近、こっちの方で暴れてるヴェオウルフとかの魔物を取っ捕まえたりしようと考えていたり、あと、魔族のおばちゃんが新しい味を探したい！って言うってたりしたんで」

この話は信じてくれるんじゃないかな？おばちゃんの事はわかんないにしても、ヴェオウルフの事は事実だし

「じゃあ、最後に質問。私たちに危害を加えるつもりは？」

「ないですよ。むしろ仲良くしたいですし」

「分かったわ。それで？橋は誰が作るのかしら？」

「うゝん……出来れば双方で協力して作りたいんですけどね……流石に無理ですかね？」

僕とガリウスさんならすぐに橋作れちゃうからなあ。でも、それじゃ意味ないし……

「やっぱりそこよねえ。どうせ、私と貴方が魔力量に物を言わせてごり押ししたら3時間で完成するし……どうしたものかしら？」

「あつ、あの！」

「どうかした？フィーちゃん」

「橋の装飾をみんなに頼んだらいいんじゃないでしょうか！」

「ああ、なるほど」

「それよ！」

「じゃあ、装飾は子供優先でどうです？」

「そうする理由は？」

「子供は人も魔族も関係なく仲良くなれるから。子供の時ってそういうの関係なく友達になれるじゃないですか」

「じゃあ、決まりね。いつ開始する？」

「じゃあ、明日の昼からでどうでしょう？向こうに連絡しなきゃいけないんで」

「分かったわ。明日の昼ね。そっちとの連絡方法は？」

「時間になったら空に魔法を打ち上げるのを合図にやりましょう」

「じゃあ、明日ね」

「はい、明日」

さて交渉も済んだし帰って説明しなきゃいけないや

「カズマさん！待ってください！」

「ああ、フィーちゃん。どうかした？」

「まだ、デートの途中です！戻るなら私もくっついていきます！」

「あ……ついて来ちゃっていいの？」

「いいんです！約束を破ろうとするカズマさんが悪いんです！」

「はあ……わかった。連れて行ってあげるから。ガリウスさん、栄養ドリンクってあります?」

「あるにはあるが、どうするんだ?」

「飲むんです」

確か、この世界の栄養ドリンクはかなり強力って聞いたから大丈夫

「とりあえず、どうぞ?」

「ありがとうございます。では」

「あつ、待ってください!カズマさん!」

さてと、飲んだことだし行くか

「変幻」

さてさて、今回は何かな?

「わっ!ペガサスだ……カズマさん!どこ行っただんですかー?」

「ここだよ。ここ」

「ペガサス?の下ですか?」

「いや、そのペガサスが僕だから、早く乗ってくれないかな?」

「はへ?乗るんですか?」

「うん、早く」

「わかりました……」

ゆっくりだけと乗ってくれたよね?よし、行くぞ!

「しっかり捕まってる!」

「わわわ!お、落ちる!」

「え?ちよっ!ちゃんと捕まってるよ!?」

「は、はい！」

ふう……危ない危ない……フィーちゃんはちゃんと見てないと危なそうだなあ

それにしてもヒポグリフよりペガサスの方が燃費いいんだ……ホントこのランダム機能どうにかしたいな。毎回毎回ランダムだったら身が持たないよ。そろそろ昆虫とかも出てきそうだしさ……

「あと2分くらい待つてね。もう着くからさ」

「もう着くんですね？ふう……良かった……」

「あれ？そんなに揺れた？今回はかなり上手くいったのになあ」

「途中でアクロバティック飛行をして揺れないわけなのでしょう！」

「！」

「そうだったね。と、もう着陸するよ」

ふう……無事着陸出来た……ぞ？やば……力入んない

「フィーちゃん、あのさ……ここの近くに親切なおばちゃんがいるから呼んできてくれないかな？」

「え？ああ、はい。わかりました」

「じゃあ、よろしくね」

うあ、燃費のいいペガサスでこれって……体力ないなあ僕

「これからは筋トレしなきゃなあ」

「連れてきましたよ！」

「あら、和馬君じゃない。そんな所で寝転がってどうしたの？」

「ああ、ツクミのおばちゃん。今夜泊めてくれないかな？変幻使い

すぎて動けないんだ」

「別にいいけど、あんたも馬鹿ねえ、慣れない事はコツコツ慣らしてくもんなのにいきなり無理するから……で？この子も一緒かい？」

「うん、人間の子だけど大丈夫？」

「人間！なら今日の晩御飯は奮発しなくちゃね。美味しいもん食べさせてあげるから、和馬君を運ぶの手伝ってちょうだい」

「うう、ごめんね。フィーちゃん」

「別に大丈夫です。魔族の人達は優しそうですし、お手伝いですよ」

「ふう… やつとついた……」

ツクミのおばちゃんはさつき家に入っていつて

「あんた！お客さんだよ！」

「何！？美味しいもん食べさせなくては！今から魚をとってくる！」

つて、会話があつてからはや9分、うん、頑張りすぎじゃないかな？ツクミ夫婦

「お待たせ！さつ、中入って」

「おじゃまします」

「おつちゃん、久しぶり！」

「おつ、和馬！ついに女を連れ込んだか。やるじゃねえか！」

「いや、そんなんじゃないよ。僕にとつてもお客さんだからさ」

「あら？そうだったのかい？部屋一緒にしちまつたけどよかったかい？」

はやとちりにも限度があると思うんだけど……

「母ちゃん、さつさと晩飯にしよう」

「そうだね。さあ、どんどん食いな！」

「うわぁ〜美味しそう！」

「まさか、おっちゃん……あの短時間でこの石鯛釣ってきたの？」

「おうよ！今度何時でも弟子入りしにこいよ！和馬」

「ははっ、その時は頼むよ」

その後、楽しい（僕には大変な）食事が続いた。

そして、そろそろ、就寝時間なのだが……

「いやいや！僕が床で寝るから、フィーちゃんはベッド使つてよ！」

「ダメですよ！仮にも和馬さんは魔王なんですから、私がベッドを使うわけにはいきません！」

「いや、女の子が居るのにそれを差し置いてベッドなんか使ったら男が廃るってもんだよ」

その後二時間ほどこの言い合いが続いた。

29 話目 町へ行こう！その2（後書き）

感想待ってます！

30 話目 町へ行こう！その最後（前書き）

短いですがどうぞ

30話目 町へ行こう！その最後

翌日の正午

「じゃあ、クレア。空に魔法を撃つてくれ」

「うむ、わかった」

クレアが無詠唱で空にフレイムを放った。これで向こう側へ連絡出来たはずだ。

「我、土の精霊ノームに命ず。ここに在りし煉瓦で橋を作りたもう」

そう呪文を唱えた瞬間、山高く積まれた煉瓦が光りもの凄いスピードで橋を構築していった。

「あとは、魔力を流し続ければいいんだよね？」

「そうだ。だが……」

「流す魔力の量に気をつけろ。でしょ？わかってるよ」

「ならいいんだが……そこの娘」

「フィーです！！」

「ちよっかいを出すなよ？」

えーと、まずこの状況はスルーして頭の中にこの状態を維持する魔法を構築………定着

よし、あと解除パスは昨日の晩御飯のメニューにしておこう。思い出すの楽だし

「で？クレアとフィーちゃんはなんで口喧嘩してるの？」

「こいつが悪い」「この人が悪いんです」

「あはは……僕は聖徳太子じゃないから一気に言われても何かかわかんないよ」

「こいつが時々喧嘩を吹っ掛けてくるのだ」

「いいえ！あなたです！」

「ああ、もうわかったから黙っててくれないかな？気が散るから」

「すいません……」

二人が黙ってから先ほどよりは順調に作業が進んだ。時々、ヴェオウルフのあねさんが石材を運んできてくれてもの凄く助かった。まあ、来るたびにフィーちゃんが怯えていたけど気にしたら負けだと思ったから放置の方向でいきます。

「橋が完成した時ってなんて言うんだっけ？」

「開通でいいのではないか？」

「ねえ！私今回完全に空気だよね！？」

「開通でいいと思います」

「ねえ！？」

「雪華、落ち着いて。ね？」

「うう……無視する方が悪い……」

「ごめんごめん。それで、どうかしたの？」

「子供を集めてきたから報告しにきたの。どうすればいい？」

「おお、魔王。ハーレムだな」

「ガリウスさんですか……驚かせないでください」

「いやいや、すまなかつたな」

絶対確信犯だこの人、タイミング計って声掛けたよ

「それで？今からどうするんだい？」

「ああ、本島にヴェオウルフ再教育者を送り出したあとから、飾りつけを始めましょう」

「いいだろう。それでその再教育者ってのは誰？」

「あねさ〜ん！」

「なんだい？あたしの出番かい？」

「この人です」

「ヴェオウルフ？」

「そうそう。この島のお袋さんですよ」

「だあれがお袋さんだい！あたしはまだそんな歳じゃない」

「痛い痛いギブギブ！ゲンコツでのぐりぐりはダメだって！」

ぶっちゃけると、あねさんの外見はすでに、ヴェオウルフではない。耳と尻尾の生えた人間が一番しっくりくる表現だからなあ。ファッションがすでにカオスだけれども、着物の下にGパン。

本人曰く、一番ヤクザのあねさんぽい見た目で動きやすいかららしい。どこでヤクザを知ったの？と質問したら雪華に聞いたと言ったので、雪華を注意したのは実は、本島に出かける前日の事だった。

「じゃあ、あねさん。再教育をお願いします」

「あいよ。紳士にできてやんよ」

「いつてらっしや〜い」

「あばよ。とつつあ〜ん」

「あはは……ずいぶん変わっちゃったな」

「じゃあ、あとはウチのガキ共に任せて寝るよ。じゃあね」

「さよなら〜」

これが恭介達がトウハの国を出発する5日前のことである

31話目 絶賛迷子中だよ！

さて、問題です。ここはどこでしょうか？ヒントは木です。さあ、答えをどうぞ！

「って……………知るかああああ！こっちが聞きたいわっ！」

と、自分に聞いて叫び返してしまった訳だが、ここはあと少しでサングールドに入れる場所に位置する。迷いの樹海だ。

なんで迷いなのに入ったかって？事の発端は今俺の後ろでしょーんとしている金髪ツインテール娘が原因だ。

目の前に『この先、迷いの樹海につき立入禁止』っていう看板があって、それをみたミーナが国内の地理なら任せなさい！と豪語して突貫した結果がこのザマなわけだ。

そうそう、すまん。この小説には触手は出ないからエロは少ないぞ。……………今更か。

「なんか、今回は地文が多いな」

「メタ発言も多いけどね！」

樹海に入ってからミナーナのツツコミが絶好調だ。俺のおかげだな

「ねえ。恭介、前方に人影」

「だな。しかし、耳と尻尾の生えた人間なんか……………居たな。ウチのパーティーに一人」

「我の事か？」

「他に誰が居る馬鹿狐」

「ここに入ってからイライラし過ぎだよ？」

「木しかないからな。同じ景色を見てたらどんどんイライラしてき

ただけだ」

（私に変われ〜！）

いやだ。黙っているレズ

（ひどっ！？う、うるさい！男のくせにずっと女の子になったままで過ごしてるくせに！）

かちゅん

今の発言には流石にキレた。あんだと？もっかい言ってみろ

（何度でも言ってやるわよ！女の子になったままで過ごしてる変態！）

ブチブチ

（優柔不断！へたれ主人公！）

ブチブチ……プツン

おうおうおう！言ってくれやがってこのクソガキが！言われるだけで終わる恭介様だと思っなよ？そもそもよ。人から勝手に分裂して中に居座りやがってよ。家賃払え！てか、当分お前を無視するからな。以上！

「これで片が付いたぜ……さてと、あの人影に近付くが反対の人拳手！」

見事に誰も手を挙げない。ここまで行くと逆に凄いわ……

「じゃあ、ちょっとくら会ってくるわ」

「いつてらっしゃい。迷子にならないでね」

誰がなるかつ！とは言い返さない俺は大人なはず……違うか

「すいませ〜ん。聞きたい事があるんです……が!？」

「す、すまないが、ここはどこだ!？」

肩を思いつき掴まれて涙声で言われた。

逆に聞きたいがまず落ち着いて貰おう話ができない

「だ、大丈夫ですよ。向こうに俺の仲間が……って居ねえ!？」

「い、いなくなったのか!？人影なら1つあるぞ」

「いやいや、あんなオッサンばい人知りませんよ!誰ですかあれ!」

「あたしに聞くな!あたしはここまで一人旅だったのだぞ」

なんか、言い合いをしてる間に人影が近付いてきた。

「ひっ……」

「だ、大丈夫ですよ!人なんですから話し合えば……」

「へ、変態だったらどうするんだ?犯され……」

それは流石にヤバそうだからと思ったが、さっき秋と喧嘩した時に男になっていたから大丈夫そうだ。

まあ、俺は……だかな

「ほ、ほら、俺男なんで大丈夫……」

「ウホッいい男……」

「そっちの方でした!？女なって無害なら、俺はなるぜ!」

「美女一人に少女一人、ヒヤッホオオオ！」

「んなっ、ちよつと流石にに逃げましよう！」

男に戻って女の人の手を引いて逃げる。

と、後ろから「やっぱ、人間を驚かすのは楽しいなあ」という声が聞こえてきた。こう何と言うか……ねえ？……さっきまでビビってた自分が馬鹿馬鹿しくなってきた。逆にイライラが溜まったと言
うか……要するにキレてるんです。

「さてと……相手が人外と分かったらこっちがやることは1つだよなあ」

じゃあ

「火の精霊サラマンダー、力を貸せ……」

圧倒的な

「炎撃……」

力量の差を見せつけるか

「紅蓮双槍！！」

退治するかだ。

前方へ二つの大きな火の槍が一直線に飛んで行き化け狸おそらを炎の柱の中に巻き込んだ。

「二度と出てくるな。虫酸が走る」

「ほお…… オリジナルの魔法か…… 君、名前は？」

「俺？ 恭介ですけど…… それがどうかしたんですか？」

「恭介君か。 ちなみに何処へ向かっているんだ？」

「隣のサンゴールドですけど……」

こんな事聞いて何がしたいんだ？ この人は

「へ？ ここはサンゴールドではないのか？」

「ウッドノースですよ。 あと、ここは迷いの樹海だそうです」

「しまったあ……」

なんかよく分からんが落ち込んでしまった。 よくわからん人だなあ

「あのとりあえず名前を教えてくださいませんか？ 呼びにくいんで」

「ん？ ああ、あたしは…… あねさんが姐さんとも呼んどくれ」

「はあ…… わかりました。 姐さんと呼びます」

ふむ、なぜにヤーさんの方面なんだ？ と言うか服装が斬新過ぎる……

…なぜ着物の下にジーパン着てるんだ？ なんか深く突っ込むのもなんだしさ

「それで、姐さん。 と言うことは目的地が同じって事ですよね？ なら、一緒に行動しませんか？」

「もとよりそのつもりだよ。 しかし、迷いの樹海か…… 変な所に迷い込んでしまったなあ」

「そろそろ行動を開始しましょう」

ああ。 と頷いた姐さんと共に樹海最深部へ向かう。

まあ、たぶんの向きだけだな。

「それで銀姐さんは、何をしに？」

「いつの間に銀がついたんだい」

「いや、耳と尻尾の毛の色からですけど……」

「まあ、いいか。ああ、それはね。最近ヴェオウルフがやんちゃになつてゐるって聞いてねえ。ガキ共に再教育をしにきたってわけさ」

「でも、銀姐さんは大丈夫なんですか？ 相手はヴェオウルフですよ？」

「はあ……話を聞いてないかい？ 強いヴェオウルフは喋られるって話」

「ああ、知ってますよ。一回会いましたし」

「知ってるなら話が早いね。ヴェオウルフの最高レベルをLv.5だとすると、1が赤ん坊とか子供。2が大人。で、3が喋る。4以降は二足歩行が出来るようになる。そしてLv.5があたしさ」

「はい？」

「だから、あたしが最終形態なんだよ。ヴェオウルフ界最強」

「えーと……要するに銀姐さんはヴェオウルフと言う事？」

「そういうことさ。おっと、あたしは人を襲わないから大丈夫だよ。食べるなら牛だね。あれはうまい」

ああ、幻想郷の兎的感覚ですね。わかります。

じゃあ、あのヴェオウルフもこうなるのか？

早く倒さないとな。あれ以上強くなれると困る。

「にしても……この樹海の中心はまだなのか？ 流石に、距離あり過ぎだろ……」

「まあ、簡単についてしまつては迷いではないだろう。だからと言って……ん？ 恭介君、あたし達は今同じ場所をぐるぐる回っているではないか？」

「え？ うわあ……最悪……念のために幹に傷付けときますかね」

懐から小刀を取り出し木の幹に×印を付ける。
こういう時こそサバイバルナイフが欲しいな。
刃が厚いし頑丈だしな」

「……………」

「またっスね……………」

「ああ、またこの場所だな」

今、さつき×印を付けた木の下に居る。

なんでかって？なんでだろうね。おにいさん少し涙ぐんじやいそうだよ。

「なんか、一定の距離を歩いたらここに帰ってんだよなあ」

「だろうな。恐らく何者かがこの樹海の中心に居るのだろう。そして、その者から一定距離の場所と、ここがメビウスの輪のようになっているのだろう。他には考えられん」

「メビウスの輪ですか？となると、その境界を探すしかないですよね？」

となるとこの木には悪いが進むたびに×印を幹に付けるしかないか……………」

よし、一つ目

「30本目。結構きましたね。あれを31本目にしま……………」

「あれが限界だったな。ということは、あそこのどこかにある魔法の構成を壊せばなんとかなるのだが」

「俺達じゃ、できない。ですよね」

「ああ、専門のブレイカーに頼まなくてはいけないくらい難しい術式だ。あれは」

「できない事もないんスけどね。如何せん魔力の燃費が悪いもんであれはいかん。使った後にテンションやらなんやらがおかしくなる。それは、エデンの園に行った時に証明済みだ

「やれるならやればいいじゃないか。ここから先に進まなければならぬんだからな」

「どうなっても知りませんからね？」

ふと思い出す。ナハトとレイが居ないと出来ないんじゃない？試した事ないけど……まあ、やってみるしかないか……サポートなしは色々面倒だ。あとやり方変わるし……

「時間軸、空間軸ともに固定。魔力構成解析、魔力量、循環率ともに安定」

「な、何を言っているんだ？」

「解析終了。離れててくださいね。ブレイク！」

パリンとガラスが割れるような音が響いて前へ進めるようになった。よっしゃ！

いざ、最深部へ！

31話目 絶賛迷子中だよ！（後書き）

次は新キャラ登場&この世界に介入です。

あと2人現代っ子がこの世界に来ます。お楽しみに！

32話目 お呼出し

恭介が居なくなっってから約1ヶ月（アルカディアとは少し時間の流れが違うもよう）あたしは人が忘れる動物だと今実感している。恭介を今も心配しているのはあたし、裕一、達也、そして恭介の姉くらいである。

なんとも薄情なものだ、つい数ヶ月前まで一緒のクラスだった人間をたった1ヶ月で忘れてしまうのだから

「また、空ばかり眺めて……あたしは何してんだか」

「どうかした？まる」

「ん？何でもなし。授業がつまんないだけ、因数分解なんか大人になっても使うのか疑問だね」

「まあね。けど、ここテストに出るらしいからやっといたほうがいいよ」

「ん、わかった」

今話していたのが恭介を心配する数少ない友達、裕一だ。バスケット員で気さくな良いやつ

もう一人この高校に居るのだが、そいつはちょっとクセが強いと言えかなんと言え……とりあえずこのクラスの委員長である。もちろん男子だ。あと野球部

「じゃあ、今日はここで終わりだ。予習してこいよ」

授業が終わったようだ。さて、委員長（仮）についてだが……

「ばるたん、ばるたん」

そうそう、あたしをこう呼んで……って来たのか

「どうかした？」

「何やってんの？」

「ボツと空を眺めてるだけ、授業つまないし」

「成績下がるよ？」

「別に？平常点下がるだけだし」

「そういえば、まるはその点数とかでなんでここに居るの？」

「ん？ああ、入試の時に手抜いた。それにあたしより、弟の方が頭いいよ？スペック高いし、見た目もいいし」

「ふん」

まあ、あたしには関係ないけど。と、そこで担任が教室に入ってきたのでHRが始まる。早く終わらないかなあ？凄く暇

「さてと帰ろう」と

何しようかな？家で、ゲームでもしよう。

「ちょっと待って」

「ん？」

「今日部活ないから3人で帰ろうよ」

「別にいいけど？」

会話はあたしが頷くだけだけどねえ

「じゃあ、またね」

「明日は遅刻するなよ？」

「わかってるって」

しつこいなゝあたしだって遅刻するつもりはなかったんですーっだ
さてと、さっさと帰ろ。そしてゲームしよう。

「それにしても、よく部活なんてめんどくさい物を頑張るわね」

「好きだからね」

「ふゝん、そんなもんか」

「そんなものだよ」

沈黙、喋る事なんてないしいか。

と、後ろから吸い込まれるような感じを覚えて後ろを見るとそこには黒い穴

なんのフラグ？

「達也、あれ何？」

「あれって何のこ……」

達也が言葉を最後まで言う前にあたし達は穴に吸い込まれた。

「ぐえ……」

穴から落ちると下からくぐもった声が聞こえた。ゴメン達也

「二人？勇者が二人だと？」

「あつ、あたしは関係ないです。コイツですコイツ」

下で伸びてる達也を指差す。面倒事はゴメンだからねゝ
あとよろしく達也

「では、勇者様。こちらへ来てください」

「へ？俺？ちよっ、どういう事だよ？ばるたん！？」

「ばるたんなんて人は、ここには居ませんよー」

さて、達也を捧げた事だし、あたしは自由だ。

町へ行つて情報収集しなくては

えゝ、町に行つて分かった事はここは何かユーランドなる国らしい。
それで最近魔王が再登場したから、やっぱ勇者つしょ？的なノリで
呼ばれたらしい。

最後に現代っ子が大人を撒けるはずもなく保護？されてしまった。

「とりあえず、城内でおとなしくしててください」

「……………はい」

しょうがないから城内で情報収集しよつと鞆の中にお菓子もある事
だし、城の女性陣を懐柔して行けばなんとかなるでしょ？

思い立ったら即行動！

メイドさん達からドンドン懐柔して行こう。

ふうゝ気がつけばメイドさん全員を仲間にしてしまうあたしの話術
にビックリだ。……………まあ、お菓子パワーが一番大きいだろうけれど

……

と言う訳で、只今メイドさん大会議（ようするにお茶会）に参加中
であります。

「それで何が聞きたいんです？アヤさんは」

「ん〜、基本から城内での噂までかな？」

「そういう事なら私達にお任せを！それはそうとしてアヤさん」

「何ですか？」

「女性が胡坐などかいてはいけませんよ？はしたないです」

正論を言われては逆らえないじゃないですか。やるなーメイド部隊それにしても、二回目の異世界は王道ファンタジーか。楽しみだなあ

とりあえず、普通に座り直す。これで文句はないっしょ

「では、まずこの世界について（以下4話目参照）
事です」
と言う

「そういえば、レアルはウッドノースと戦争して負けたらしいわよ」

「そうそう！最近は何騒になったわよね〜」

「お城内の事と言えば、なんか危ない魔導書があるらしいのよ」

なんか気付いたら、あたしを無視してどんどん話が發展してってる

……

あたしを置いてかないで〜

と、そこで廊下からどたどたと走る音が聞こえてきた。

「ばるたん！！」

「だから、ばるたんなんて言う人居ないってば」

「まる！」

「何？」

「申し訳ありませんが。タツヤ様、勇者様と言えど私たちメイドの休憩所にいきなりノックもせず入るのは礼儀に反するかと」

「あ…すいません。まる！ちよつとこっち来て！」

「じゃあ、情報ありがとございました」
「またいらして下さいね。アヤさん」
「はい」

まだ、全然聞き出してないんだがなあ……

「まる！これはどういう事だよ。なんで俺が勇者なんだよ」
「いいじゃんか。坊主勇者（笑）」

「（笑）じゃない！」

「なんで俺だけを放置してきたんだ！」

「ん？気絶してたから、いいエサになるかと……」

あらら、押し黙った。何を考え込んでるやら……
とりあえず、武器は？あたしの

「あのさ、あたしは武器ないの？」

「ん？ないだろ。普通に」

「まあいいや、自分で手に入れるから」

「へー、まあ頑張れ」

疑ってるようだけど、あたしの方が異世界歴長いんだぞ？言ってるけど、ナンナ？居る？

（呼ばれて飛び出てジャジャジャーン）

それもう古いからやめてよ。恥ずかしい

（わしを呼んだ割に対応が悪いの。それでどうかしたかえ？）

なんか、この城の中に魔導書が在るらしいんだけど、取ってきてく

れないかな？

（お安い御用じゃ。わしに任せてくつろいでおれ）

おおゝ頼もしい。けど今日は満月じゃないよ？人型になれないんじゃない？

（なんじゃと！？それを先に言わぬか。馬鹿者！―じゃが受け付けてしまったしの。しっかり取って来よう）

よろしくあたしは寝て待ってるねゝ

32話目 お呼出し(後書き)

感想ください。

33話目 拝啓 サンゴールド様、そろそろそちらに行けそうです（前書き）

なんかサブタイトル長くてすみません

33話目 拝啓 サンゴールド様、そろそろそちらに行けそうです

にしても、さっきの結界を壊してから何にもないな……あれか？
あれ程度を破れぬようなら我に挑めぬ！』みたいな……違うか。まあいいけど……

「にしても、道のり長いっすね」

「そうだな…だが、さっきの結界が最後なのは確かだろう」

「そろそろ中心部ですね」

木々の隙間から光が差ししてるし、開けた場所に出るんじゃないだろうか？

中心が開けてるって事は歪だけどドーナツ状になってるんだな。好物なのか？と言うか、この世界にドーナツはあるのかね？

「それで開けた所に出たはいいけどあれなんですか？」

「そんな事あたしに聞くな。逆に聞きたいくらいだ」

目の前には大きな石質の棺桶、そこから伸びたケーブルのような物が地面に繋がり脈打っていた。何かを巡らすように

なんぞこれ……

って

「ちよつ、何開けようとしてるんですか！？」

「中を見ないとわからないじゃないか」

「そりゃわかりますけど、なんか罠があつたらどうする……んです

……けど」

「どうしたんだ？」

銀姐さんが蹴り開けた棺桶の中から出てきた物に啞然、これはお約束のパターンと言う物ですかね？

「う、後ろ」

「後ろ？何が……なっ！」

そう、触手が出てきていた。二人に向けて

なんで俺！？男だけとおおお！？動けるスピード的には女になった方がいいけどそれをγつたら本格的に狙われますからね

「恭介君！助け……」

「俺もう捕まってるから……俺にどうしろと？」

「このによるによるを切り刻んで欲しい」

「出来ますけど、もしもの時は責任取ってくださいね」

「責任？何のだ？」

「気にしたら負けですよ」と

女になると同時に周りに炎を展開、俺を縛っていた触手を燃やして脱出

手の中に二振りの刀を出現させ銀姐さんを奪還、手足が自由になった銀姐さんは襲いくる触手を滑るように避けながら引き千切っていく。

「あたしに触るたあ、いい度胸だね！キッチリ落とし前つけて貰おうか！」

目をランランと輝かせながら棺桶に肉薄して行く。すげーな、これまでのダメダメっぷりが嘘のようだ。触手が残り数本になった時、銀姐さんの掌に光る玉が出てきた。その玉を残りの触手に向かって投げた！視界が真っ白になったかと思うとすぐに視覚は復活した。

見事に触手のみが消え失せていた。

「すっげー……」

「あたしに任せればざっとこんなもんよ」

「任せれば……ね」

「さうて、この中身を拝ませて貰おうかな」

黒い笑みを浮かべて棺桶に近づいて行く銀姐さん、手をワキワキ動かしながら。なにするつもりですかあ!?

「ふふふ……さう何だろうねえ」

「ん?女の子?」

「幼女だね」

「そっちで言うんですか……」

「ほら、起きな」

頬を叩いて起しちゃアカンでしょ。てか、やめたげなさい。絶対痛いつて、音がビシビシ聞こえるんだぜ?痛いに決まってるだろ。おい、そろそろやめたげて、その子のライフはもうゼロよ!

「ふむ、起きないな……」

「頬を叩きすぎです!真っ赤じゃないですか!」

「む、やり過ぎたかねえ」

「やり過ぎです。とりあえず、その棺桶から出してあげましょうよ」

「え〜」

「え〜じゃないです。やめてください。というかやめなさい」

「んん……」

「あつ、起きましたよ」

「つう〜痛い……」

「ほら言わんこっちゃない」

「おい、兄ちゃん。あんたら誰だ？」

「あん？俺ら？あゝ、うん、ここに迷い込んだ旅人」

「だから、名前を教えろつつつてんの！！」

「ああ、俺は恭介。んでこの人（？）が」

「銀姐さんと呼んでくれ」

「あ、ああ。んで？迷い込んだつつー事は、ここから出たいんだろ？」

「まあ、そういう事だな」

「わかった。オレ様に任せろ！」

「ん。では頼もう」

「おう！じゃあ、いくぜ！」

一気に息を吸う少女、何するのさね？

「樹木共！！一旦うせろ！！」

はいっ、ただの命令でした！

しかも、無駄に胸張って言ってるしさ。まあでも、ここから脱出出来るし？いいんじゃない？

つー訳でミーナ達を探さねえとな

「お　い！ミーナと愉快的仲間たちー！！」

静寂……寂しい

「……だああれが愉快的仲間たちじゃあああああああ！！」

「おお、出てきた。ならさっさと行くべ。サンゴールドはこの近くなんだろ？」

「そうよ。あと30分くらいで国境、早くシンシアに会いたいなあ」

「俺は早く保存食以外を食いたいよ……」

美味い物食いたいなあ

33話目 拝啓 サンゴールド様、そろそろそちらに行けそうです（後書き）

どうも、熊海苔です。

まずは、PV70000越え&ユニーク14000越え
ありがとうございます！

気がつけば、早いものでそろそろ1年ですよ。はははっ、何がって
？ いやだなーこの小説そろそろ1周年ですよ。

変なノリすいませんでした。

でも、うれしいかぎりです。はい。そして今回出てきた新しい人は
今後出てくるかは今のところ不明です（笑）

なので名前はなです。とりあえず、私の中では棺桶さん（仮）で
す。そのまんまなのはご愛敬と言う事で許してください。

あとできればこの子の名付け親を募集します。名前が付けばまた出
てきます。

と言う訳で簡単なプロフィールです。

性別 女

容姿 幼女

髪 緑 肩くらいまでの長さ

瞳 オレンジ

一人称は‘オレ’、態度が体の大きさは真逆、植物を操れる

こんなもんですかね。

では、お待ちしておりますーす ノシ

34 話目 てかさ。人の事考えてくれない？（前書き）

ちよつと、今回短い気がしなくもないです。

34話目 てかさ。人の事考えてくれない？

迷いの樹海を抜けてはや二日、現在サンゴールド国内なのだが……

「あづい……てか、ここどこ!？」

「だから、サンゴールドの北部だって言ってるじゃない」

「話聞いてたの？恭介」

「聞いてたけれど聞いてなかった。暑さで頭がやられそうだ……」

【はなからやられてるだろ?】

「死んじまえ……」

「おおう、本当にダメそうだな」

うづう暑い……頭がめちやくちやクラクラするんだがなあ

誰か日陰をください！木陰を！日除けをください！！

もう……無理

ぺたん

「水うゝ……喉渴いたあゝ」

【ねえ……メグ一ついいかしら?】

「何?レイ」

【何あの愛らしい生き物】

「ああ……今は女の子だもんねゝ萌えるねゝ」

「水………ちょっと行ってくる」

「あっ、ゴメンね。恭介、この前のエデンの事があってからゼウスに力のセーブかけられち

やって向こうの世界に繋がれなくなっちゃった」

「なっ………そ、そんなあ」

「はあ……ほら、私の水あげるから」

「ミーナ……お前ってヤツは……」

「恭介？いないの？」

「……ありがとう！」

「きゃっ、ちよつと！恭介！？暑いんだから抱きつかないでよ！」

あゝもう可愛いな、優しいなミーナ

もうあれだ。ミーナは俺の嫁！って感じだな。言い過ぎか？いやいや

「ング……ング……ふつかあああつー！」

「早いな……」

「うるせえやい。魔物と人間じゃ身体の作りが違っただよ」

「あ、あの……恭介？」

「ん？どうかしたか？」

「そ、そろそろ離して？……恥ずかしい」

「へ？ああ、うん……やだ」

「えー？でも……」

「でも、ミーナがいやならやめる。その代わり、都市に着いたら俺に付き合ってくれよ？」

「う、うん」

殺気が気になるけれど、まあしゃあない。こっちを立てれば向こうが立たず、向こうを立て

ればこっちが立たずって感じだしさ

「あれがサンゴールの首都か？」

「そう。あれが首都リーシャント、で、あそこにあるのがお城の…

「…」

「ミナー！！」

「きゃっ！」

なんかよく分からんがショートヘアの元氣娘が登場。
もしかと思うが……

「シンシア！？なんでこんな所に！？」

「え、あたしの国だよ？」

「そういう意味じゃなくて！なんでお城に居ないの！？」

「ゼトが居るから大丈夫！」

「俺が居るからと言って毎回毎回、シアいい加減にしてくれ……」

後ろから高身長イケメンが現れた。

もしかして、この人がゼト？腰に下げた剣が印象的だ。あ、イケメンうざいな

とにかく何かうざいなあ

「ミアー、そこに居る少女達は誰だ？」

「こつちから恭介、この子がメグでレイとナハトに白玉天」

「ちょ、ちょっと待ってくれ……その黒髪の少女が恭介？」

「かぁいい！！」

「ふぎゃ！？」

何故、俺に抱きつく！？って

「ど、どこ触ってるんだ！？ひゃっ！？」

「ん、胸ないわね」

「や、やめっ！……ふひゃあ！？」

「ここか？ここがいいんか？」

「やめ……ろ！」

「うわっ!？」

こ、こいつ、結構油断ならないヤツだな……

「おい！シア。お前は何をやっている。客人だぞ？」

「えゝでもゝ」

「えゝも何もない。今日のティータイムをなしにするぞ」

「それだけはゝそれだけはご勘弁をゝ！」

なんつーか威厳がないな……

まあ、今日はベットで寝れそうだからいいんだけどな。

さて、外での出来事をゼトに謝罪された後、部屋を宛がってもらったんだが、目の前で修羅

場が繰り広げられている。もちろん、ミーナとメグで

内容は簡単

ベットが二つしかない。だから誰が俺と一緒に寝るかだそうだ。俺はソファーでもいいんだ

がな。

そして時間は現在22時

眠たいんだがそろそろ寝させてくれないか？それか毛布を寄こせ。

「だから！私が一緒に寝るの！」

「私！」

「私！」

そろそろ五月蠅いから寝ていただきましようかね。

「スリープ」

「「え？」」

さて、二人が仲良く同じベットで寝てくれたし俺はこっちのベットで優雅に寝させて貰おう。

この考えが甘かった。

34話目 てかさ。人の事考えてくれない？（後書き）

あと3、4話以内には第1章を終わらせる予定です。はい

35 話目 デートを邪魔するヤツには鉄槌を下しましょう（前書き）

遅れました。

35話目 デートを邪魔するヤツには鉄槌を下しましょう

さあ、翌日の話でございますよ。まあ、昨日言った通りミーナとデートですわ。

結構色々な店がやってるんだな。もうちょい少ないと思っていただけが意外にも賑わっていた。

アクセサリー・食べ物・服・旅用品・etc…

「へへ色々あるもんだな」

「サンゴールドは貿易の中継地点だから賑わうのよ。それに他国よりもモンスターとの遭遇する確立が格段に減るし安全なのよ」

「なるほど……だから、ここらへんの価格が安いのか」

ふむ、これくらいなら結構色々な物が買えるな。四次元ポーチの中身も減ってきたしさ。

いい機会だったな。

「んじゃ、食い物の市場に行こう。ポーチの中身が減ってきたし」

「もう?」

「うん、あと3日でなくなる。人数的にさ、消費量が凄い訳なんだよ」

もうさ、どこの大家族だよって話なんだよな。1升4合半とかイジメだよな?結構お金は持ってっけどさ。毎回毎回米(的な物)の値段が他よりも高いわけよ。物価が高騰してきちゃってる訳、世知辛いね

最近、ウッドノースで雨が少なかったらしくてウッドノース農業国じゃん?

「あゝ財布が軽くなっていく……米も減っていく」

「ちなみに何キロ分買ってたの？」

「80キロ」

「今の残りは？」

「……6キロとちよつと」

「ほんと？」

「ちなみに一番食ってるのがナハト続いてメグ」

「あの身体はどこに入ってるの？」

「俺に聞かれても困る。俺はあんま食ってないし」

「うゝん……」

「まっ、さつさと買物を済ませようぜ」

「28ゴールドって結構キツイわよね？」

「まあな。けどしょーがないさ。ここに居る間は食事代浮くけどな」

買物ゝ買物ゝ

（久しぶり……）

機嫌悪そうだな

（寝てたのに騒がれたら怒るに決まってるよ）
なら、すまなかった。

（私また寝るから、よろしく）

ういゝ

「行くべ行くべ」

「はゝい」

カンカンカン！！

「なんだ！？」

「警鐘？」

＊＊時間は１０分程さかのぼる＊＊

サンゴールドユーランド国境付近

ユーランド側から軍隊が近づいてきていた。彼らはほとんどが馬に乗っているユーランドは牧畜が盛んな事から優秀な馬が揃っている。故にユーランドは騎馬隊が他国よりも強力なのである。

「クレイ將軍、そろそろ国境です」

「分かっている。召喚師に伝える。そろそろ召喚の準備をしろとな」
「はっ！」

「さて、スクルドには悪いがサンゴールドを攻め落とさせて貰おう。では、準備はいいですか？カイザー殿」

「無論だ。ヤツには借りを返さなければならぬからな。周りへの対処は伝えた通りだ。だが、ウッドノースの姫君は出てくるかは今の所五分五分だな」

カイザーと呼ばれたヴェオウルフは右前足にソードブレイカーを持ち悠々と歩き始めた。

「くそっ、なぜ我々がヴェオウルフなどの配下にならねばならんだ！どれもこれもあの宰相のせいだ！」

クレイ將軍は怒鳴り散らすと地面に向けて魔法を放った。周りへ砕けた地面が飛ぶ。

その欠片を兵士達は黙って受けていた。

「伝達だ！召喚師に召喚させろ！」

警鐘が鳴っている時、ゼトの元へ伝令が来た。

「どうした!？」

「はい! 国境付近で不穏な魔力上昇を観測しました」

「ユーランドは攻めてこないはずだったんじゃないのか!」

「ど、どうも向こう側の王は把握していないらしく軍部の独断の模様です」

「そうか…シアもそれなら暴れないだろう」

そこへ、ミーナの手を引いた恭介が走ってきた。

「何があつたんだ!？」

「すまない……どうも、ユーランドが協定を破って攻めてきたんだ。今日開く予定だったパーティーは延期だ」

「また戦争か……俺も手伝わせてくれないか? 被害を減らせるはずだ」

「しかし…あんたは国の客人だ」

「黒銀の鬼神だと言つてもか?」

さあ、俺は手札を全て見せた。どう出てくる?

「あんたが? 鬼神だと?」

「ああ、だから参加させていいたたく」

「私も!」ダメだ。ミーナはここで待つてくれ」でも……」

「ゼト、あんたからも頼んでくれ。俺はミーナを巻き込みたくないんだ」

「……はあ、分かった。俺からも頼むシアと城で待つていてくれ。コイツは俺がしっかり連れて帰る」

「けど…」

「なら、これを持っていてくれ」

いつも首からかけていたネックレスを渡す。

「これは？ナハトとレイの片割れみたいなもんだ。いつも俺が首からかけていたヤツ」

「でも…」

「いいから、俺は大丈夫。そうだろ？いつも帰ってきた」

「うん…」

「だから、行かせてくれ」

「わかった。でもちゃんと帰ってきて」

「まかせとけ！」

「話はまとまったか？ならあと10分後に出撃だ。あの砂漠地帯で決戦をかける」

「わかった」

そして、二度目の戦争が始まる。

35 話目 デートを邪魔するヤツには鉄槌を下しましょう（後書き）

また、お待ちさしてしまうかもしれませんが、ご勘弁下さい。

36 話目 ユーランドの勇者のご事情（前書き）

あと1話で第1章が終了です。 いやゝ長かった。

36話目 ユーランドの勇者のご事情

そのころユーランド国内に残っていたアヤはと言つと…

「ナンナまだかな」

（呼んだかえ？）

「本まだ？」

（今部屋の前じゃ。開けて欲しいんじゃないが…）

「ゴメンね」

ドアを開けると背中に分厚い本を背負った黒猫、ナンナお疲れ様
それがすつごい危ない魔導書？

（そうらしいの　しかし力を感じないんだがの）

ナンナだからじゃない？ほら、ナンナって月の神様でしょ？

（そうなの）

神様には反応しないんじゃない？

（ほお、ならばほれ）

「うわっ、とと。本を投げちゃダメだよ」

（力のある魔導書なんじゃろ？なら大丈夫じゃよ）

そういうものかなあ？仮にも本なんだけど……まあ、いいか
さっそく本を開こ

よし、接続完了

「さして鬼が出るかな？何が出るかな？」

（貴女が今回の主ですの？）

「そーだよアやって言うんだ。よろしく」

（わたくしはウルメリア、この魔導書の霊と言っべき存在と言っておきますわ）

「ウルメリア…さん？」

（ウルメリアでいいですわ。ご主人様）

ご、ご主人様！うつわ！何これむちゃくちゃ照れくさい！

やばいよ！やばいよ！ご主人様だよ！？

（どうかなさいました？）

「な、なんでもないよ？」

（そうですか？ではそろそろ、あちらへお連れしますわ。わたくしもその際実体化するのでお待ちになって）

何かに押されるように光の方へ向かう。あたしの背中を押してるのがウルメリアかなあ？

まあ、それ以外ありえないか？

（起きたかえ？）

「うん。ウルメリアは？」

（そこに居るえ）

「こちらですわ。ご主人様」

「……………」

（む？どうかしたかえ？主）

「な、なんでもねえでございます」

あうあう…何この愛らしい生き物！メイド服を着たロリっ子って反則だと思っんですが！うゝ、そっちの趣味じゃないけどこれは抱きしめたい！

（なあ、ウルメリアとやら）

「なんですの？」

（主が何やらお前を見て悶えておる。なにかしてやらんのか？）

「なんとなく近づいたら危険な気がするのでやめておきますわ」

「うおとつと、いけないいけない。これからよろしくね。ウルメリア」

「こちらこそ、よろしく願いしますわご主人様」

かわええのお…

さてと、それじゃあ今後の予定を立てますかゝ

「それでなんでけどさー、これからの予定を立てようと思うんだけど」

（予定？ここを離れるのかえ？）

「うん、噂によるとここがお隣さんを攻めに行くらしいから避難ついでに、と思ってねゝ」

（過ごしやすかったんじゃがの）

「あたし、戦争に巻き込まれたくないからねゝ。だからの避難」

いつその事、この大陸から離れようかと思ってるくらいだし、話によるとアカーシャって言う大陸がこの大陸の北東、気候は日本に近いらしく四季が存在するとの事、お花見だー、お月見だー、お節だー、素麺だー

（食い物ばかりじゃな。他に思い浮かぶ事はないのかえ？）

「花火と、お団子？」

「結局、食べ物になるのですのね……」

「えゝいいじゃんかゝ。決定！アカーシャに行こう！」

（主が良いのなら従うだけじゃ）

「ナンナ様と同じく従うだけですわ」

えゝと、転送魔法わつと、そうそうこれこれ。解凍、実行！

「我、ここに契約の印を捧げる。黄昏の御使い我が行き先を示せ」

あたしの足元に魔方阵が出てきて輝く。そして、光があたし達を包んで消えた。

俺は走っていた。何のために？そりゃ、マルを逃がすため。戦争が始まるらしいし

それで城内を銀のピカピカ甲冑を着て全力疾走、体力には自信があるしね！

「マル！……あれ？いない」

俺が部屋に入ったとき、上からはらりと紙が落ちてきた。

達也へ

坊主勇者（笑）を元気に営んでね。あたしは別の大陸へバカンスを過ごしに行くからねゝ

異世界歴三年の亜矢より

なにこれ、異様に短いんだけど……しかも（笑）って……俺を心配してるのかどうなのか全くわからない内容じゃなかー！

「メ、メ、メイドさん！」

「どうなさりましたか？達也様」

「マルがいなくなっただけ！」

「マル？ああ、アヤ様ですね。お逃げになられたようですが？『あたし、戦争なんかしたくないから、あと頼みますね』と言っていましたよ」

「そのまま、ほったらかしたんですか！？」

「はい。それが何か？」

「え！？何その態度、亜矢が居なくなっただけですよ！？」

「は、これだから話を聞かない殿方の対応は嫌気がさしますね」

「いきなり毒吐いた！？」

「失礼ですね。松ぼっくり」

「もういいです！俺がさっさと戦争を終わらせますから！」

「出来るといいですね。ド素人に」

最期の最後まで、毒を吐かれた達也だった。

36話目 ユーランドの勇者のご事情（後書き）

感想等々お待ちしております。

37話目 失う事

魔法が爆ぜる音、金属同士がぶつかり合い放たれる不快な音、剣に切り裂かれた兵士の断末魔、戦場を覆っていた。恭介達はすでに激化している戦場に着いた瞬間、その光景を見た。

「ナハト・レイ、俺達は今回、バラバラに突撃して敵の勢いを崩す。そうすれば、こっちは態勢を立て直せるだろうからな。メグ」

「なに？」

「メグは後方から殲滅魔法じゃなくて単発式ので援護射撃をしてくれ」

「うん」

「よし、各自突撃だ！」

ナハトは左へ、恭介は中央、レイは右に突入する。すぐに三人の姿に気付いた。敵兵が攻撃をしかけてくる。

敵の後方では漆黒の禍々しい鎧を着たヴェオウルフが大剣を振っていた。その横で指揮官のクレイ将軍が伝達兵に乱入した三人の対応策を部隊長に伝えるために奮闘していた。

「落ち着け…出来るさ」

「坊主」

「カイザーさん…」

達也は緊張していた顔を若干緩めるとカイザーの方を見た。達也はカイザーの素顔を知らないためヴェオウルフと言う事は知らない。右手に握る得物を握りしめて前に向かって構える。

「その、剣は飾りか？」
バット

「いえ：すいません。俺は大丈夫です」

達也の持つバットは鈍器ではない。見た目はバットだが、斬る事が出来る。そして、普通のバットのように中は空洞ではなく金属の塊だ。

「自信を持って、気合をいれろ。いいな？」

「はい。行きます！」

眼前の光景を睨みつけ駆け出す。右では仲間の兵士が敵兵を切り裂き悲鳴があがる。左では仲間がランスで貫かれ断末魔をあげる。次第に心を恐怖が支配し始める。バットを握りしめ自らを奮い立たせた。その時、目の前の味方が真つ二つにされた。その陰から出てきたのは鴉羽のような髪の紅眼の少女だった。手には血の滴る刀、見た瞬間、本能的に危険を悟った。

達也の姿を見た少女は驚いた顔をした。その隙を逃すものかとバットを頭上へ振り上げる。瞬間、一閃。袈裟掛けに少女を切り裂いた。否、少女の居た場所を切り裂いた。気配を感じ下を見る。そこには少女が小馬鹿にしたような笑みを浮かべていた。怒りを覚えたが、何も出来ない。次に起こった事は達也が予想だにしていなかった事だ。刀を支えにして少女が蹴りを放った。ただの蹴りではない。脹脛から魔力を放出し威力を増した一撃である。達也の鎧を凹ませ遙か遠くへと吹き飛ばす。後方に在った木をへし折り、もう一つの木を傾けてやつとの事で止まった。

恭介は驚いていた。何せ、向こうの世界の友人と再会したのだ。驚くのは当然だろう。友人を殺さぬように蹴りで戦場の外へ吹き飛ばし、周りの敵兵を切り裂く。右から斬撃が来る。体を右へ捌き、その遠心力を活かしたまま首を飛ばす。真横に振るわれた剣をしゃがんで避け立ち上がると同時に切り上げ、背後へ雷を放つ。

「邪魔だ。ファイアー・レイン」

炎の雨が恭介の周りに降る。一瞬にして、周りを火の海にした時、おかしい事に気づく。ナハトとレイが苦戦しているのだ。

ナハトは周りを囲まれ力をドレインの魔法で吸われていた。ナハトの得意レンジは近距離戦闘の為、つかず離れずの微妙な立ち位置に立たれると、善戦は困難となる。さらに魔力をドレインで吸われている為、魔法の使用も困難であった。かわってレイの得意レンジは中距離からの魔法使用とナイフによるヒット・アンド・アウェイだ。剣士達が来る為、必然と近距離戦闘となる。二人は次第に怪我を増やしていった。二人を助けようと敵を斬って近づこうとするが次々と無尽蔵に敵兵が湧いてくる。

「ナハト！レイ！」

【なんだ！？今は忙しいから後にしてくれ！】

「ああ！クソ！」

湯水の如く現れる敵を恭介の後方でゼトも、苦戦していた。

恭介は前方の剣を振りかぶっている敵兵に向かって腰の剣を外し投擲した。虚を突かれ驚いた瞬間、脇の鎧の隙間へ切っ先を差し込み真下へ切り裂く。飛んできた魔法で切り裂き、振り返りざまに隣の敵を斬る。

「皆！防御魔法を使え！デカイの一発使う！」

「防御態勢！！」

「天の真の神々に願う。我に仇名す者に裁きを」

飛んでくる魔法を全て切り裂き迎撃する。近づく敵兵には凶刃を振るう。

「我求む。味方には祝福を。我求む。敵には破滅を」

次第に、空が陰りだす。流雲が止まったように太陽光を遮る。

「幻想曲第一章 裁きの氷塊」

雲を割り、一山ほどもある氷塊が現れた。中心部には黒い物がある。兵士達は動きを止め大空を見上げていた。落ちてくる氷塊に気がついた味方が一斉に防御魔法を張り始めた。黒い物を見つけメグは焦っていた。

「もしかして、あれは…」

メグの記憶が正しければ、あの程度の防御魔法では下が壊滅する。急いで味方に最上級防御結界を何重にも張る。けれども、冷たい汗が背中を伝うのは止められなかった。

地面に氷塊が衝突した瞬間、周りに爆風が吹き荒れた。ある者は潰され、ある者は風で吹き飛ばされ地面と衝突して絶命した。

”真の神々”それはこの世界を捨てた神々、メグ達、偽りの神々の創造主、彼らが作ったこの魔法はこの世界では言い伝えられていない。神々が存在を知る程度の物だからだ。その魔法が今発動している。

「第二章 咎の巨神」

地面に接触した黒い物から腕が伸びた。その先に居た兵士を握り黒の中へと飲み込んだ。右から紅い手甲の腕が出てくる。左から蒼い手甲の腕が出てくる。黒が消えた場所に漆黒の龍神が居た。

おもむろに手を伸ばし兵士を掴んでは吸収し始める。そこへ無表情の人形のようになった敵兵が突撃する。

「ゼト！兵をさげろ！」

「なに？逃げると言うのか？」

「見ての通り、あいつは敵味方関係なく襲う。だから第四章まではメグの元に引いてくれ」

「全軍！さがれ！メグ殿の元までだ！さがれ！」

撤退させている間も、神は人を食べ続ける。食べるたびに姿は禍々しくなっていく。

「第三章 浮獄^{ふじく}」

金の瞳を爛々と輝かせ神は敵兵へ歩み始める。右には紅蓮を携え、左には蒼蓮を携える。当然の事のように腕を振り上げ殴りつける。握りつぶす。踏みつける。

腕を交差させ、蒼と紅の光が混ざる。そして投擲。空中でばらけ無数の針になったかと思うとクラスター爆弾のように地面に降り注いだ。

針に体を削られ、碎かれ、貫かれ、絶命する。一人、また一人と神の糧となっていく。

「第四章 祝福の雨」

瞬間、神が碎けメグの元に居る兵士達に虹の雨が降り注いだ。

雨にあたるたびに兵士達の顔から疲れが消えていく。なかには勝つぞ！俺達は勝てる！と言い出す者が現れ始めていた。が、ゼトは崩れさる神をじっと見つめていた。

「第五章 天女の戯れ」

神が崩れ去った場所に女が浮いていた。微笑みをうかべ、七色に輝く髪、純白の衣。その姿がかき消え、敵兵の目の前に現れる。自然に相手の胸部へと手を伸ばし、心の臓を引きずり出した。それを吸収するための行為をした。すなわち、口へ運んだのだ。死体からの返り血を浴び衣が赤く染まる。口元には血が一筋垂れていた。が、微笑みを浮かべたまま抉り出しては喰らう。

喰らう。

喰らう。

喰らう。

次第に白く綺麗だった衣は血で染まり黒く変色していた。

天女を避けながら戦うナハトの元へ風の如く向かう存在があった。カイザーである。大剣を上段より一閃

【貴様！？】

「死にぞこないが、大人しく我が糧となれ」

【お断りだぜ！】

「ならば、これでどうだ？」

片手で容易く大剣を操り、ナハトのガードを崩す。そして、腰からナイフを取り出し一刺し

「一つ目だ」

「ナハト！？」

【大丈夫だ。お前の手伝いくらい果たす】

拳を振り上げる。最後の力を振り絞りフルフェイスの兜を叩き割った。

【楽しかったぜ。あばよ】

「次はあの女か」

「お前ええええ!!」

恭介はカイザーの元へ駆けだす。下段からフェイントを放ち、唐竹割りの要領で斬り下ろす。その太刀筋を簡単にいなされ、腹に蹴りを食らい吹っ飛ぶ。

「お前は後だ。そこで無様に待っている」

「ま…待て…」

レイにターゲットをつけたカイザーは恭介の言葉に耳を傾けず残像が出来るほどの速さでレイに肉薄する。

【なっ!!? 結界!】

「無駄だ」

レイの張った結界をバターの様に切り裂き、大剣を突き刺す。

「二つ目…弱い…弱すぎる…貴様らは個々ではこの程度か! 恭介!」
「てめえ…」

「恭介!?!」

「メグ!?! 来るな!」

「そうか。お前がまだ残っていたな」

「最終幕 神器!」

先ほどまで兵士の心臓を喰らっていた天女が恭介の目の前に現れる。恭介はおもむろに天女の胸元を掴んだ。すると、天女が白と黒の大剣に変わった。刃の根元には金色に輝く宝珠がはめ込まれている。

「神殺し レジュグリアス」

肩に担いで構える。恭介の姿がぶれたかと思うと次の瞬間にはカイザーの頭上に姿を現しレジュグリアスを振り下ろす。寸での所で自らの大剣を間に割り込ませ防ぐ。

「ぐおっ!？」

「まだだ!」

くるりと回転し着地し、肉薄、真横へ一閃、弾かれる。
袈裟掛け、弾かれる。
切り上げ、弾かれる。

「剣に振られているぞ？」

「ぬあ!？」

足を滑らせた。見上げると大剣を振り上げたカイザーの姿、死を感じて防御態勢に入ろうとするが、メグに突き飛ばされる。袈裟掛けに振り下ろされた凶刃はメグをあっさり切り裂いた。

「メグ？」

「ごめんね。恭介、でも、私には”死”と言う物がないから、記憶はリセットだけだね。さよなら」

「そんな…」

「好きだったよ」

「やめろよ…おい…」

パリン

ミーナが恭介から預かったネックレスが音を立てて砕けた。

「え？……まさか……」

茫然と砕けたネックレスを見つめる。そして、ある結果に繋がった。

「シンシア！急ぐわよ！」

「ちよっ、どうしたの？」

「いいから！テレポート！」

城の中から二人の姿が消えた。

二人はボロボロに傷ついていた。腕から血を流し、頬も切れ全身の至る所に打撲

「さつさと……やられたら……どうだ？」

「余裕がないようだな？」

「お前こそ……」

恭介は考えていた。一撃でカイザーを倒す技は存在するには存在している。が、しかし、強力故に代償がある。その代償が大きすぎるのだ。即ち、使用者の命

放てば死あるのみ、当てれば勝ち、外せば負け。簡単な事だ。カイザーにも手段があるらしく上段に構えたまま微動だとしない。

「次で決めてやろう」

「俺のセリフだ」

レジュグリアスを脇に携えるように構える。脇構えの体勢、息を整える。

「我差し出すはこの血潮、この骨肉。主が差し出すは眼前の敵を打倒する力なり」

金色の宝珠に輝きが燈る。次第にレジュグリアスが発光し始めた。

「おおおおおおお！！！！」

「はあああああああ！！！！」

漆黒の大剣と白く輝く大剣が衝突する。放たれる光が恭介の視界を埋め尽くす。最後に見たのはミーナの笑顔だった。

ミーナは丘より広がる光を見ていた。恐らく、あれがこの戦闘で最後の光だろう。光が収まるのを待ち。収まった瞬間、光源の元へ走りだした。

「なにこれ……」

地面に突き刺さっていたのはミーナの父が恭介に渡した。宝剣の赤い剣だった。どこにも恭介の姿は見えない。どこにも、それにレイモナハトも、更にはメグの姿すら見当たらなかった。突然、ミーナの肩に手が置かれた。ゼトの手である。

「ねえ、恭介は？」

今にも泣きそうな顔で、声でゼトに問いかける。

「ねえ、恭介達は？」

ゼトはなににも答えない。いや、答えられない。

「ねえ！教えてよ！恭介達はどこ！？」

「……死んだ」

「え？」

「彼らは俺達の国を守って死んだんだ！もういない！」

「そんな……」

「ミーナ……」

ミーナの叫びが空に響いた。

37 話目 失う事（後書き）

これで、第一章はとりあえず終了です。まだ、キャラ紹介みたいなのを最後に入れると思いますけれども

それと、まだ『世の中和なのが一番いいと、今更思っ』、略して『世の平』は終わりませんよ！

第二章が今か今かと準備しております。ちなみに、第一章までの一人称に変わり三人称が中心です。

第二章での主人公はどうなってしまうのか！？亜矢がメイン主人公へ格上げか！？

とまあ、気になるところですが

それでは

報告書1（前書き）

要するに一部キャラの設定さらしです。

報告書 1

前略　くそつたれの上司殿、今回の出来事は貴方様の仕業であると私は考えているので覚悟していやがつて下さい。さて、もつと罵つてやりたいのは山々なのですがそろそろ仕事の内容に移らせてもらいます。今回の件でメイン目標が行方不明、他二名、ミッシヨンコードペルセフォネが機能停止、その他観測対象、丸山亜矢ならび滝本和馬は丸山、アカーシャ・滝本、魔王城にて確認、両名変わりなし

現在、状況が状況な為、確認のためこの書類を製作した所存です。ゆえに、自らの状況整理が主の為放置する可能性があります。なので、見つけたら確認を頼みます。

・峰治秋（峰治恭介）

身長：151（176）

体重：血痕でよく見えない（67）

備考：元男現女の鈍感くん、頭に血が上ると後先を考えなくなる為、要注意

*行方不明

・ペルセフォネ（メグ）

身長：147

重量：32

備考：我々の創り出した対人間用の神造の神、今回の戦闘で損傷、機能停止

*人間的に言う死亡

・黒龍・白虎<sup>ナハト
レイ</sup>

身長：15m（190）・5m（172）

体重：1,5t(90)・200(48)

備考：実際に希少な種類の魔物、が、人間的感情を持つ為押しが弱い。

*両、死亡

・ミーナ・テス・ウラガーノ

身長：167

体重：読む事が出来ない

備考：金髪ツインテール、微ツンデレ。個人的にいいと思います。
峰治にゾッコン

*現在魔王城へ移動中

・滝本和馬

身長：170

体重：54

備考：現魔王、これまでの魔王と違い超友好主義。婚約者有り
*執務中

・雪華

身長：149

体重：33

備考：部屋が散らかっていないと落ち着かない。滝本の婚約者
*昼寝中

・クレア・ディステイ

身長：163

体重：破けている

備考：魔王の秘書兼ボディガード、城のサイフを握る。
*教鞭を振るい中

・丸山亜矢

身長：月の神の邪魔により不明

体重：上記と同じく

備考：月の神と禁書の精霊の所有者、戦闘をしていない為、情報なし。現在二番目に不確定な存在

*バカンス中

・シンシア

身長：164

体重：ただ不明

備考：サンゴールドの女王、サンゴールドでは王族は苗字持たない為名のみ、実力未知数

*ミーナに同行中

・ゼト・クロイツ

身長：185

体重：94

備考：サンゴールドの將軍、成り上がりの為実力はある。が、シンシアには甘い。

*シンシアに同じく

等々、まだ居ますが今回の件については関係なく割愛させてもらいます。

が、今後、私への連絡なしに変な事をされては困るのでこれからそちらへ向かいます。恐らく、この報告書を読み終わった頃に後ろに立っているでしょう。お仕置きの内容はその時に…

プロローグ2 血濡れの乱舞

そこは戦場だった。矢が飛び交い魔法が飛ぶ、悲鳴と気合の声、様々な物が入り乱れる戦場

その一角で建物に向かって走る姿があった。後方からは火の魔法が迫っている。

「跳ぶよ！」

「キャッ」

爆発を避ける為に前方の扉に飛び込む。二人が入った瞬間、扉が閉まった。爆発を避ける事が出来、安心したのか薄い水色の髪青い瞳の少女はその場にへたり込んでしまった。腰が抜けたのだろう。

「大丈夫……？」

「う、うるさい！腰が抜けただけよ！」

「うん、手を貸すよ？」

「……」

白髪紅眼の女が手を出すと青い瞳の少女は無言で恥ずかしそうに手を掴む。それに白髪の女は微笑んで引っ張り起こした。

その笑顔をみた少女はムツとして

「なに笑ってるの？」

「ふふっ……何でもないから気にしないで」

「気になるわよ！アタシを笑ってるんでしょ！？腰を抜かしたアタシを！」

「貴女の事を笑ってたのは合ってるけど、ただ私の手を握る時の真っ赤な顔が可愛かったなあって思って」

「なっ、ななな、何を言ってるの！？か、かかか、可愛いだなんて！？」

「あゝ可愛いなあ」

ここまでで分かる通り外見上は女である。が中身は男なのだ。彼が女にされた経緯はまた別の話である。

「さてと、しんがりは任せて。ここは私が抑えるから。全力で」

「待ちなさいよ。あんた自分の今の立場わかってる？」

「そんなのどうでもいいよ。今こっちの兵が退却中、あの軍勢を抑えられるのは私だけ。クラウドもヴォルフもアリーも撤退中の兵を護衛中だしね。クウは4人を追って？いいね？」

「でもっ……」

「あと巻き込みたくないし私の戦闘に」

その言葉にクウは青くなって走って行った。あれで納得されたせいか女は苦笑して見送った。

「それじゃあ……」

女は顔を右手で隠した。そして

「殺し合いの始まりだ」

手を下ろすと唇を吊り上げて、走り出す。

敵の兵士は相手が一人という理由で女を甘く見ていた。

「砕ける」

女がそう言った途端、側にいた兵士が砕け散った。女の戦い方は

まるで秩序がなく、蹴り飛ばしたり、もぎ取ったりと、まるで喧嘩の延長線上の様な感じだった。

「怯むな！敵は一人だ。囲んで槍で突け！」

「はははっ！溶ける」

「ぎゃああ！腕が！腕がああ！」

最前列の兵士達から激痛による悲鳴が上がる。

その中心に居る女は悲鳴が上がるたびに無表情に変わってゆく。だが、殺戮は逆に激しくなる。

腕をへし折り、頭を踏み潰し、胸を貫いていく。

「ははっ、どうした？そんなもんか？」

「ひっ……全軍に通達、一斉にヤツへ魔法を放て！」

「魔法か……懐かしいな。そんなものなんかで私をどうするつもり？」

「うっ、撃て！撃てえー！！」

女に向かって魔法を放った瞬間、女は笑った。

「貫け、穿て」

地面から魔法の火や冷氣に向かって何かが飛ぶ。

次の瞬間、兵士達に雨が降ってきた。赤い雨

その雨は兵士達を貫き始めた。先ほどまでの接近戦で既に返り血によって赤黒く染まっていた女の服を更に濃く染め上げていく。

女が周りを見渡し、誰も立って居ないのを確認すると、また顔を手で覆い手を下ろすと戦闘が始まる前の表情に戻っていた。

「さて、みんなを追わなきゃ」

全身を敵の返り血で染めた女は一瞬で消えた。

その頃、撤退を完了させた。クウ、クラウド達は根城で怪我人の処置に追われていた。

「アリー！そいつを頼む！手が足りねえんだ」

「わ、わかった」

「ヴォルフ！」

「頑張つて、る」

「あんたは何もしないで隅っこで待ってなさい！」

「わかった。端に、居る」

クウに戦力外通達を受けたヴォルフはしょんぼりした雰囲気で端に居たが少し経つと外へ向かった。

「…おかえり」

「うん、ただいま。ヴォルフ」

全身を血で染め上げた女は、向かえてくれたヴォルフに微笑むと中へ入って行った。

「おまつ、せっかく俺が買ってやったのになんでそうなるんだよ！？」

「ははは、大丈夫。ちゃんと表面加工してあるからね。私なんかよリクラウドはアリーを何とかした方がいいと思うよ？」

「げっ、そ、それがなアリー、こいつに会ったというか見つけた時にこいつ服を着てなかったんだよ」

「うん、まあ、魔物に破かれてたからね」

「んで、何にも着ないのはヤバいな」と思って買ってやっただけだ」
「でも、僕には買ってくれないじゃないか。僕よりそんな女がいいの？僕が居るのに！？」

「うゝん……まあ、向こうでイチャついてね？アリー、熱愛なのはわかったし、お似合いだよ」

「お似合い……ふふふ、行こうクラウド」

「あつ、おい！クソツ、名無し！覚えてろよ？！」

と、熱愛のカップルがどこかへ消えると止まっていた応急処置の作業のペースが上がった。それを見た女は少し笑うと奥へ向かった。勿論、血を洗い流す為だ、女に無事な男数人が付いていくのはお約束だろう。

補足ではあるがこの根城は元々あつた洞窟を村にあつた物で増築改造、強度補強を施した上で女、子供、老人などもここに暮らしている。そして入浴と言うか、湯浴びの場合は、地下水が溜まった場所である。

まあ、基本構造は温泉と同じ、温度が低い以外全く同じで男女で板により別けられている。

「さてさて、くつついて来てる男諸君。私に何ようかな？」

「い、いや、ただ俺達も体を洗いにきただけだ」

「そう？目泳いでるけどなら問題ないね。じゃ」

女は男から視線を外し女用の方へ歩き出すが、少しして止まる。

「そうそう、最後に」

「な、なんだ？」

「覗いたり何かしたら……痛い目みるからね？」

目の笑っていない笑顔で言われ男達は冷や汗をダラダラ流していた。

「うーん、やっぱり髪が血でバリバリになってるなあ。早く流そ」

服を脱いで布を体に巻いてから服をじゃぶじゃぶと洗う。湯浴び場と洗濯場所は同じ所にあるため、体と服と一緒に洗う事が出来るのだ。

体が洗い終わった女は湯に浸かりほっと一息つくとグツと背伸びをした。

「まったく、あんな風にしないと戦えない自分に呆れるよ。しかも名前も言えない始末、やってらんねえな……ふう」

つい元の口調に戻ってしまったが気にしていないようだ。と、脱衣所から物音が聞こえた。

（あの男達か？）

「あっ！ななさん」

「ななさん？」

「そうです。名無しさんだから、ななさんです」

「そういう事ね。テイトちゃんはどうかしたの？」

「あれ？忘れたんですかあ？今はもうお風呂に入らなきゃいけない時間なんですよー」

ふと思い出すと撤退戦は夕方あたりにあったのだから当たり前だ。そこまで考えたあたりで女は考えるのをやめ顔にお湯をかけた。

「それにしてもですね」

「なに？」

「ななさんには色気と言うものがありますね。テイトにはないので残念です」

「色気！？テイトちゃん、その言葉誰から聞いたの？」

「誰から、ですか？えくと、えくと、ガンテさんです」

「そう、情報ありがとう。じゃあ、私は先に上がるね」

「はいです」

湯舟から上がった女は水分を拭き取っている時に気が付いた。

「着替え持つて来るの忘れた……しょうがない……」

クウが応急処置をしていると奥の方からざわめきが聞こえてきた。ここでざわめきが起こるのは大体喧嘩が起きた時なのだが、今回は何も怒声などは聞こえてこない。唯一聞こえて来るのは悲鳴に近い物だ。

「ちよつと今度は何があつた……なっ！？」

そこにはバスタオルのみを巻き付けてうろうろしている女が居た。しかも平気な顔をしてキョロキョロと周りを見ながら

「ちよつと名無しさん。服着てください」

「私、今干してるのしか持ってないんですよ。だからクウに借りようと思ひまして……」

「ちよつとあんた！」

「あぁっ、クウ。ちよつと良いところにちよつと服貸してえ？」

「早く来なさい！服なら貸してあげるから」

と、いきなり引つ張られたので言葉が尻上がりになるが、クウは気にせずズンズン進んでいく。

「やった！ありがとクウ」

「べ、別にあんたの為なんじゃないから！あれよ。あれ、周りに迷惑がかかるからよ」

「分かってるよ」

「ぐう… ホントあんたには口では勝てないわ……」

「そう？とりあえず服貸して」

クウはムスツとしたまま女を自分の部屋へ連れていった。

根城は意外と簡単に作られており、道さえ覚えていればなんとかなる構造になっている。

部屋へ着くとクウは棚から適当に服を引つ張り出し女に放り投げた

「それで我慢して」

「……なんでスカート」

「ワンピースだからベルトいる？」

「いや、だからなんでスカート？」

「シヨートパンツなんか持ってないわよ？」

その言葉を受けて女はどんどんズンとなつていった。実は彼はまだスカートに慣れていない。何せ元男なのだ。慣れていないくて当然である。

女は渋々ながらもそもそ着装替え始めた。

（あゝ、クソッ、こいつとは縁無しでいけるはずだったんだがなあ）

「結構似合うじゃない」

「出来れば似合いたくなかったよ……スカートだよ？私履いた事な

いのに」

「そう？まあ、寝ましよ？今日も大変だったんだしね」

「まあ、一理あるけど」

まだ女はあとを引きずってはいるものの、自分の部屋に戻っていた。

「また、ここか……」

『ああ、そうだとも。なぜここに来たか理由は分かっているな？』

「まあ……な。あんたの問いの答えを直々に聞きに来てくれたんだろ？」

『クククッ……分かってるならさっさとええよ。こっちは時間のないうつてのに聞きに来てやっている

んだ』

「で？聞きに來たんだろ？なら、少々不本意だが言おうかね」

『前置きはいいい。本題をええ』

「NOだ。そんな事知ったらつまらんだけだからな。それに男の方がいい」

『この先、苦しむぞ？』

「ならそれを越えるまでだ。俺は答えた。約束は守れよ？」

『はははっ、生意氣を言う。だが男に帰れるようにはしておこう。条件を満たせば……な』

「あつ、おい！」

彼が止める前に世界が掻き消えた。

「くそつたれ！逃げやがった」

条件とはなんだろうか？そんな事を考えている間に夜は明けた。けれど、答えは出ないままだった。今日も戦いの日々が続く。

プロローグ2 血濡れの乱舞（後書き）

第二章の始まりです！第二章から三人称の話と一人称の話がグチャグチャに出てくるのでお気を付けください！

1 名無し 護る意味（前書き）

10万PVです！

皆さん、このような駄作をここまで読んで頂き有難うございます！

では、本編です。どうぞ

1 名無し 護る意味

「……気を引き締めよう。このままじゃ、皆の前で地が出ちゃう」

パン！

自分で頬を叩いて女は気を引き締めなおした。

女はそのまま物干し竿の元へ服を回収しに向かった。

「あら、名無しさん。おはよう」

「あつ、ダースさん。おはようございます」

「珍しくスカート着てるなんて」

「……自分のを洗っててクウに借りました」

「そうかい。そうそう、ピーカス婆さんが服乾いたよって言ったよ」

「あ、そうですか。それじゃあ取りに向かうので」

「ほいさ。朝食の時間に遅れないでね」

「はい」

女は会う人と話をしながら目的地へ向かったため、予想よりも時間がかかってしまった。

物干し場は根城のかなり上の方にあるため、眺めがいい。朝の冷たい空気を胸いっぱい吸い、景色を眺める。

敷地内で体操をしているご老人も居れば、朝から剣の練習をする者も見える。

根城の城壁の向こうを見渡せば自然の木々から鳥が飛んでいつている。

ここが本当に昨日の様な激戦があつたような地には見えない。

「…守らないところは。……ミーナは元気かな」

「ななさん！」

「テイトちゃん？」

「はい！ぐんもです！」

「ふふ、おはよ」

「何してたんですか？」

「ん？ここから景色を眺めてただけだよ」

「そうですか」

「うん」

テイトが女の側へちょこちょこと近づいて行き一緒に景色を眺める。

「ななさん」

「ん？どうかした？」

「ヴォルフさんとクラウドさんが何かやってます」

「ああ、2人とも朝から元気だなあ」

「ななさんは、元気じゃないんですかあ？」

「ん、そういう意味じゃなくてね。元気が有り余ってるな、って意味」

「そうですね！テイトも元気ですよ！」

「ふふふ、そうみたいだね」

女はにっこり笑いながらテイトの頭を撫でた。それにテイトは目を細めて気持ちよさそう顔をしている。

少しすると、女は自分の服を持って部屋に戻った。テイトが女について行ったのは言わずもがな。

「さてと、そろそろ朝ごはんの時間だから食堂に行こうか」

「はい！」

テイトと手を繋いで食堂へ向かうが途中で女は外に居る男2人の事を思い出した。

「テイトちゃん、一人で食堂行ける？」

「行けますけど、何ですか？」

しょんぼりしながら聞いてくるテイトに困った顔を向けつつ説明

「ヴォルフとクラウドは外に居るから呼んできてあげないとね。二人の事だから朝ごはんの事も忘れてるだろうしね」

「そういう事なら……」

「ゴメンね。テイトちゃん」

「大丈夫です！テイトは強い子なのですから！」

「うん、じゃあ、また食堂でね」

「はい！」

タッタッタと走って行くテイトを見送ってから、女は中庭のよな所へ向かった。

「はっ！」

ガッ！

「ぬん！」

ガリガリガリ！

クラウドの持った木刀をヴォルフの持った大きな木剣が押し返す。だが、クラウドはその力を利用して距離をとる。

「さすがだな。ヴォルフ」

「お前も、な」

2人は必殺の一撃を出すために構える。

ヴォルフは大上段で大木剣を振りかぶり、クラウドは木刀を自分の身体で隠すような脇構え。

一瞬の静寂

2人が一斉に走り出す。そこへ女が風の如き速さで走り寄り、ヴォルフが振り下ろす大木剣を左手で、クラウドが切り上げようとしている木刀を右手で掴み、その勢いのまま2人を投げ飛ばした。

「うを！？」

「ぬっ！？」

2人は投げられて目を白黒させながら女を見上げた。

「2人とも。もう朝ごはんの時間だから、食堂に来てね？暴れたりしないなら、あとで私が相手するから……早く来て」

「行くか、クラウド」

「そうだな。食いに行こう」

「というか、遅れたらごはん抜きってダースさんが言ってたよ？」

「急ぐぞ！」

「ああ」

「てっ、え？私は引つ張られる側なの？」

朝食が終わる頃、問題が起きた。

「敵が来た!!」

「ヴォルフ！クラウド！」

「ああ」

「わかってる！」

「クウは魔法で援護を！アリーは歌で！」

「わかった」

「クラウドの為に！」

「頼むから皆の為にしてくれ！」

「いいから！早く！クウは上からね」

「わかってるから、さっさと行きなさいよ!？」

クウに怒鳴られた女達は外へ向かった。

そこでは、もう他の戦士達が大陸からの兵士達と剣を、ランスをぶつけ合い、相手の身体を鎧ごと切り裂き、突き刺し、激しい戦いが繰り広げられていた。

「まずウチの人達を半数は下げさせて！早く」

「はい！」

「ヴォルフとクラウドは皆が下がる際にしんがりを勤めて！」

2人は頷くと獲物で敵兵を切り伏せながら進んでいく。

その後ろで女は鞘から刃がボロボロな刀を引き抜く。その刀身を見て引き返してきた兵士達がチラチラと見ていく。

彼らの視線に気付いた女は軽く笑い掛け、目を閉じ刀に集中する。すると、扉のイメージが思い浮かんでくる。その扉を開いて、目も開く。

パチン……

納刀

「2人とも！離れて！」

刀を腰溜めに構えて兵士の群れを睨む。そして顔を手で隠し手を下げる。

そこにあつたのは先程まで微笑みを浮かべていたのは嘘かのように醒めた鋭い視線を浮かべている顔だった。

女は2人が離れたのを確認すると、抜刀術の構えのまま走って行った。

兵士達の最前列に到達した瞬間、刀を引き抜く。その刀身は紅色に淡く光っていた。

一人斬る。光る欠片が宙を舞う。

二人斬る。光る欠片が宙を満たす。

振るう度に周りを光の紅葉が舞い散る。その光る紅葉が兵士達に触れた瞬間、触れた部分が斬れた。その返り血ごと敵を切り裂く。

「舞い散れ、四季王　　紅葉^{もみじ}」

その刀の名を呼ぶとそれに応答するかのように紅葉をまき散らす。はらりはらりと風にそよがれて、季節は夏だが戦いの場は秋の森の様に紅く染まった葉が舞踊る。

だが、本物の紅葉の様な柔らかさはなく、その葉はただ鋭利な刃物の様に革鎧を鋼を肌を切り裂いていく。

「退け　！退却！退却ー！」

「ば、化け物だ！」

女一人に殲滅されかけた事で、士気の下がった三カ国軍は足早に撤退をし始める。その後ろ姿が見えなくなる頃に刀をしまい、顔を手で隠し退ける。後ろを振り返り笑顔で戻る。

「終わったよ」

「それにしても、お前本当に何者なんだ？」

「秘密、教えて欲しかったら私に勝ってみなよ」

「あつ！てめ、なんだその笑みは感じ悪いぞ」

「さくてね」

意地悪そうに笑顔をクラウドに向けてから、颯爽と根城の中へと帰って行く女の後ろ姿を見送りながらティトはアリーに話しかけた。

「アリーさん」

「ん？どうかした？」

「ななさん、なんか雰囲気変わりましたね」

「そうだね、吹っ切れたって感じ？」

「そんな感じですね、ティトは何だか嬉しいです！」

「そっかあ、でもね。ティトちゃん」

「ふえ？」

「僕はクラウドが僕以外の女に反応するのが許せないんだよ」

「ふえええ！？な、ななさん！ヘルプです！えまーじえんしーです！！」

暗い笑みを浮かべたアリーの顔を見てティトは慌てて女の後を追う。その日はもう襲撃は来ずゆっくりとした時間が過ぎて行った。

1 名無し 護る意味（後書き）

なれない三人称の為、地の文が少なくなってしまうですが今後ともよろしく願います。

次回より、前書きや後書きの部分で第1章でのあの魔法についてちょいちょい書いていこうと思いますので

では

2 ミーナ 急ぐ意味（前書き）

いやっほー！新キャラだぜえ

すいません。調子に乗りました…

2 ミーナ 急ぐ意味

あれから私は魔王城へとシンシア達と向かっている。なぜ急ぐかと言つと、まず恭介が行方知れずな事。

各国が別大陸へと兵を向けている事。

最後に今回の魔王が凄く友好的であり、恭介の居た世界の人間らしいから

「ミーナ？急ぐんじゃないの？」

「ゴメン。考え事してた。行こ？」

「あ、うん……ならいいけど」

いけないいけない！折角シンシア達と向かつてるのに私が足引つ張つてどうするのよ！

「それにしても……」

「ん？」

「ミーナ変わったね。好きな人が出来たんでしょ？」

「ま、まあね」

「あつはつはつ、照れなさんな照れなさんな！」

「うゝ……べ、別に照れてなんかっ！」

「ちっ！二人共、静かに囲まれている」

「何？？賊？」

「恐らく賊だ。目当ては二人だろう」

少しすると、山賊とおもわしき男が10人くらいで私達を中心に円状になって囲ってきた。シンシアは腰にある青龍刀二振り抜こうとしている。ゼトは背中の魔剣に手をかけていた。

私？私は殲滅魔法の準備をしているわよ？

「へへへ、久しぶりの上玉の女だ」

「二人共、動かないでちょうだい」

「ま、まさか」

「殲滅魔法…か」

「潰れなさい！グラビティ・ヘル！」

急激に周りの重力が跳ね上がり、山賊達は立っていれなくなり、やがて

重力に体が耐えられなくなり、そして

潰れた。

「さっ、行きましょ」

「あ、うん」

「未恐ろしい姫だな……」

ゼトが何かを言ってるようだけど私はそっちよりまだ周りから放たれている殺気の方に集中していた

「ゼト…」

「ああ、わかってる。やり手がまだ残ってるな」

「ふふふつ、貴女がミーナ？」

「だから何？」

目の前には薄紫の髪をツインテールにして橙の瞳の少女が居た、私が見たこともない赤を基調にした服装

表情は依然として人を蔑むような微笑のまま

「あんだ、誰？」

「今から死ぬような人に教える名前は持ち合わせていませんわ」

「そう…力ずくで聞くしかないってわけね」

「そちらの殿方、手を出したら隣の方の綺麗な顔に傷が付きますわよ？」

その言葉にゼトは苦虫を噛み締めたような表情になって剣から手を離れた。私と一対一で勝負する気？

「いいわ。受けて立とうじゃない。ゼト、それ、貸してちょうだい」

「これはしかし…」

「…貸しなさい」

静かに怒気を含めて言う。渋々ながらゼトは渡してくれた。私が触った瞬間、拒否するような気配が魔剣から伝わってくる。それを無理矢理抑えて正面に居る少女を睨みつける。

「おお、怖い怖い、せつかくの顔が台なしですわよ？」

「今はそんなのどうでもいい。さっさと始めるわよ」

言うや否や走って距離を縮める。もちろん身体強化はしてある。

「ッ！早いですわね。けれど！」

少女が刀を鞘走らせながら息を吸う。何をするつもり？

「フレイア！」

「！？」

少女が叫ぶと刀に彫ってあった文字から炎が噴き出した。それを

私は咄嗟に魔剣で防ぐものの服の袖を燃やした。

「ゼト！この剣の能力使っわよ！」

私はゼトの返事を待たず、剣に告げる。

歌うように

詠むように

叫ぶように

「敵に穿つて破壊し、敵を薙ぎて消失さす。目覚めてフロッティ」

そう言つと魔剣の刀身が縦に真ん中から割れて空間が出来た。

「そんな物で私のレヴァーテンわたくしに対抗出来るとでも？」

「思ってるわよ？」

また、一気に接近。少女が放った炎をフロッティで切り裂く

「なっ！？」

「これで終わりよ！」

フロッティを大きく後ろに引き、前へ突き出す。

「くっ……」

少女が魔法壁を作るけれど、無駄

「言わなかった？フロッティは穿つと破壊して、斬ると消し去るっ

て

「！」

少女が反応するけれどもう手遅れ、魔法壁が破壊されてその時の
圧で地面にたたき付けられた。チェックメイト

「それで？名前は？」

「……クルルス」

「用件は？」

「伝言を頼まれたのですわ」

「伝言？誰から？」

「それは依頼者に言われて言えない。内容は、魔王に匿って貰って
静かにしている。」

魔王を知っていて、私の事も知っている。そして、今居ない人物

……

私には一人しか思い付かない

「恭介……」

「恭介？私に頼わたくしんで来たのは女性の方ですわよ」

「ミーナ」

「へ？あつ、ああ、クルルスもう行っていていいわ」

「そう？では失礼させて頂きますわ」

そう言うつとクルルスは森の中に消えて行つた。

これでやっと情報が入った。恭介は今どこかで生きてる！

しかも、魔王は恭介の知り合いっぱいし

「さ！急ぐわよ！」

「ゼト、あの子は呼べないの？」

「少し難しいな……ベルベット！」

ゼトは何を呼んだんだろう？少しすると右側の木々が揺れた。結構大きい？

「紹介しよう。ミーナ、コイツがベルベットだ」

木々の間から出て来たのは魔獣の一種

恭介曰く猫又

要するに二本の尻尾を持った猫。

「猫？」

「まあ、猫型の魔獣だ」

『ニャー！』

体が結構大きいけれど、愛くるしい目でこっちを見ながら首を傾げてくる。可愛い…

……と、いけない、いけない

「この子に乗って行ってくて事ね」

「ああ、乗ったほうが早いだろう？」

「そうね。その子には二人が乗って」

「ミーナ？それおかしいんじゃない？」

「私にはこの子が居るから」

口元に指を当て指笛を吹く。すると、空からバサバサと羽ばたく音が聞こえてそれが地面に降り立つ。青い瞳を爛々と輝かせた赤黒いドラゴン、恭介にも他の誰にも教えていなかった私の旧友

「ありがと。来てくれて」

《なに、寝起きの準備運動じゃよ》

「そう」

「ねえ、ゼト」

「どうした」

「ツインツンデレ」

「なに馬鹿なこと言ってるの？行くわよ。シンシア」

「はい」

カサルシウスに跨るとふわりと舞い上がる。この感じ久し振りね。下を見ると両腕でゼトのベルベットを持ち上げてゆっくりと羽ばたき高度を上げていく。

「あんまり高度は上げないで、息がしずくなるから」

《無茶を言うのぉ、じゃがしょうがない。人間は儂等と違って脆いからのぉ》

「悪かったわね」

《責めてはおらぬよ。ただ難儀だと思っただけじゃ》

「あっそう、2時間ごとに休憩だからよろしくね」

《体温のせいじゃろ？ほとほと、難儀じゃのぉ》

口が減らないお爺さんねえ…お肉減らそうかな…

《すまん。それだけは勘弁してくれんかの？年寄りの楽しみを奪うでない》

「ほんと、口が減らないわね」

《そういう性格ゆえ》

「まあ、いいわ。先を急ぎましょう」

カサルシウスは速度をあげ魔王城へ道を急いだ。

3 和馬・秋 浜辺の少女（前書き）

文自体けっこう前に書いてあったものなのでへボさにはご勘弁を

3 和馬・秋 浜辺の少女

「　」

今、僕は夜の砂浜を散歩しています。理由は簡単、僕がここを好きであり、クレアの魔の手から逃れるため…でも、僕は本当にここが好きだ、磯の香り、波の音、朧げに輝く月、満天の星空、澄んだ空気。

僕の居た街では見ることの出来なかった景色が今は世界が違っても見ることが出来た、それがなんだかとても嬉しい…

「ん、やっぱりここはいいな、誰も居ないし静かだし」

そこで波打際に誰かが居ることに気がついた。漆黒のコートに真っ白な長い髪、陶器の様な白い肌、ほっそりした四肢、そこには少女が倒れていた。

僕は突然のことに呆然とした。なんせ、人型の魔物　魔族はこの城にしか居ないからだ。

「ちよつ、あの、大丈夫？」

反応がない、完全に気を失っているみたいだ

「ねえ、君！大丈夫？」

「うつ……」

やっと気がついたみたいだあと一息…

「君！大丈夫か？」

「うう…ううん……ここ、ここは？」

「えーと、魔王城だよ。僕は和馬、君は？」

「わ、私？え、えーと…」

この人が私を助けてくれたみたい、私の名前を聞いてきたけれど
思い出せない

「あの私は、誰なのでしょう？」

「え？記憶喪失なの？」

「あ…そうばいです」

まさかの展開、新人さんいらっしやうい

「ううんなら、とりあえず城に泊まっていけばいいよ」

「いいんですか？あつ…えつと…その…和馬さんに迷惑をかけるか
もしれませんか…」

「そんなふう心配してるなら大丈夫だよ。無駄に部屋数あるから、
クレアに見つからないだろうし、まあ、雪華は大丈夫だろう」

「くれあ？せつか？」

「ん？ああ、部下みたいな人と婚約者みたいな人」

「へー、若そうなのに上司さんなのですか。すごいですね！」

「いやいや、勝手になっちゃっただけだし…と、立ち話もこれくら
いにして行こうか？」

「そうですね。では、行きましょう」

歩き始めた僕の後ろをテクテクとついて 来てはいなかった。
後ろを見ると、まだ座ったまま

「どうかしたの？」

彼女は、顔を朱に染めて俯き加減に言ってきた

「うう…お恥ずかしいのですが、立てないんです」

「あー、じゃあちよつと待ってて今そつちに行くから」

今まで気付かないふりしてたけど、この子背中に太刀背負ってる…なのに服は、ワンピースにコート…なにこの組み合わせ、奇抜過ぎない？

「よいしょつと、うわ、冷た！本当に大丈夫？」

「今の状況が大丈夫じゃないです。恥ずかし過ぎます」

「わががま言わないでよ…このまま行くからね」

そういつて歩きだす。この砂浜から城までは、距離があるからそれなりに歩かなきゃならないのが改善したい所だ

「ほう、これはこれは魔王殿ではありませんか。背中の子は誰ですか？」

ああ、めんどくさいのに会っちゃったな…しかも怒ってるし

「その海岸を散歩したらこの子が倒れていたんだ。だから、保護しただけだよ、

あつ、この子をお風呂に入れてあげて、かなり体温が下がってるから」

「ふむ、承知した。ならばその子を渡せ」

「え、あ、う、うん」

「ほう、ギルドに所属しているか…ならそのブレスレットに名が載っていないか？」

「ふえ？あ、はい…え」と…あ、ありました。えっと、峰治

秋っております」

「ふむ、よし、風呂に行くぞ。秋」

「あ、はい！」

「死ぬなよ」

峰治…まさかね…

「さて、秋、風呂に入るぞ。さつさと脱げバスタオルは忘れるなよ？」

「わ、わかりました」

「それにしても、なぜこんな辺境の地に来たんのだ？」

「分かりません。気がついたらここに居ましたから……」

うう……この状況で考えるのはおかしいけどクレアさんスタイルが良過ぎですよ……

私なんてこんなんですし…嫉妬してしまいます！

「ふむ、何を落ち込んでいる？ああ、スタイルのことが」

「な、なんでわかるんですか！私はまだ何も…」

「顔にすぐ出るぞ？くくく、分かりやすくてもしろいな秋」

「からかわないでください！もう！クレアさんはちょっといじめっ子すぎます」

「怒るな怒るな、可愛い顔が台無しだぞ？」

頬を膨らませて怒ってはみたのですが、人差し指でつつんつんされて空気が抜けてしまいました。クレアさんは強敵です。色々な意味で

「体を洗ってから湯船に入れよ？」

「それくらい、わかってますよ。そもそも言ったそばからクレアさんが入らないでください！」

「私はいまさつき入ったから問題ない」

「はあー、もういいです……」

なんかこの人の相手は疲れます。手玉に取られていそうで怖いですよ

しかも、女風呂なので和馬さんは助けに来そうにありませんし……
：そうでした、もう一人雪華さんと言う方がいるそうなので助けてくれるかもしれません！来ないと思いますが

「それにしても広いお風呂ですね」

「それが自慢なだけの城だよ。ここは」

「そうですね？砂浜も綺麗ですし、静かで良い所じゃないですか」

「昼間はかなり五月蠅いぞ？朝方はあまりだがな」

「そうですね？でも五月蠅い方が楽しいじゃないですか」

「はっはっはっ、まあ明日実際に見たら意見が変わるさ」

うーん、そんなに凄いですかね、想像出来ませんよこれだけ差があるらしいんですから。

あう！目に泡が入りました。痛いです。うう、石鹼の成分が強すぎるんじゃないですか？

あつ、クレアさんが流してくれました。

「ありがとうございます。クレアさん」

「い、いや、うむ……」

「？」

なんで慌ててるんでしょう？私変な事を言ったのでしょうか？

「秋……お前以外と天然なのだな……」
「？」

ふむ、魔王城は不思議な所ですね。なんで感謝したらああいう反応されるんでしょう？

「ふむ、秋はこれからスタイルが良くなるぞ。私くらいになると触ればわかる」

「貴女は、何者なんですか！？」

「ただの魔王秘書だが？」

「ただのですか？」

「うむ。ただのだ」

「へー、ただのですか。魔王秘書ってじゃあ凄いんですね」

「すまない。そこまで信じ込みやすいとは想定外だ。これは個人的差だよ。もっとも私の場合は経験上だけれどもな」

「へー」

「さてと、そろそろ上がるのぼせてしまう」

「はい！」

これから、どうなるんでしょう？私の生活は……

4 名無し 出来事

女とその仲間がどのように邂逅していったか？ここで語ろうと思う。何故か？それはまだ邂逅の際の事を記していないからだ。

もっとも一番知って頂きたいのは、アカーシャが何故三国から侵略を受けているかの理由である。

8日程遡る。

「ここは？」

少年は何もないただ色々な色がグチャグチャに混ぜ合わせていつているような空間に居た。

「お前に命を与えましょう」

突然声が響く。語るように
詠むように

「その命で絶望し壊れなさい。希望を失い嘆きなさい。大切な物を失い狂いなさい」

少年が耳を塞いでも声は響く。まるで頭に直接入るように

「貴方は罪人、この世界を混沌とした物に変えた張本人。だから、生きて償いなさい。自らの叫びで嘆きで悲しみで」

少年がどれだけ拒もうが声は響く脳に

「これで貴女の償いが始まる」

そう声が締め括った瞬間、世界が変わり、色がついた。
そこは森の中、小鳥が囀り、獣の遠吠えが響く普通の森
唯一違うのは目の前に広がる光景

周りの木よりも数倍太い木の傍にある物体。

異常だった。それは地面から蔓の様なタコの足の様な物を少年

いや、女に向かって伸ばし巻き付けた。

「これが償いか……ゲスが考える様な事だ」

伸ばされた足によって女は容器の様な物に入れられ液体を注がれた。

1日経ったある日、刀を携えた黒い尻尾の男が傍を通りかかった。
男は異様な雰囲気、刀に手を架け周りを見回す。

するとそこには容器の様な物に入れられた女がいた。全身を液体の様な物に浸された。

それを見た後の男の行動は早かった。自らの刀の腹に手を当て何かを呟く。すると刀からバチバチッと何かが爆ぜるような音が響く。
瞬間、男は足を切り裂いて行く。あたりに何かが焦げたような臭いが漂う。

その男を女は少し目を見開き見ていた。

ほんの少しの時間で男は足を全て切り払っていた。
乱れた息を整えると容器を縦に切り裂いた。

液体が流れ出ると同時に女も出て来た。全裸で

「おい！大丈夫か！」

「大丈夫……聞こえてる。何か羽織る物貸してくれる？」

その言葉に男が羽織っていたマントを貸そうと脱ぐが思い止まる。

「？ 早く貸して」

「とりあえず、これに触ってみる」

言われた通り女が布を触ると布が溶けてしまった。

「え？」

「ついて来い。傍に川があるから、そこでそれを流してこい。周り
は俺が見張っておく」

「えっと……名前は？」

「俺はクラウドだ」

「わかった。よろしくねクラウド」

女は微笑むと川へ入っていった。

周りを見回して身体を洗う物がないか探すが見つからなかった。

「……手しかないかあ」

女は落胆の声を上げるといそいそと洗い始めた。

一方クラウドはと言うと

木に頭突きをしまくっていた。

（落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け！人って掌に書いて飲み込んだら、世界はハッピーだ！）

頭突きをやめる。

「よし、クールに！クールにいこう」

数分後

「クラウドー？どこー？」

女は全裸でクラウドを探していた。

「どうし……」

「？　どうかした？マント貸して」

「あ、ああ……」

「本当にどうかした？顔赤いよ」

「いや、大丈夫だ。そうだ、名前は？」

「ない……から、名無しでいいよ」

クラウドの様子に首を傾げながら女は渡してきたマントを羽織り、前を完全に閉じた。

「さてと……名無し、金は持ってるか？」

「持つてると御思いで？この通り、服もないんだよ？」

「そうだったな。……マントだけで変な騒ぎを立てられると困るから、俺の予備の旅装束でも着てくれ」

「うん」

クラウドが荷袋から服を取り出すと女はクラウドの目の前で着替

え始めた。

クラウドの中で女は痴女の烙印が押された。
本人としてはかなり不本意だろう。

まあ、その姿をチラチラ見るクラウドはクラウドである。男の悲しき性だ。

「袖が余った……」

「ほら、行くぞ」

「あつ、ちよつと待ってよ！」

女を置いていくようにクラウドは早歩きで歩き始めた。クラウドに追いつくと女は意地悪そうな顔をしてクラウドに言った。

「さつき、私の着替えずつとチラ見してたでしょ？」

女が言った瞬間黒い尻尾がピンツと伸びる。

「んなつ！？」

「実は試させてもらったんだよ、あの状況をおいしい物と考えて襲ってくるか。そのまま、周りの警戒に当たってたかね」

「ぐう……」

「まっ、チラ見してたようだけど周りに意識してたみたいだし信用するよ」

「……この事はアリーにだけは絶対に言わないでくれ」

「アリー？」

「ああ、知られたら俺が殺される」

「ん？……あゝヤンデレちゃんなんだ」

「ヤン……なんだって？」

「あゝ気にしないでこっちの話」

それから無言で歩みを進める二人。周りに響くのは二人の足音と動物達の鳴き声や水のせせらぎのみだ。

歩く事約十分

街が見えてきた。

「ここで服を見繕うとするか」

「……………あそこがいい」

「あそこ？あゝあ！？」

女が指差したのは結構な値段の店だった。

「おまつ、自分の立場分かってんのか！？」

「じゃあ、アリーって子に教える」

「ぐう……………分かった。ただし一着だけだ」

「何を当たり前の事を」

女はクラウドの一着しか買つなという一言に飽きれ顔で答えた。それにクラウドは更に飽きれ顔になったが女はそれを気にせず店へ入っていった。

「上は……………これとこれ」

「ほう、そこまで高くないな」

「で、下がこれとこれとこれ」

「お客様、お探しの物は見つかったでしょうか？」

「はい。もう少しで選び終わるので大丈夫です」

話し掛けてきた店員に笑顔で返す女、店員の顔が赤いのは気のせいではない。

「んじゃ、あとこれで」

「285ゴールドです」

「んなっ！？………」

また、クラウドの黒い尻尾がピンツと伸びる。

渋々払ったクラウドだったが女に怨みが籠った視線を送っている。

「俺を破産させる気か？」

「甲斐性も男の魅力だよ」

「何を言っている？そんな言葉ないぞ」

「嘘も方便、少しの嘘が人間関係のよき潤滑油になるんですよ」

のらりくらりとクラウドの言及を避ける。

「まあいい。こちら辺でお別れだ。達者でな」

「うん、バイバイ」

これが女とクラウドの邂逅である。アリーはその後4日後に出会っている。

さて、続いてクウとの邂逅だ。

彼女とはクラウドと別れてから結構すぐに出会っている。

女がクラウドと別れて3時間ほど経った。今現在、北へ向かっている。

なぜなら、先ほど居た街は大きいもののこの国の王都ではないからだ。

「ここは森が多いな……………」

こんな事になっているのはあの変な声のせいなのか？と考えながら女が歩いていると、前方に集団が見えた。

何をしているのか気になった女は集団へ近づいた。

「今回も大量ですね。隊長」

「そうだな。アカーシャ大陸の女は上玉が多いから貴族共に高く売れるぞ。それにほかの部隊は掘削作業を行っている。我々は女共を集めるぞ」

「愛玩用ですね？」

兵士の一人が部隊長に分かりきった事を聞く。

女は、またかぁなどと思いながら相手の人数を見る。馬車の前に二人また左右後ろに二人ずつ、8人だ。先程の会話が正しければあの馬車の中に奴隷扱いの人達が居るのだろう。

その人達を性処理の道具に使おうと考えている貴族や兵士を思い浮かべた女は

「やっぱ、腐ってる」

吐き捨てるように呟いた。正直、今あいつらをどうにかする力があるか分からない女は手が震えていた。もしなくて出て行ったら自分自身も奴隷の仲間入りである。

考え込んでいる間に女は小枝を踏み折って音を立ててしまった。

「誰だ!？」

「あゝあ、やっちゃった。もう蹴散らすか奴隷人生しかないじゃん」

観念して茂みから出る。すると兵士達から感嘆の声が上がった。

「隊長。今日一番の女ですよ」

「ああ、こりや高く売れる」

「あゝ……悪いんだけど、その馬車の中の人達を解放してくれない?」

「無理言いなさんな。べっぴんさん、あんたにも来てもらおうか」

部隊長がそう言った瞬間、兵士達が粉末を散布した。

「はあ……どうせ、媚薬が痺れ薬でしょ?」

平然と粉末を吸い込む。

吸った瞬間、状態異常を解く魔法を呟く。

すると簡単に解けてしまう。

けれど、掛かっているフリをする。

すると兵士が近付いて来た。タイミングを計る。早過ぎても遅過ぎても作戦がパーになるだろう。

「ほら立……」

「ふっ!」

立ち上がりざまに鳩尾に一発入れる。

いきなり、仲間の1人潰された事に気が付いた他の兵士が剣を引き抜きながら女に走っていく。

どうするか迷っていると声が響いた。

『ここで死んでもらったら困る。ゆえに武器を与えよう。死ぬなよ？そうそう、失敗作も使えるぞ』

「武器？」

女が呟いた瞬間、手の中にズシリとした感覚

「刀か……」

「死ね！」

兵士が剣を上段から振り抜く。女はそれを手の中に現れた刀を納刀したままで捌く。

「ッ！」

「ガッ！？」

兵士が抜けて行く際に女が捌いた勢いに遠心力を加えて腹部を薙ぐ。

更に一步踏み込み胸部のプレートアーマーごと突く。あと5人

「そろそろ降参してくれませんか？……」

「くっ……全員！槍を構えろ！」

「はっ！」

全員が馬車に吊り下がっていた槍を持ち女に向けて構える。

「何と言つか…卑怯だなあ」

女が鞘から刀を抜く。

ガリガリガリ！

引き抜いた刀の刀身がボロボロだった。

「あら？」

「かかれ！」

「うえ！？ちよっ！？どうしろって言うの！？」

鞘に入れなおし、最低限の動きで槍を避けつつ打ち込んで行く。

「よつと」

上と右斜め下から二振り

「がつ！？」

「ぐう……」

「あと3人！」

溜めを作っていた兵士の顎を力チ上げる。

更に接近、頭を掴みバク宙、勢いで無理矢理投げ飛ばす。投げられた兵士は木にぶつかり白目を剥いて倒れた。

「最後の一人ですけどどうします？」

「くっ……」

部隊長とおぼしき兵士は、苦々しげな顔をして逃げていった。

「忘れ物ありますから取りに来てくださいね」

のびている兵士達を縛り上げ地面に転がす。

「さてと……中に居る人達は無事かな」

馬車の布を開いて中を覗く。

「グスツ…グスツ…」

「手遅れだったか……」

中では髪が山吹色の少女が一人、泣いていた。周りに居る他の女性、少女達はその少女を慰めている。

馬車の中を見回すと一際嚴重に縛られた少女が居た

「ちよつとゴメンね」

周りの人達を掻き分けて少女の元へ行く。

その少女は薄い水色の髪に青い瞳の美しい少女だった。しかし今は酷く汚れていた。女は少女が噛まされていたさるぐつわを外した。

「怪我は？」

「そんな事よりあんたは誰？」

「名もなき善人。怪我はないの？あるの？」

「あの子以外無事よ」

「やつぱり初めて取られちゃった？」

無言で頷く水色髪の少女

「そう……出来れば貴女の名前を覚えてほしいのだけれど…」

「クウ。セカンドネームは無いわ」

「うん、わかった。クウ、全員に伝えて、近くに人の来ない川があるから水浴びしてって」

「あんたはどうするの？」

「こんな状況じゃ馬車で移動するしかないじゃない？だから手綱を引く」

女は言ってからすぐに馬車を進めた。

しばらく馬車に揺られる事1時間ほど女も入った川に到着した。

「クウ。どう？皆水浴びしてくれる？」

「あの子以外するって。まあ、あんな事あった後じゃ無理ないわよ」

「そうか…見張りしてるから浴びてきて」

「わかったわ」

クウ達は少女と女を残して川へ向かった。

（さてと、女の子を元気づけなきゃな）

「隣いい？」

「あ…はい……」

「ゴメンね。私がつと早く見付けていれば」

「そ、そんなつ、お姉さんは依頼を受けた訳じゃないんですよ」

「まあ、ね。でもさ、この大陸の情勢さえ分かってればって思うとね」

「いえ！だから、お姉さんのせいじゃ……！？」

女は少女を押し倒し下腹部に手をあてた。

「え！？あつ、ちよつ！？」

「…彼女に神の加護を、彼女に慈愛を……彼女の心を体を癒してください」

女がそう呟くと女の手が淡く仄かに光った。

「うん、これで大丈夫。こんな事しか出来なくてゴメンね」

「えっと…何をしたんですか？」

「ん…浄化魔法的な何か？」

「何で疑問形なんですか？」

「まあ、気にしないで、とりあえず妊娠とかの心配はなくしておいたからね。君も皆と一緒に水浴びしてきなよ。ね？」

女が少女を促すと少女はしぶしながら川へ向かった。

それを見届けた女は刀を持ち鞘から引き抜いた。

ガリガリガリ！

「なんで刀身がこんなにもボロボロなんだろう？これじゃ刃物として使えない」

しばしの思考、そして刀をしまい瞑想し始める。

そして、ゆっくり目を開いて刀を抜く。するとどうだろう？

「やっぱり、思ったとおりか……」

女の掌の中には刀身を桜色に輝かせた刀と周りに舞い散る花びら

「桜の花びら？」

「わー！お姉さん。これなんですか？」

「ラウスの花ね」

「ラウスの花？何それ？」

水浴びから帰ってきたクウに小馬鹿にするような表情で見られて女はムスツとした顔で見返す。

それから女は刀を鞘にしまつとクウと向き合つた。

「知らない物はしょうがないじゃない」

「まあ、いいわ。ラウスって言うのは春先に咲く花よ」

女はへえと関心しながら他の人たちが戻ってくるのを待つ。
待つ事5分、全員が帰ってきた。

「おかえり。気分はどう？」

「結構よくなつたわ」

「それはよかった」

微笑み返しながら、馬車の準備を始める。中に落ち葉を敷き詰めクッション代りにした。少しでも彼女達の疲労が薄れるようにと、全員が乗り込んだ後馬を歩ませる。

馬は快調にパカパカと歩く。従者席で心地よい風を受けながらゆっくりと進む。すると、幕を押し上げクウが顔を覗かせた。

「ねえ」

「どうかした？」

「アタシ達とここの解放をしない？」

「攻めてきてるのを倒すって事だよ？私が？」

「あんたなら頼めそうだったからね。どう？」

「別にいいけど……」

「そう！なら、決定だからね！いい？忘れないでよね！」

この会話を機に現在の戦闘及び大陸民保護の名無しの女を筆頭とする解放軍が指揮される事となった。

4 名無し 出来事（後書き）

要するにアカーシャの扱いは資源が豊富で美人さんが多いから侵略を受けているわけです。鉄とか金銀、石炭などですね。レアメタルに関しては近代的な物を作っているわけではないので発掘しても捨ててます。

5 名無し 休みの一時と王子の策略

その日は平和だった。退屈と言っているほどに、避難してくる大陸民もいなければ女達の根城を襲撃するべくがしゃがしゃと鎧を鳴らせ歩いてくると言う事もない。云ったって平凡、これまでにないくらいの休みだ。

そのせいか、もしくは連戦だったせいか。女はベットの上で心地よさそうに昼寝を楽しんでいた。扇状に広がった白髪が窓から入り込む光を受けキラキラと輝いていた。胎児の様に丸まって寝ている姿はいつもの柔らかさの中に凜とした感じではなく、幼く無邪気な少女のような印象を与える。すう…すう…と緩やかなリズムを打つ様に寝息を立てていた。

ガチャ……

と、女の部屋のドアが開いた。クウである。いつもの御使いの様な服ではなくひざ丈の黒いワンピースを着て、女の部屋の中を覗いた。紙が乱雑に散らばり羽ペンが転がっている机、刀が立て掛けてあるイスへと視線が移動した後、ベットの上で寝息を立てて眠りかける女に視線が止まる。そのいつもと違う雰囲気の人に自然と口元が緩んでいた。気が付いて口元を引き締めるとそっと女に近づいていった。クウに気づく気配はなく、大きめの胸を呼吸に合わせて上下させていた。

「まったく…これで昨日死神みたいに敵を殺していたんだなんて想像出来ないわ」

クウの独り言が部屋に漏れる。女は身震いをするところりと寝がえりをうった。起きそうにない事にクウは溜息をつく、刀の立て

掛けてあつたイスをベッドの傍に置き本を読み始めた。

ペラリ…ペラリ…と本を捲る音と外から聞こえる鳥のさえずりが共に部屋を満たす。なおも女は寝たまま幸せそうな寝顔をクウに見せている。

窓から外を眺めれば、中庭で元気に走り回る子供たちや訓練に性を出している男たち、洗濯物を干す女たちの姿を見ることが出来るだろう。久し振りの貴重な休息日の人々は思い思いに過ごしていた。太陽が空のてっぺんを過ぎた頃、眠そうに目を擦りながら女は起きた。

「おはよう。名無し」

「……おはよう」

起きたての女はふらふらとクウに近寄り抱きついた。あまりに突然の事だったので、クウは少しの間硬直していたが次の瞬間顔を真っ赤にして女を突き放した。付き離されて机へ倒れ込む。

お分かりだろうか？机の上にはインクボトル、蓋は閉まってはいるがゆるゆる、必然的に机に衝突した時蓋が外れ女にインクがボトルごと飛んできて頭からかぶった。束の間の静寂、女の白髪を青黒いインクが伝う。

「……お風呂行ってきたら？」

「…そうだね」

痛い沈黙が広がる。女は気だるそうにタオルを取り出しとぼとぼと部屋を出て行った。女が部屋を離れていったのを確認すると、頭をぐしゃぐしゃと掻き毟り「うがー！」と奇声を発して落ち込んだ。クウは女を外へ行こうと誘いに來たのだがこの始末である。

行動を起こそうとしても起こせない自分が嫌いだなんて考えてもつと自己嫌悪する。そんな事を繰り返して、ベットの脇に座りこむ。

(アタシはアタシが嫌いだ…)

「何やってるのよ。アタシは」

「何やってるんだろっね？」

「名無し…」

「それじゃ、出かけようか」

「え？」

「私を誘いに来てくれたんでしょ？なら、行こう？」

「え、う、うん」

「私は」

何か言い掛けて黙る。それにクウが振り返ると女は笑顔を向けて言った。

「私はクウの事嫌いじゃないよ」

「な、なな、何を言ってる!？」

「だから、そんなに自己嫌悪しなくていいからさ」

「う、うん…」

「また、照れちゃって、初々しいな」

クウのわき腹を肘でくいくい押す女にそろそろイラついてきたのか。スパアン！と軽い音と共に女は頭を叩かれる。女はちよつと涙目になりながらクウの腕を引っ張って外へ出た。天高く昇った太陽の光が二人に降り注ぐ。若干憎む様な目で太陽を見上げる。

「今日は暑いね」

「今日も！暑いだよ」

「そうかなあ？」

「それはそうと、どこに行くつもり？」

「ん……こつち」

方角的には南、この先には結構な大きさの湖があり、水生系の獣人と言うよりも魚人達が住んでいる。彼らに協力を求める物だと思つてクウは女の後を付いて行つた。が、湖を目前とした所で方向転換、森の奥へと進んでいく。

少し歩いたところで遠くから微かに旋律が聞こえてきた。ゆつくりとした旋律につられるように女は道なき道を迷う事なく突き進む。前方の木々の途切れ目から光が差し込んでいる、そこへ向かつて歩みを早めた。

視界が開けるとそこでは黒髪の少女が白いピアノの黒い鍵盤の上で指を走らせていた。

「亜矢？」

「誰？」

「達也が居たからもしかしてって思つてたけど……来てたんだ」

「え」と、どちらさま？」

「ちよいちよい。こつち来て」

「？」

女が呼ぶと亜矢と呼ばれた黒髪の少女がとことと女に近づいて行つた。そつと耳元で囁く。

「（今は見た目はこんなんだが亜矢、お前の知ってる行方不明になつた友達だよ）」

「（！？）」

「（シー！声が大きい。ちよつと都合で名前を明かしてないんだ）」

「名無し、何話してるのよ？」

「い、いや、なんでもないよ？」

「ふん……」

ジートとした目で見つめられ冷や汗をだらだらと女は流し始めた。その姿を後ろから亜矢が笑いをこらえながら肩をポンツと叩いた。期待した面持ちで女が振り返ると満面の笑顔で「がんばっ！」と爽やかな笑顔でサムズアップ。懇願の視線を送るも無情にも返還され肩を落とした。

勘弁したように両手を上げ振り返った。その時、湖の方から怒声が響いた。聞いた瞬間、女は助かったと言うような表情になりながら駆けて行った。そのあとを追うようにクウと亜矢が駆けていく。湖に着くと魚人同士が取っ組みあいながら怒鳴り合っている。そばで一人の女性がオロオロとしているが何も意味をなしていない。片方が拳を振りかぶった所へと女が仲介に入った。

「なんだ！お前は！？邪魔するな！」

「あゝ、はいはい。ストップ、ストップ。まずは話し合おう」
「るせえー！」

右からのストレートを体を半身にしてかわし顎にフックを入れる。片方の魚人の男がカクンと膝から崩れ落ちた。女はもう一人に「あなたもやる？」と視線を向けると、両手を持ち上げて降参を示すようにウンザリとした顔を向けた。追いついたクウと亜矢は状況がよく分からず首を傾げるばかりだった。

「それで、なんで喧嘩してたの？」

「こいつが俺の女に手を出そうとしたんだよ」

「だから、出してねえって言ってたんだろうがよ！」

「んだとー！？」

「はいはい。落ち付いて、今は話し合い殴り合いじゃないから」

「チツ……」

「で？問題の彼女さん。真相は？」

「彼は、その、助けてくれただけです……からまれちゃって……」

「と、言うことだけど」

「本当？」

「ああ、こちらのワルガキ共が手出そうとしてやがったからぶん殴つて助けたただけだ」

「らしいよ。彼氏くん」

「……らしいな。そいつらが来たぞ」

「報復つてやつ？」

いかにもな男達がこちらに近づいてきていた。男二人と女はそちらに向き合った。二人は女を手で制したがその手をはねのけて横に並んだ。近づいてくる男達は明らかに殺気立っており二人を見た途端拳を握り女達に向かって駆けてきた。

「さつきはよくもやりやがったな！」

「るせえ！」

一人が相手の頬を殴った瞬間、背後で轟音が轟いた。いきなりの事にその場の全員が音源に目を向けると白と黒の巨剣で地面を切り裂いた女が居た。

「今、言うのは良いとは思わないけれど現状を分かっている？今戦争をしてるんだよ、三つの国とき。なのに同族同士で争ってる場合？」

女の言葉に周りは静まり返る。

「だからさ。そんな争いやめて、自分の大切な人を護る事に全力を注いだらどう？特に好きな娘が居る人は」

「もしかしてアンタ…」

「うん。解放軍を名乗ってる集団の頭」

「ようするにその解放軍に入れたってことか？」

「強要はしないよ。ただ自分の大切なものは自分で護ってほしい。故郷だとか好きな人だとか家族、友人とかね」

「…………俺も一緒に行つていいか？」

「私達は誰でも受け入れるよ。その代り覚悟しておいて、二度と大切な人の顔を見れなくなるかもしれないから」

「上等だ！腕っ節には自信がある。任せておけ」

「大丈夫だよ。彼女さん、私も最善の努力をするから」

「はい…あのっ…彼をお願いします」

「なんか違う気もするけど、任せて」

女が腕を振ると巨剣は消え、根城の方向へと歩きだした。その後をクウと亜矢、魚人の男達が追った。先ほどの森の中を女を先頭にひた進む、十分も進むといつもの姿の根城が見えてきた。その大きさに新たな仲間となった魚人達は感嘆していたが何事もないかのように進む女とクウを足早に追う。ふと、城門に視線を向けると

「おっ、遅かったな」

「誰？見た事無い顔だけど」

「ああ、自己紹介が遅れたな。俺は大蓮寺琴雪だ、よろしく」

「名前はないから、名無し。それで何の用？」

「んあ？仲間に入れて貰おうと思つてな。足を運んだってわけだ」

「まあ、拒む理由はないからよろしく」

女が手を差し出すと琴雪はその手を握り女をクイツと引っ張った。女はバランスを崩して琴雪の胸へと倒れこむと突然抱きしめられた。その姿を見ていた一同は皆別々のリアクションをしており、クウと亜矢以外はあまりの出来事にビックリして声もあげられていなか

った。一方、亜矢は『うわっ、ドラマみたい』などとぼつりと零していたが、隣に居るクウは並々ならぬ雰囲気を出していた。口元は引きつっておりドス黒いオーラを放っていたりする。

突然の事に最初は目を見開いていた女だが、状況を把握すると琴雪の顔をジト眼で見上げた。が、次の瞬間これまで以上の緊急事態が訪れる。見上げた女のあごをくいと掴むとその唇にキスをしたのだ。目を見開いて顔を真っ赤にする女、キャーキャー騒ぐ亜矢、あまりの怒りにふるふると震えだすクウ、クウの姿を見てそそくさと城内へ退避して行く獣人達。

「なっ、なっ、なっ……」

「まっ、主目的はお前を頂くことだけだな」

「あ、あんたね！アタシの名無しになにしてんのよ！？」

「じゃあ、寝取らせてもらう」

「あはは…あはははは…こいつもう殺っちゃってもいいよね？人に勝手にキスしやがってさ。ああ？何様？」

「ちょ、ちよっと？え〜と、名無しさん？落ち着いて」

「亜矢……流石に我慢できない」

恐ろしいほどの笑みをうかべて、手に白と黒の巨剣を携えて琴雪ににじり寄る。目のハイライトはすでに消え虚ろな目で琴雪を見据えている。流石に罪悪感やら恐怖感やらで冷や汗をダラダラ流しながら琴雪はジリジリさがって行くがそれよりも早く女は近づいて行き、白と黒の巨剣を振りかぶった。無論、刃は寝かして平面の部分を琴雪へ向けている。そしてついにフルスイングした。

「五、六っぺん、死にやがれ！クソ野郎ーーーー！！！」

キャラがもうぶっ飛んじやったりしてはいるが、これはもうしょうがないとしか言いようがない。いきなりキスされたのだから、取

つて当然の行動である。白と黒の巨剣の腹で琴雪をぶっ飛ばした女はさっぱりした笑みを浮かべ根城の中へと歩みを進めた。
クウと亜矢が付いてこない事に気づき後ろで茫然と突っ立っている二人を呼ぶと女の自室へと向かった。

「さてと、亜矢。質問があるんだけどもいいかな？」

「なに？」

「戦力として考えてもいい？」

「あたしを？どう？ナンナ」

（まあ、大丈夫じゃろう。満月さえ上っていれば　じゃがな）

「猫？」

「んゝ…これでも神様だよゝあとはウルメリアゝ」

「お呼びでしょうか？ご主人様」

亜矢の横には黒猫とメイド服を着た少女が立っていた。いきなり現れた事に少しばかり驚いた女だったが、すぐに目を細める。

「彼女達は？」

「神様と魔導書に憑いていた精霊」

（ほう、お前。面白いものを憑かせておるのお）

「わかるの？」

（それにしてもよくそんな不安定なものを……）

「ああ、失敗作らしいからね。この神造の神。ね、レジュグリアス」

《本人を前にして言いますか？普通》

「ああ、うん、ごめんね」

《それで、なんのようです？》

「呼んだだけ、だったんだけど確認するために」

《衣になれるかですか？もちろん可能です。もう諦めたらどうです

か？ほとんど同一の存在になっているのはわかっているのでしょうか？」

「うっさい」

レジュグリアスに言われ嫌そうな顔で答える。周りのメンバーがいまいち状況を把握していなかったみたいだが、そんなことに構わずじっと見つめ合う（睨みあう）一人と一柱

すぐにナンナと亜矢が止めに入り何事もなかったが、他の国では一つ事件があった。

ウツドノース・騎士詰所

「ウォルドはいるか！？」

「はっ、ここに。王子どうされました？」

「ああ、最近父上の様子がおかしい。人が変わったように新大陸に船を出している。更には新たな城をも建造し始めた。母上の姿は見当たらず」

「それで、我々に何を？」

「うむ、クーデターを起こそうと思う。あれは父上ではない何か別のものだと僕は思う、しかも外交官に聞いた話なのだがサンゴルドを除く三カ国すべてが新大陸へと船を出している。どれも、おかしい話だ」

「クーデターですと？先にお聞きしますが王子、こちらの手駒は？」

「君たち近衛騎士団と全国民だ。民の皆も今の父上をおかしいと思っている、ならば立ち上がるのは王族の役目だろう？」

ここら辺は兄妹なのだろう。思い立ったら即行動、すでに国民には密偵達に情報を流しておりほとんどの民が賛同していた。更に勝手に組み込んであるのだが、ミーナ達も恐らく攻勢に出るだろうと予測してアヴァロンは作戦を組み立てている。不確定な情報では

あるが新大陸　アカーシャで三カ国を敵に回して大立ち回りしていると言う『血濡れの悪魔』と呼ばれている者も居るらしい。これも不確定要素として作戦に組み込んでいる時点で、彼はかなりの博打に出ていると言っている。

これから本格化するであろう侵略戦争のこれはまだまだ序章である。まだまだ成長過程の策士の雛、古の龍を操る戦姫、忌み嫌われる眼を持つ心優しい魔王、そして悪魔の二つ名を持ち理から外れた白狼。

彼らの存在がこれまでにない戦乱を呼ぶことになる。

5 名無し 休みの一時と王子の策略（後書き）

ちなみに大蓮寺くんはトウ八出身です。

6 作戦会議と苦悩

亜矢の参加から十日程経ったある日、根城の中で一番大きい部屋に各種族の長や女達が集まっていた。各々、なぜ呼び出されたか分かっておらず頭の上に？マークを浮かべて女の方を見たが、その人物は机にぐでえ…と伸びきってやる気の欠片すら見えず更に場を混乱させる材料となっていた。

そして、おもむろに立ち上がる人物が居た。クウである。

「ここに集まってもらったのは他でもない。アタシ達の現状について話し合おうと思って」

「……どうしてこうなった？」

時間を通ること二時間前、場所は新しく仲間になった亜矢の部屋である。ベッドの上に亜矢、イスにクウ、壁にもたれて女が集まっている。

「いや、亜矢が増えたから戦術が増えたね」

「主に回避する時の援護攻撃の話でしょ？」

「まあね。私が行けばなんとかなる訳だし」

「へ……ん？じゃあ戦術じゃなくない？」

「だね。ぶっちゃけるとみんなに足止めしといてもらって私が掃討するわけだからその際の撤退援護くらいか」

「それよ！」

「へ？」

「アタシ達ずっと名無しに頼りつきりじゃない！そこにアヤが増えたんだから名無しなしでも戦えるようにしないと」

「え？え？？」

「よしこつなつたら！」

クウは窓を開けると全員に通達した。『二時間後に大広間に各種族長といつものメンバーは集合！名無しからの連絡以上！』と叫んで部屋を出て行った。その場に取り残された二人だったが、自分の名前を使われた事に今更気付いた女はわたわたと混乱し始めた。

「あ、亜矢」

「なに？」

「俺ってなんか名前使われただけでそんな事言ってないよな？」

「まあ、ドンマイ？」

「うう…ちなみにこの会議的なのは亜矢も参加だからな？」

「分かつてるよ」

「あつ…分かつてたんだ」

と言う事があつたのだ。だから視線を集めている女であるが、本人はそんな事を一切口走っておらず犯人は今堂々と立ち上がって宣言したテンション異常娘なのである。

「質問なんだが…」

「なに？クラウド」

「名無しが死にかけているがあれは？」

「ああ、気にしないで」

「あ、ああ、それでそこに居る彼女が？」

「亜矢だよ～よろしく～」

「よろしく。でだ、会議の内容は？」

「じゃあ、本題に入るわ。現在だけアタシ達は名無しに頼りつき

りな訳なんだけど、そこにアヤの登場よ。要するに名無しなしでも戦えるようになっておかないと」

「なるほど…一理あるね。僕は賛成だけどみんなは？」

「俺も同意見だ」

「賛成」

「名無し、異論はないわね？」

「な〜い……だから、私は退室するよ」

イスからゆっくりと立ち上がるとノロノロと歩き始めた。呼びとめようと狼の男が立ち上がる。が、女は振り返る事無くドアを開けて出て行った。

女は調理場へと向かうと一本のビンと杯を取り出して歩き出した。途中、井戸から水を汲み自分の部屋に向かった。

部屋に着くと木で組まれた箱の中を水で満たしビンを冷やしておく。背伸びをすると骨の節々がパキパキと小気味良い音を立てた。

空には二つの月が上り辺りを淡く照らしていた。その月光の中、根城の屋根の上で一人杯を傾けて女は酒を楽しんでいた。また杯を酒で満たしクイツと呷る。一息に飲み干すと月を見上げる。同時に風が吹き女の頬を撫でて行く。

月を見上げていると隣にレジュグリアスがビンを持ち女にお酌しましょうか？と微笑みかけられ女は頼んだ。レジュグリアスが女の持つ杯に酒を注ぐ音と虫の音だけが一人と一柱を包む。

「お前にこんな事を愚痴るのもどうかと思うんだけどさ…」

《なんでしよう？》

「昔 つつても数カ月前なんだけど、それまでは人どころか動物を殺めても吐いてたのにさ。最近はそんな事何もないからさ、自

分が怖くて…な」

《成長……と受け止めてみてはどうですか？》

「ゴメン、やっぱ泣かせてくれ」

《いいですよ。私の事は気にせず気が済むまで泣いてください》

「うつ…うつ…」

堪えるような声で泣く女の頭をレジュグリアスがそつと撫でた。それがとどめだったのかレジュグリアスに抱きつき本格的に泣き始めた。

照れた様に頬を紅潮させて女はレジュグリアスに謝る。

「すまん。変な手間かけたな」

《いいですよ。パートナーでしょう？》

「いんや、相棒だ」

女のその言葉にレジュグリアスは微笑む。そして、女は杯を呷る。また一人と一柱の間に無言の時間が訪れる。少しすると笑みがこぼれ始める。

とその時、根城の前に動く影が見えた。女は目を細めてじつと見た後屋根から飛び降りた。

女はその影へと近づいて行く。ある程度近づくとその姿が見えてきた。薄紫の髪をツインテールにした橙の瞳の少女　クルルスである。

「や、お疲れ様。クルルス」

「ちゃんとお伝えしましたわ。ですから……その……ご褒美をくださいまし」

「ご褒美？ なにか欲しいものでもあるの？」

「あ、頭を撫でて欲しいですわ」

「うん？ それなら別にいいけど。 そんなのでいいの？」

「はいですわ」

未だに不思議そうな顔をしている女だがゆっくりと撫で始めるとクルルスは気持ちよさそうに目を細めて撫でられている。しばらく撫でていたが女は腕が疲れてきたからか撫でるのをやめると不服そうな視線を女に向けてきたが軽く流して部屋へと向かい始める。

「そうそう。 どうせ、ミーナに刀を向けたでしょ？」

「…ッ！ なぜそれを？」

「そりゃ、クルルスの性格を考えたらそうでしょう？」

「バレていましたか？ そうですわ。 けれども、負けました」

「レヴァーテンで？ そりゃまあ、ミーナも強くなったなあ。 魔剣でも使われた？」

「フロツティを使われましたわ」

「そりゃしょうがない。 うん、ホント御疲れ様。 部屋でゆっくりしてて」

「ええ、そうさせていただきますわ」

スカートの裾を指で摘まんでお辞儀をすると根城の中へと消えて行った。 その後ろ姿を眺めて苦笑した女は小さく呟いた。

「この世界はホントに……」

月が輝き、星が瞬く空を見上げて悲しげな表情を受けべる。 その目は虹色と黒に染まっていた。

「残酷で救いようがなくて…でも」

「優しいな」

その弦きは虚空へと溶けていった。

6 作戦会議と苦悩（後書き）

はい、一か月ぶりです。お久しぶり

やー、色々とあって今回は総合的に考える時間が少ない状態で投稿してしまいました

言い訳を一つ。テストですよ、テスト。期末テスト、赤点×4とかね。心が折れますわ

しかも最近ネタ切れで他の執筆が進まない！というかネタがほとんどコレに移動してしまう不思議。ホント困りものです。

ではでは、本編について

今回は名無しさん離れをしようとクウちゃんが暴走気味、レジユグリアス（以降レアス）さん男前な回でした。そして名無しさんがもう皆さん誰かわかっていると思いますですが知らないふりしてあげてください。所詮それだけの文才なのでから作者が

そしてクルルスさん再登場、某黒ウサギのキャラをイメージしてます。あのツインテの娘です。でも性格まったく違いますのでパクリじゃないですよー

武器はまあ、次回くらいから説明出来たらなあと考えていたりいなかったりです。

ではまた次回お会いしましょう。なんか愚痴のような後書きでした
)

7 ウッドノースの侵攻と白玉天のスーパーお馬鹿タイム（前書き）

†グロ注意†

7 ウッドノースの侵攻と白玉天のスーパーお馬鹿タイム

周りを霧が包む早朝。金属同士がこすれ合う音が森の中に響いていた。もちろんのことだが三国の軍隊である、掲げている国旗はウッドノース。その先頭を進む騎士は近衛騎士ではないが地位はもつとも近衛に近い者である。力強く自らの勝利を信じる瞳の青年である。彼の装備でもっとも目立っているのは腰に提げている剣だろう。柄の部分に縦に割れ目が入っている。装飾も最低限のものしかされておらずまさに実戦用の剣だ。

少しすると青年は右腕を上げた。行軍が止まる。

「どうかなさいましたか？」

「ああ、前方に人影が二人程確認できる。あれはなんだ？」

「片方はガタイの良い男の様ですが……もう一人は女？」

「そのようだな。風を扱える者！前方の霧を払え！すぐにだ！」

青年の一声で後方に居る魔術師たちが魔法を使用した。そよ風程度だった風が強くなり霧を取り払った。そこに立っていたのは女とヴォルフである。ヴォルフの傍らには五本のランスが積んであった。青年たちの軍列を見た女はニヤリと笑い、ひょいといとも簡単にランスを持ち上げた。

「リバイ卿、ここは我々にお任せを」

「分かった。しかし、女と男たった二人と言えども気を抜くでないぞ」

「ああ、まかせとけリバイ」

「マーカス卿！ちゃんと”卿”とつけて呼んでください！」

「いいだろ？そんなの……それより、さっさとすませようぜ」

「そうだな……それではリバイ卿、しばしお待ちを」

「いつくぜー!!」

三人は馬を女達へ向けると猛然と駆け始めた。その姿を目視した女は大きく振りかぶった。ウッドノースの兵士達はまさかと思っただが、そのまさかを女はやってのけたのだ。

ランスを三人に向かって投げたのだ。空気を切り裂く音とともに先頭を走っていたマーカスへとランスが飛ぶ。女はまたヴォルフからランスを受け取り投擲した、先ほどのランスと同じ軌道で突き進む。一投目のランスを剣で無理矢理軌道を変えた代償として剣が中央から真つ二つに折れた。眼前には目一杯に広がるランス、まともにランスの餌食となったマーカスは胸に突き刺さったランスの勢いのまま後方へと吹っ飛び、仰向けに転がった。その姿を見たもう一人の青年　ラギウスは怒りの表情を浮かべて女へと迫った。

「ヴォルフ！ここは私が止めておくから、みんなに伝えて！」

「分かった。名無し。死ぬな」

「任せなさい！」

自分の背後の地面に二本のランスを突き立てると一本を片手で持ちラギウスを待ち構えた。

ランスを持つているから突いてくるしかないと考えてラギウスは剣を振りかぶった。だが、その予想とは大きく違ったことを女はした。馬の脚を狙って横に薙いだのだ。その一撃で脚を壊された馬が前につんのめったそのままラギウスは前方へと放り出された。上手く受身がとれずに転がされたためか力なく立ち上がる。

フラフラと立ち上がり振り返った瞬間、右側をランスが掠めて行った。それに気圧されるが勇敢にも女に躍りかかる。そして、剣を振り下ろした　振り下ろしたはずだった。だが、右腕の感覚がない。右腕を見ると肩を少し残しその先がもがれた様になくなっていた。傷を認識した瞬間、痛みを感じ始めた。が、トスンと胸に力を

感じて前を向くと鎧を易々と貫きラギアスをも貫いている女を見た。
女は小さく

「ゴメン。でも、同情はしない。君たちがやっている事はもっと酷いことだから」

ラギアスから四季王・無を引き抜くと振り返りざまに首を撥ねた。

「その代りに、痛みを感じる前に逝かせてあげる」

最後の一人の騎士との距離を一気に縮める。そしてすれ違う瞬間、袈裟掛けに切り裂き軍団に肉薄した。先頭の兵士と接触する瞬間、四季王をしまい代わりにレジュグリアスと呼びだし真横へ振るう。3、4人を巻き込んでぶつた切る。これまでのように顔を隠す行為などをせずに、そのまま戦い始めた。

縦横無尽に敵を切り裂き、殴打し蹴り飛ばす。

「レアス」

《綺麗に咲かせてください死の花を》

レアスの声が巨剣から女の頭の中へと響く。

その言葉に不敵に笑うとレジュグリアスを振り上げた。

《二十》

レジュグリアスを中心に光が溢れ出す。本能的に後ろへ後ずさる兵士達、だがすでに女と戦いを始めたのが原因なのだから後の祭りである。

《七十》

「さてさて、死にたくないならさっさと逃げなよ？手加減出来ないからさ」

《百、碎神》

地面へとレジュグリアスを斬りつけると周囲へ亀裂が入った。

《「ヴォルカニック」》

掛け声とともに亀裂から炎の奔流が噴き出す。奔流に巻き込まれた兵士達は地面をのたうちまわるが身体に灯った青い炎は消える事なくその身を焼き焦がす。そこには女を中心として直径十数mの黒い円が出来上がっていた。その付近でリバイは苦い表情を浮かべていた。

「リバイ卿……だっけ？どうする？逃げる？」

「仲間を殺されて黙って引き下されるか……！」

怒声とともに腰に帯びていた剣を引き抜き女に斬りかかった。が、巨剣をまるで小枝を振るうかのように軽々と振りリバイの剣を弾いた。すぐに態勢を立て直して下段から斬り上げてくる、それを一瞬でレジュグリアスを消し次の瞬間には手の中に四季王を出現させた。

「四季王・無 無名」

「負けてたまるか！みんなの仇を討つんだ！」

「あなたはこの侵攻の詳細を分かってる？」

「なんのこと……だっ！」

彼の言葉に眉根をひそめた瞬間を見計らってかりバイは後方へと飛び退いた。考えながらもリバイの剣撃を全て四季王で逸らす、片手間に交戦している女を見てリバイの頭に血が上って攻撃が荒々し

くなつてきていた。

「何も知らずにここへ来たのか……なら、教えてあげようかな。ここアカーシャへの侵攻の理由は鉾石の採掘、及び奴隷の捕獲、女のね。そんな事も知らずに？」

「奴隷……だと？ そんな事聞いていないぞ」

「だろうね。君、近衛騎士じゃないでしょ。まあ、下っ端扱いだろうね」

「しかし私は！」

「まだ、続けるの？」

「自分に課せられた任務を全うするまでだ！！」

それを聞いた女はにんまりと笑った。それを見たりバイは剣を両手で持ち左右へと引つ張った。すると中央で剣が二つに割れて二振りの刀となった。

半身になり軽く腰を落とした。そして、女へ向かって一歩踏み込むと共に切り上げを放った。女はそれを回し蹴りで弾き、その勢いを殺さずに四季王を振るう。それを弾かれていない方の刀で弾きあげた、女はその勢いを利用してバク転して後方へと下がると低く構えた。

「さてと、本当に帰るつもりはない？」

「みんなが殺されたのに引き下がれるか！」

「分かった、分かった。生きてればいいんですよ」

「は？」

「レアス、出来る？」

《もちろん、可能です。けれど……》

「ああ、分かっているよ。何回くらい？」

《そうですね……最低5回です》

「よし、やろう」

《は！？自分の言っている意味分かってるんですか！？》
「分かってるって」

物凄くあっけらかんと女が言うものだから、姿を現してしまったレアスはそれはもう間抜けな顔を浮かべ、リバイはと言うと突然現れたレアスに対してびっくりした表情を浮かべていたりする。

「さてと、リバイ卿手伝ってくれる？」

「な、何をだ」

「ああ、うん。君には辛いだろうけれど、一般兵の焼死体のそばにほかの人の亡骸を集めて、全部ね」

「そんなことをしてどうするつもりだ？」

「ん？生き返らせる」

さつきと同様、あっけらかんと言うものだからリバイも目が点になっていた。けれども、ゆっくりとその言葉を噛み砕いて咀嚼した所で、分かった。ただけ言って、仲間の変わり果てた姿を見るたびに悲痛な表情を浮かべたが数分後には全員が集められていた。

その周りに気の手で文字や記号を円状に書き込むと地面へとレジユグリアスを突き刺すと、ぶつぶつと言葉を唱え始めた。時間が経つにつれ徐々にレジユグリアスの金色の宝珠が輝き出した。その輝きがいつそう増した瞬間、絶叫が響いた。

「ぐがああああああ！！？」

絶叫が収まってくると共に輝きも失せて行った。そこには死んだはずのリバイの仲間と兵士達何が起こったかよく分かっていない表情で座り込んでいた。その傍では地面に膝をついて肩を上下させている女の姿があった。リバイはそれを見ると剣を納め、女の元へと駆け寄った。

「おい。どういうことだ！？みんなが」

「だから…生き返らせるって……いったでしょ？」

「そんな魔術が？」

「まあ…代償が高くついたけど…ね。ふう……ちょっとタイム」

ふう〜と小さく息を吐くと立ち上がり背伸びをした。

「それで帰ってくれる？」

「ああ、お前の言っていたことが真実か否か知るために」

「じゃあ、近衛騎士団に伝言をお願い」

「ヴォルド隊長を知っているのか！？」

「例の物を開けておいてって」

「は？」

「黒銀の鬼神さんからの伝言でした。じゃあね、リバイ卿。」

楽しげに笑うと、リバイ達に背を向けて去って行こうとしたが、途中でふと思い出したように振り返った。

「そうそう。国王には聞いちゃダメだよ。聞くとしてもヴォルドか
アヴァロンにしようかな」

「お前！名は！？」

「ああ、峰治だよ。忘れたか？お前らの国を護ってやったる？」

いたずらが成功したような笑顔をして女 恭介は去っていった。

「リバイ卿？どうかなさいましたか？」

「い、いや…それよりも気になる情報を聞いた。急いで本国へと帰還するぞ」

「……ここの侵攻はどうするんだ？」

「その真意を聞く為と伝言をヴォルド隊長に伝えに行く」

その頃サンゴールドでは、白玉天が奮闘していた。政治と言うよりも国防問題に關しての問題が山積みになっており、シンシアもゼトも居ない状況だからだ。

「ウッドノースとの国境の兵の配置が少ない？三分の一も送ったのだから十分であろう！！」

なんて、戦略もクソもない事になっているが大丈夫だろう。たぶん

「はあ！？街の守備を増やせ！？犬かなんかでも配置している！」

…………… 大丈夫だよな？

7 ウッドノースの侵攻と白玉天のスーパーお馬鹿タイム（後書き）

はい。ついに恭介くんの名前が登場しました。

恭介くんはこの侵略戦争をどのように止めるのか！？

まだ、決まっていなくてすけどね。

ではでは、次回でお会いしましょう

恭介の本気と裏武器屋（前書き）

レジュグリアスを武器の時はそのまま、喋ったり人型で出てきた時はレアスにしてあります。

恭介の本気と裏武器屋

ある日の事、朝の見回りをしていた馬の獣人部隊から連絡が入った。その連絡を聞き、恭介を除く戦闘部隊が先行、恭介は護りの居なくなった根城に強力な拠点防衛結界を張り出撃した。

恭介は飛んだ。比喩的なものではない。天女のような衣を身に纏い空を風の様に大空を駆ける。眼下に広がる森が緑一色に見える程の速度で

「見えた。到達までの時間は？」

《二十秒で上空へ到達。直線距離で二千》

「分かった。突っ込むから衝撃吸収をお願い」

《承知しました》

レアスの言葉を受け、腰に帯びている四季王を抜き構えに入る。仲間は三名、うち一名負傷、よって使用するのは自然と紅葉と氷雪は省かれる。残るは桜花と蒼水と無銘だ。更に周りに特殊な効果を与えないとなると、

「四季王・無　無銘」

業物を越える業物の刃を持つ形態、他の四季には特殊効果と刀身が光っていたが無銘は効果も光る事もないが切れ味のみは五つの型の中で最強の部類を誇る。無銘を脇に構えスピードを上げる。ブーツも強化しており現在は鋼をも凌ぐ耐久性を持つだろう。

「逃げたらどうだ。坊主！」

「ぐう！？」

「もうギブアップか？情けな…」

最後まで喋る前に轟音とともに砂埃が舞う。その中でゆらりと人影が立ち上がった瞬間、青年の剣に加わっていた剛力が消え目の前の男が崩れ落ちた。徐々に晴れる砂埃の中見た姿に青年は目を見開いた。白い髪、優しげだが意思の強そうな燃える様に紅い瞳、天女の羽衣と白銀に輝く刀身を持つ刀

「女神：様？」

「そう言われるのは初めてだなあ。私は貴方の居る側の頭なんだけど…見た事なかった？」

「は、はい。初めてです」

「まあ、とりあえず本拠地に連れてくから舌嚙まないようにね」

恭介は青年を抱え上げ空に舞い上がった。かなりの高さまで上がった事に驚いたのか青年はポカーンとしていたがハツと高さを感じ出し縮こまった。その姿にクスリと笑った後、行きの半分のスピードで戻り、また前線へ向かった。

戦場へ近付く程、鉄臭い臭いが増していく。血の臭い。鋼鉄同士の衝突音、悲鳴、雄叫び。下へ視線を向けると血で血を洗う凄惨な光景が広がる。幻想曲を使うか迷ったものの制御出来るようになったとは言え、ただ止められるだけである事を思い出し、四季王を抜く。

「四季王・冬　氷雪」

薄い青に輝き温度を感じない雪を戦場に降らせる。これまでの戦闘で把握した事は敵は魔法を使う事によってこちらと渡り合っているが、こちらは魔法と言えは武器にエンチャントするぐらいにしか使用していなく、身体能力のみで戦っていると言う事だ。四季王・氷雪の能力はマジックジャマー　　ようは魔法無効化だ。三国の有

効札を潰される訳だから必然と形勢は恭介側獣人へと傾く。

「レアス」

《なんでしよう》

「あれは何発いける？」

《二回が限界でしょう。三回目は何が発生するか不明の為、危険と判断します》

「上等！それじゃあ、付き合って貰うぞ！」

《綺麗に咲かせてください死の花を》

上空に魔法壁を展開、そこへ四季王を突き刺す。これで、魔法壁が消えるまで魔法無効化の雪が降るだろう。羽衣を闇と光の巨剣へと変え、自由落下でスピードを上げていく。目指す場所は一点、仲間達が攻めきれない敵のだ真ん中、千人長らしき人物付近、レジュグリアスを大上段に振りかぶり更に身体を反らせる。

《あと四秒》

レジュグリアスへ力を溜める。

《四十、あと二秒》

バネの様に筋肉を使い、思いつ切り振り下ろす。

《百、碎神》

千人長を馬ごと叩き斬る。地面に刃が刺さった瞬間、四方に亀裂が走った。

《「ヴォルカニック」》

掛け声とともに亀裂から炎の奔流が噴き出す。奔流に巻き込まれた兵士達は地面をのたうちまわるが身体に灯った青い炎は消える事なくその身を焼き焦がす。そこには恭介を中心として直径十数mの黒い円が出来上がっていた。

突然の出来事に敵味方共に一瞬呆然としたが、アカーシャ側の怒号を発しながら突っ込んで来る姿で我に帰った。が時既に遅く、形勢は巻き返しつつある。

三国軍　今回はレアルだが、前線指揮官を早々に潰され指揮系統が混乱した事、魔法に頼りすぎた事、尚且つ攻める時期を読み間違えた事が敗因と言えるだろう。

《八十》

尚も形勢逆転を狙って奮闘するレアル軍の中央でレアスの無機質な声が響く。

《百、覇神》

レジュグリアスを逆手に持ち地面へ突き刺す。

《「アブソリュート・ゼロ」》

逃げようとする兵士達の足を氷の杭が貫く。地面を血で赤く染め上げるも、その血まで凍らせ華を咲かせる。レアルの背後には海原が広がっており、浜には大型の運搬船が停泊している。全員がその数隻の船へと集まって行っている。氷に捕われた仲間を見捨てて…だが一人仲間を救う為に剣の柄頭で必死に氷を割ろうとしている。

その姿をじっと見ていた恭介だったが、周りに聞こえない程度

の溜息の後、指を鳴らした。捕われていた兵士達はポカーンとしたが足の氷の華が消えている事に気付いた。

「早く行け。死にたくないんだろっ？」

「ヒッ……」

逃げて行く兵士を惘然と見送ると巨剣が女の姿になる。その場でグツと背伸びをすると恭介の方を見て溜息をついた。溜息を吐かれて恭介はむすつとしたが報告を受ける。

《自軍の被害は軽微です。ですが、貯蓄の残り数量に不安を覚えま
す。ですので食料調達及び武器の調達を優先すべきです》

「分かった。全員聞こえる？」

『おおおおお！！！！』

「よし。レアスの言うとおりこちらにはバックが居ないのは分か
てると思うけど、そうすると備蓄がなくなります。なので、魚人の
みんなは魚を。獣人及びエルフをはじめとする精霊族のみんなは森
の中から食べれる物の調達！いい？私は武器の調達に行くから、じ
ゃあ解散！」

声をかけると共に、亜矢が黒衣を翻し女の元へと走ってきた。

「恭介、少しいい？」

「どうかした？」

「あたしも同行していいかな？」

「別にいいけど……来てどうするの？」

「いや……まあ、社会見学みたいな感じ」

「この情勢下で呑気なことですか。対魔法隊長殿？」

「その肩書きやめてくんない？厨二っぽい」

「それが厨二だったら『黒銀の鬼神』だの『血濡れの悪魔』はどう

なるのさ……」

「まあ、それは置いてさ。いい？」

「分かった、分かった。じゃあ行こうか」

亜矢が開かれた魔導書のページを指でトンと叩くと二人の足元に魔法陣が現れた。二人を包むように輝くと次の瞬間には二人はその場から消えていた。

「それで？どこに調達しに行くの？」

「ああ、あそこ」

恭介の指さす先にあつた物はどう見たって洞窟だった。完璧な程に洞窟、どこから見ても……そこへ向かつてどんどん進んで行く。その後ろを不安そーについて行く亜矢は次の瞬間には自らの目を疑った。恭介が洞窟の入り口に差し掛かった途端、姿が消えた。亜矢はギョツとしたが何もない空間から首をひょっこり出して恭介が急かすとおっかなびっくり入ってきた。

「す……」

「だろっ？しかもここをやってるヒトがヒトだからな」

「いらっしやいませ。本日は何をお探しで」

無表情でさらに平坦な声のコンボをくらって亜矢は眉間を押さえた。茶色い髪を短く刈り込み髭を生やした厳つい大男がドレスを着て鈴の音のような声で喋ったら誰だって驚くだろう。恭介自身も一番最初にここへ訪れた時は目が点になった。

「いつものを頼むよ」

「畏まりました。前回ご注文頂いた物が出来ておりますのでどうなされますか」

「あゝ、もう完成したんだ。じゃあ、それも受け取るよ」

「では、少々お待ちしやがってください」

「うん」

笑顔で頷く恭介と口元が若干引きつっている亜矢。それを見た恭介は店の奥へと声をかけた。

「店長ー！また口調おかしくなってるよー」

「うつさい！こちら忙しいんだ！今やってる仕事は全部あんたのなんだからね」

「そりゃありがたいけどさー。そのうちの子出てきちゃうよ？」

「それはいやだね……ほら、頼まれてたものだよ」

「サンキュ、じゃあ入れて帰るね」

「おう、また来な」

奥のドアから出てきたのはぶかぶかの帽子を被った少女だった。片手にはトランク、その容姿を見て亜矢はぼそりと零した。

「子供？」

「誰がなんだって？」

「あ、いやこれで失礼するね。行こう亜矢」

「うえ？わつとつとつと」

店から亜矢を引っ張りだす。あそこにこれ以上居たら確実に店長からのお説教を頂けるからだ。ちなみに店長はもう大人で絶賛恋人募集中だったりする。

「さてと、レアス」

《なんでしょう》

「これに入れてくれ」

《本当にやるんですか？》

「もちろん」

《分かりました。ではお二人ともこちらを見ないでくださいね》

恭介と亜矢が背を向けると同時に後ろから生々しい音が聞こえてくるのを冷や汗を滝の様に流しながら待っていた。しばらくすると音が止み肌が艶々したレアスが呼びかけた。

「恭介、あたし気持ち悪い」

「気持ち分かるが少し待ってくれ」

《完璧な出来です。期待しててください》

「パンドラ、起きろ」

恭介が言っているとトランクは輝きだした。

魔狼VS鬼神・秘密の会議

少しずつ光が収まってくるとそこには薄い金色の髪をした女が居た。大きな瞳をパチツと開き周りキョロキョロと見始めた。その視線が恭介を見つけるとにはあと笑って恭介に飛びついた。

「うを!？」

《すいません。精神年齢の設定を間違えました》

《お兄ちゃん!》

「……え〜と、パンドラはいくつかな？」

《ん〜と、一つ二つ三つ…これ!」

「片手だ!と」

恭介に向けて見せた手はパー、要するに5歳。驚愕している恭介をみて無邪気に小首を傾げていた。

「見た目は大人、中身は子供……達悪いね」

「笑い事じゃないだろ。おい」

《パンドラはね!お兄ちゃんの事大好き!》

「レアス!」

《申し訳ないです…》

「H A H A H A…H A H A…」

乾いた笑い声を漏らす恭介に頬擦りするパンドラと、それを笑えていない笑顔で見つめる亜矢、もう慌てた様子で謝り続けるレアス。三者三様ならぬ四者四様の様子だったが、一人　いや、一匹の乱入者によって状況が変わった。

気配のした方向を恭介が睨むとそこにはあのヴェオウルフのカイザーと同じ気配があた。

「ほら、さつさと出てこい。さつきからそこに居るのは分かってるんだ」

「流石、血濡れの悪魔の異名を持つだけあるな。初めましてだな、俺はカイザー」

「見ての通りヴェオウルフ……ってか？」

「一発で見抜くとはな……精々俺を楽しませてくれよ？」

「亜矢！パンドラ！逃げろ！」

《これを！》

「おう」

投げられたレジュグリアスを右手で引っ掴み上段に構える。しかし、カイザーは武器を握ろうとはせずに余裕綽々の態度で恭介に話しかけてきた。

「俺は戦うために来たのではない。お前をスカウトしに来ただけだ」

「スカウト？」

「ああ、お前の才能をここで殺してしまうのは惜しい話だ。どうだ？こちら側に着く気はないか？」

「断る。お前らのやり方に賛同出来ないし、お前自体が嫌いだし……な！」

言い切るや否やレジュグリアスで斬りかかった。が、振り下ろされたレジュグリアスを籠手で受け流し左手に出現させた漆黒の大剣で斬り上げを蹴りで逸らして、更に後ろ回し蹴りをする。それに反応出来なかったカイザーの胸のアーマーとブーツの踵がぶつかり甲高い音が響く。その反動で飛び退くと恭介の居た場所に漆黒の大剣が振り下ろされる。

二人の間に静寂が訪れたが、二人はピクリとも動かない。次第に両者の距離がジリジリと縮まって行き 互いの剣が火花を散らし

て衝突した。

「お前…まさか…！」

「はっ、こいつを見て思い出せねえか？仇を取らせて貰うぞ…！」

レジュグリアスと漆黒の大剣の衝突している点をわざとずらし漆黒の大剣の面を滑らせながら斬り上げる。それをかわしたカイザーがガラ空きの胴を狙って横薙ぎに振るおうとした瞬間、レジュグリアスを消し四季王を出現させた。

「四季王 紅葉^{もみじ}」

「！？」

カイザーと恭介を中心に紅く光りながら欠片がはらりはらりと宙を舞う。欠片がカイザーの漆黒のフルアーマーに当たるたびに火花と鎧の破片が飛び散っていた。距離を取っている両者の得物は、カイザーが漆黒の大剣。それに対し恭介は四季王とその鞘。カイザーは恭介の持つ四季王の鞘を厄介に感じていた。強度的に言えば四季王の刀身くらいは折る気だった。しかし、そこで邪魔になったのはその鞘だったカイザーの斬撃をいとも簡単に傷一つ付けられずに全て防ぎきるのだ。カイザーからすればめんどくさい事この上ないだろう。

鞘と四季王を巧みに使い、徐々にカイザーを追い詰めた。カイザーの全身を覆っていた鎧が所々碎けて素肌が見くる。

「そろそろ、終わらせてやる」

「くっ…」

鞘を放り投げ消えると同時に手の中にレジュグリアスが出現した。そのレジュグリアスを逆手に持ち腰を低く構える。そしてレジュグ

リアスと四季王を重ねた、するとゆらりと輪郭が歪むと共にレジュグリアスと同サイズの野太刀になっていた。レジュグリアスにあった金色の宝珠は野太刀の柄頭の部分に存在し鐔には黒と白の宝珠が芸術品の様な雰囲気醸し出していた。しかし、淡い紅の刀身によって武器としての禍々しさを発している。その刀身が徐々に赤みを増していく。淡い紅から深紅へと

「遺言か何かあるか？」

「貴様もしや」

「ん、多分お前の思っている通りだ。言い残す事はそれだけか？」

「ふん、俺は死なんぞ」

「いんや、ここで幕引きだ」

そこで野太刀を肩に担ぐ。

「神魔刀・炎魔」

その名を呼ぶとそれに反応して刀身から陽炎がゆらゆらと立つ。そのまま神魔刀の刃先を地面へ向け走り出す。徐々に近づく恭介に対しカイザーも漆黒の大剣を構えると大剣を真横へと薙いだ。

その斬撃を深くしゃがみ込みかわす。右足を前に踏み込み神速の如き速さで野太刀を逆袈裟切りに振るった。熱せられた刀身により、カイザーの着込んでいた鎧が溶けいとも容易くカイザーに一太刀浴びせた。

神魔刀を振り抜くとぴしゃっと血が宙を舞う。しばし静寂が周りを包んだ。神魔刀を振るい刃に付着していた血を払うとレジュグリアスと四季王に分かれた。地面に転がったカイザーに目もくれずカイザーの持っていた漆黒の大剣をパンドラに渡した。

《????》

「袖にしまっただよ」

《ん……出来たっ！》

「それじゃあ、帰るか」

「ま、待て……」

「なんだ？まだ何か用か？」

「なぜ、トドメを刺さない？」

「気が進まんだだけだ。それにお前の主に報告して貰わないとな。俺の事を」

「ふっ……ここでトドメを刺さなかった事を後悔させてやろう……」

「勝手に言ってる。亜矢」

「魔法陣？なら、準備出来てるよー」

「じゃあ、戻るか」

と言つて神魔刀・炎魔を魔法陣にサクツと突き刺した。そして刺したら魔法陣の輝きがドンドンと失せていく

「え？何をやってくれちゃってんの！？」

「いや、魔法陣をいつでも使えるようにと思つてさ」

神魔刀へと視線を移してみると呪文がびっしりと書いてある鞘に納められていた。そのまま地面をトンと突くと勢いよく魔法陣が展開された。

調子が良さそうなのを確認した恭介はうんうんと頷くと、呆気にと取られている亜矢を魔法陣の上に乗せ、はしゃいでいたパンドラと一緒に乗ると姿を消した。

薄暗い部屋の中で目を閉じていた老人がゆっくりと目を開いた。右に置いてあった緋色のゴブレットに亀裂が出来ておりそれを見て

老人はつまらなさそうに溜息を吐いた。

「……カイザーがやられたか。ヴァイシャ」

「なんででしょう」

「そろそろ、北の連中が攻めてくるだろう。カイザーが向こうでやられた時点で敵の大將は例の小僧だ。いや、小娘と言ったほうが良いか？」

「峰治秋……」

「そうだ。しかしだ、お前の元に居た時よりも強くなっているだろう。なにせ、ヤツは“壊れた神”に憑かれているからな」

「“壊れた神”……ですか」

「お前はアルカディアの神話を知っているか？」

「はあ、詳しくは知りませんが有名どころならば」

「創生の話があるが、実はあれには続きがあるのだよ」

老人の言葉にヴァイシャは聞き入ろうとしたが、その前に老人に腰でも掛けると言われ傍にあつたイスに腰かけた。

「最高神がこの世界を創り上げたのは神話の通りなのだ。その後の話　と言うよりも真実の話をしよう」

「真実……では、神話は偽りだと？」

「いや、真実であり偽りでもある。そもそも、表舞台に居る神は偽りだ」

「ゼウスがですか？」

「あれはヒトを管理するために創られた神造の偽りの神だ。神造の神：神である事に違いはないが、唯一違うところ　欠陥がある」

テーブルに置いてあつた水で喉を潤すと老人は尚も続けた。

「それはヒトを好いてしまう。“愛”を知っている所だ。そしてな

により原初の神々は三柱だ。今の様に十ちよつとも居ない。

そしてその三柱は最高位にリバライアス、第二位にレジュグリアス、そして第三位にルヴィアスだった。リバライアスは世界と偽りの神を、レジュグリアスはヒトと精霊を、ルヴィアスは他の魔物達を創り出し表舞台から姿を消した。

そして、“壊れた神”と呼ばれているのは第二位のレジュグリアスだ。レジュグリアスは戦神、母神と呼ばれており、何故か原初の神ながら“愛”と言う概念を持っている。故に壊れた神と呼ばれているのだ」

「その神をどうにかすればなんとかなりそうだと思うのですが」

「無理だな。達が悪いものかもう一つ憑いてる。が、それは不明だ」

「その不確定要素さえどうにか出来れば……」

「まあ、そうだろうな」

無然とした態度を崩さずに老人は言う。そして薄暗かった部屋は闇へと吞まれた。

魔狼VS鬼神・秘密の会議（後書き）

なんと言いますか。

ひどいですね（汗）話の内容が

K o t o y u k i M a s t D i e (前書き)

サブタイに特に理由はないです。

ちなみに今回シーンはないですけど、エロあるのでご注意を

この作品は健全な作品です。そんなピ とかピ な
シーンはありません。

Kotoyuki Mast Die

根城に非戦闘民と守備兵を残し恭介達は海岸線に来ていた。大きな船を目の前にして恭介はすごい呆れ顔になっていた。この大きな船は漁師達のロマンがこれでもかと言うほど感じられる超大作と変貌していた。

「いやまあ、好きに作っていいって言ったけどさ。これはどうよ……」

舳先には龍の頭を模した飾り、帆にはどう見たって骸骨にしか見えないシルエツト。驚くほど海賊船だった。

すでに各自持ち場へ着いており、エルフ達弓の名手達は甲板上の端を陣取り、翼のある鳥人はデッキで待機していたり偵察に出ていたりする。魚人達は船のスピードを出すために船の底付近に棒をくっ付ける作業に勤しんでいた。

「おう、やつと来たか」

「出たな。変態野郎」

「変態野郎は酷いな。それで、どうするんだ？これから」

「黒幕を潰しに行く」

「それだけか？」

「それだけだ。黒幕を潰せば止まるだろうからな」

恭介はニヤツと笑うと琴雪の肩を小突く。

「戦闘では期待してるぜ？」

「おう。けれど、その前にお前の部屋で話がしたい。いいか？」

「いいけど、なんだ？」

「いや…今後の事でな」

「分かった。クウ、亜矢、パンドラ。ちょっと行ってくる」

「うん！いつてらっしゃい！」

二人で並んで船の中へと入ると外見に反して内装の方は意外と良い物だった。他の所よりも少ししっかりしたドアをくぐると綺麗な部屋だった。へえ、と少し満足そうに笑う恭介を見て琴雪はクスリと笑った。

「なんだよ？悪いか？」

「いや、少し意外だな」

「そうか？それで、何の話なんだ？」

「ああ、俺はどこにつけばいいんだ？」

「ああ、そういうことか。それなら、そうだな。得意なレンジは？」

「近距離から中距離は出来る」

「魔法は？」

「牽制程度なら」

「なら、亜矢達の前衛にまわってくれ。あそこは、基本遠距離・中距離だけなんだ」

部屋の中の温度は外気よりも少し暑く、自然と恭介は襟元をゆるくした。これも男の性で緩んだ胸元から見える谷間へと琴雪の視線がチラチラと行くが元男である恭介は気付くはずもなく話は進んでいった。

そのころ、クウ達は甲板で作業をしていた。

「ねえ、亜矢」

「ん？どーかしたー？」

「これ書くの手伝ってくれない？」

「わっ、なにこれ、クウが設計したの？」

「えっと、家の地下にあった文献の物を模写してきたの。どうも、名無しは単騎で突撃するつもりみたいだから、念の為に秘密兵器として用意しておこうかと思って」

「あゝ、だろうね。そんな性格だもん。自分に出来そうな事は全部背負い込むタイプだし」

「よく知ってるわね。もしかして知り合い？」

「まあね。恭……名無しとはちよつと前から顔見知りで」

「恭？」

聞き返してきたクウの表情を見て亜矢はしまったなあ、なんて思ったが、もうどうしようもなかった。恭介からは名前の事を口止めされていなかったし、パンドラなんかいつポロッと喋ってもおかしくなかった。けれども、問題は喋ってしまった相手だ。クウは結構恭介に好意を懷いている。そんな彼女が知らない事を新参者の、しかも恭介が会つてすぐに名前を呼んだ人物が知っていたらどうだろうか？まあ、要するにクウは現在、嫉妬している。

「亜矢、恭って何？名無しの事？ねえ、どういう事？」

「あは、あはははは……な、なんのことだろうね？」

「どういうこと？」

「それは本人に聞いてみてよ。あたしの口からは言えないねえ」

あいまいに笑って誤魔化す亜矢にジト目で抗議するクウ。そんな行為さえもどこ吹く風、出来るだけ話題を逸らすために琴雪の話振ってみた。

「あのさー、琴雪なんの話なんだろうねー？」

「ん？さあ？あれじゃない。俺の活躍する姿を見ろーとか」
「ださっ」

「まあ、これが終わったら見に行ってみない？」

「パンドラも行くー」

「そうだねー、これ終わったら行こうねー」

なんてのほほんと大型儀式魔術を甲板へと書きこんでいった。

＊＊二時間後＊＊

琴雪とその他男三名がパンツ一丁で廊下に正座させられていた。彼らの前で顔を赤く上気させ艶っぽくなっている恭介が仁王立ちしていた。艶っぽいが怒り心頭のご様子だ。くわばらくわばら

「懺悔タイム。さてさて、どう説明するんだ？」

「……あんたが誘ったんじゃないか……」

「ああん！？男が言い訳するのか！？」

「……すいません……」

そんなお怒りの恭介の元へクウ達が来たのは10分程経ってから
の事である。彼女達が初めに見たのは顔をボコボコに腫らした琴雪
達男三名と拳を赤く染めて少しガニ股気味

「な、名無し？」

「なんだ？」

「なんでガニ股？」

「女になっちゃった」

「……………」

それを聞いた途端、クウが物凄い笑みを浮かべて男三人を見つめ

た。その様子を見た恭介は、俺が手を下すまでもねえなと思ったように自らに治癒を施すとパンドラと亜矢を連れてその場を後にした。理由としてはめんどくさいのと二人の教育上悪いからである。最後に男三人へ恭介は笑顔でこう言った。

「そうそう、お前ら三人は本日付で特攻部隊な。もちろん、隊長は琴雪、部隊の総人数はお前らだけ。良かったな。手柄が増えるぜ?」

そして去っていった。その場に残った男三人とクウの間にちょっとした静寂、更にニコツと笑ったクウは死刑宣告をした。

「それじゃあ、お仕置きを始めましょうか?」

悲鳴が響き渡ったのはそれからすぐだった。

Kotoyuki Mast Die (後書き)

ちなみに第二章の序盤に言うのもなんですが、この作品、第三章まであります。

ふう、長い長い。終わり方は決まっていんですけどね。^^;

漆黒の咆哮

物凄いスピードで波を割りながら進む船があった。舳先にある龍の頭の上に片足を乗っけてエデンからパクツてきたグングニルを振りまわしている女の姿があった。無論の事そんな事をやっているのは恭介だ。いつも通りの深いスリット入りのスカートと締め上げブーツ、漆黒のホットパンツ&ロングコートその下には、なぜかいつもと違う少女趣味溢れるフリル物だった。それを見られたくない為かコートの前が閉じていた。

そのうち、恭介の周りに他のヒト達が集まりだした。呼びだしたのは恭介自身だ。もっともこれからやる事は下手すると士気が下がりがねない。

「さて、みんなに集まって貰ったのはちょっと言いたい事があってね」

振りまわしていたグングニルで甲板をドンツ！と立てると優しそうな目から鋭い獣的な目になり、にんまり笑って言い放った。

「いいか！野郎共！これまで『名無し』って名乗っていたが、俺の名は恭介だ！これまでは言えない理由があったがこれからは関係ねえ！」

「うおーー！！」

「そこでだ。まずは向こうの大陸の北東部にあるレアルに殴り込みをかける。いいか？あいつらは魔法を主軸に戦ってくる。だからキャンセラーを張るがそれだって完全じゃねえ。だから、こいつを作った」

ガラガラガラッ！！

金属同士がぶつかり合う音を立てて転がり出たのは両刃の剣、鐔の部分には半透明の紅い宝珠。恭介自身がレジュグリアスの力を活用して作られた準神器“フェンリル”特殊な能力としてはマジックキャンセラー及び獣人しか使用できないよう設定してある。それを各々が持ち上げ始める中、恭介はククルスの元へと歩いて行った。

「ククルス、ちょっといいか？」

「なんですの？」

「レヴァーテンをくれないか？」

「申し訳ありません。恭介様の頼み事でもそれは流石に無理ですわ」

「この紅龍を代わりに用意したんだが、ダメか？」

「ッ！？」

恭介が取り出した刀を見てククルスの尻尾が左右に千切れんばかりに振られる。目も爛々と輝いていたが、ハツとするとわざとらしく咳をして慚然とした態度になった。そんな彼女の様子を見て恭介は素直じゃないなあ、なんて思いながらもう一押ししてみることにした。

「ククルスなら受け入れてくれると思っていたんだがな……」

「わ、分かりましたわ。どうぞ」

「サンキュ」

渡されたレヴァーテンの代わりに金の装飾が施された刀を渡す。渡された紅龍を鞘からスラリと抜くと日の光を浴びて輝く紅い刀身があった。魔力を流していない状態でもその刀身からは陽炎が揺らいでいた。炎の化身とも言えるような代物にククルスの瞳は自然と楽しげな物となっていた。

刃を鞘にしまうとレヴァーテンを渡した恭介の方を見る。彼はい

つの間にか取り出した神魔刀・炎魔とレヴァーテンを合わせていた。パツと二振りの魔刀が輝くとレヴァーテンはなく少し装飾が変貌した神魔刀があるだけだった。

「さてと、来たな……」

「え？」

「頭あ！！前方から光が！！」

「だろうねえ……よつと」

一瞬で海面に着地すると右腕を前方へ構える。すると五重に呪文が書かれた魔法陣が展開される。が、悲鳴の様な咆哮をあげる黒い光が接触した瞬間、恭介は目を見張る結果となる。魔法陣の端がロボ口と崩れ始めたのだ。

「チツ……なんつーもん使いやがんだよ。おい」

目を鋭く細めると魔法陣の外側に呪文が追記されていく。ある程度まで書き込むと圧縮、更に書き込み圧縮を行い、現在は読むのが億劫になるほどびっしりと呪文の書かれた代物になっていた。一端っこの呪文でさえ単行本の文字サイズである。しかも船をも凌ぐサイズでだ。

「ハッ……この程度か」

光が消えると同時に魔法陣を消滅させると左手に持っていたグングニルを右手に持ち換え投擲する体勢となる。グングニルの表面に魔術式を張り固めると同時に左手に出現するのは見た目が凄く貧相な槍。見た目と性能は比例しないいい例であるロンギヌスだ。

ロンギヌスへも魔術式を張り巡らせると同時にグングニルを投擲した。うなりをあげ飛んで行くグングニルの後を追うようにロンギ

又スを投げる。船の上へ戻ると大声で鳥人に呼びかけた。

「ロープで自分の身体を固定してから帆に向かって風を送ってくれ！速度を上げるぞ！亜矢！魔術で風を！」

「分かった！ナンナ、やるよー」

（あいな。暇していたんじゃ。少々本気を出させてもらおうかのう）

ひょいと亜矢の肩の上に飛び乗ると突風が吹き船の速度が徐々に上がっていく。ある程度勢いに乗ると魚人も船に載せ風の勢いが増す。また正面から黒い光が来てもいいように舳先に立っている。その後ろには光を解析するため亜矢とナンナが備えている。

数分経つと恭介の視線が鋭くなった。前方から光点が近づいてくる。

「亜矢とナンナ、解析の方は頼んだぜ？」

「まかせなさい」

（心配するでない。曲がりなりにも神なんじゃ）

「応、分かってるよ」

黒い光との距離が後10mのところまで恭介は無詠唱で幾重にも呪文の刻まれた魔方陣を展開する。甲高い音と共に衝突するが、船のスピードは変わらず突き進む。黒い光は先ほどよりも威力を増していたのか。魔法陣と対消滅をした。恭介の後で解析をしていた亜矢の方を振り向くと亜矢の顔は真っ青になっていた。

「うそ……」

「？ どうした？」

「あの光で5人、さっきので3人」

「だから、なんだよ？分かるように言ってくれ！！」

「……生贄を使って撃ってるよ。あれ」

亜矢の言葉に恭介は奥歯をぎりぎりとうめらす。殺気の籠った瞳でレアルのある方角を睨みつけた。両手にはいつの間にか投じたはずの神槍が二本が握られている。グングニルとロンギヌスを左手に持つと右手に神魔刀を出現させる。すらりと抜き放ち二本の神槍を神魔の刃に突き立てた。溶けるように混ざり合いそれは姿を現した。禍々しくも神々しい光を放つ、神魔の刀の新たな力。

「神と魔の相対する力が合わさるとどうなると思う？」

「反発しあって無に帰る？」

「いいや、神をも凌駕する力になる。俺の仲間に害なす者くらいは屠るさ」

怒り心頭の様子で呟く恭介は亜矢からレアルへと視線を戻す。

次第に大陸の裾がお目見えした。大きな口を開けた黒塊がある、その下にはあまりにも質素な服を着た男女が十数名と鎧を着込んだ兵士が5名が立っていた。奴隷のような男女の周りの魔法陣が深紅に光り出す。

勝負は一瞬、生命力を吸いだそうとした瞬間に神魔の槍で黒塊を穿つ。それだけだ。

構えた恭介の瞳は虹色の色彩を放っていた。

密談と決意

「言霊付与」

ほうつと神魔の槍に火が燈る。

「魔術消去、炎並び氷魔法付与、発動タイミングは0・5、瞬間冷凍後炎で加熱。奴隷には回復魔法を譲渡」

その火は言葉を唱えると共に炎へと姿を変え、最終的に光り輝きだした。

「神魔刀・槍　海妖！」

その光は槍の形を模り黒塊へと風を唸らせ肉薄して行く。衝突キンツと音を立てて薄い水色が黒塊を覆う。そして刹那、紅蓮の業火がそれを襲うと共に黒塊が悲鳴をあげ砕け散った。砕け散る黒塊の破片と共に淡い緑色の光が奴隷に降り注ぐ。

「全員！上陸準備！こっからはずっと陸路だ。レアルを攻略後、そのまま南下しユーランドへと攻め込む。一般人に手を出すな！俺達の敵は誰だ！？武器を持つ者達だ！それを間違えるな！いいな！？」

『おおおおおお！！！！』

砂煙を盛大にまき散らし船が浜に乗り上げる。

その勢いのまま飛び降りると槍となった神魔の刀を一振りし刀へと姿を変えさせる。彼の後に獣人達がぞくぞくと続き、それは恭介を軸として扇状に広がり、異様な光景へと歩みを進めていく。

それはそこに広がっていた。

それはそこで蠢いていた。

それは狂気に満ちた瞳で彼らを見つめていた。

それは悲鳴の様な呪語をかすかな音量で訴えかける。

それらは脈動する体を振りまわしながら虹色の瞳を見つめ返した。

彼は神魔の刀に気を籠め真一文字に振るった。三日月の形をした剣圧は鋭く洗練とした。業物のような刃となり、それらを襲った。

断末魔があがる。気味の悪い液体が舞い散り草原を藍に染める。

「来れる奴だけ来い！」

後続の男に言い捨てる。神魔刀を下段に構え、その集まりへと駆け下りる。近づくほどに小さく不明慮だった呪語ははつきりと耳に届くようになった。

「助ケテ…」

「モウ殺シテ…コンナ姿ハ嫌ダ」

「死ニタイ…悔シイ…楽ニナリタイ」

「承知した。安らかに眠ってくれ」

不意に神魔の刀を地面へと突き刺し、指先を切り振るう。赤い血が舞い地に斑点を生みだす。その紅の中心は神魔の刀、鼓動の様に明滅している。その柄　そこにある宝珠へと一滴血を滴らせる。何事もなかったように宝珠にその鮮血は沁み渡る。

「さあ、君達の望むモノはその門の先にある。^{ゲート}血の門。紅蓮の門。死の向こう。魂の楽園へ」

神魔の刀を中心に門が現れた。白亜に深紅のライン、門を飾るは女神の彫刻、美しくも荘厳な門へとそれらは吸い寄せられるように

動き出した。

それらの口から煌めきが門へと流れる。

「穢れは除去しないとなあ？」

それは煌めきが抜けると共に一つに合わさり化け物となる。大きな爪の巨体。赤黒くギラつく瞳。

「ここを通してもらおうかね？」

神魔刀を引き抜き切っ先を向け浅く腰を落とす。グツと力を入れそれに向かい飛び出す。それが振り下ろす爪をくるりと避け、その腕へ刃を走らせる。藍色の血が飛び散るなか腕を駆け上る。

「パンドラ！あの黒い剣出せ！」

「えっと……これ？」

袖に手を入れて漁ると物理的に無理なサイズの大剣を取り出すと、どうすればいい？と言った感じで首を傾げた。恭介は神魔の刀で空間を切り裂き繋げ、黒い大剣を受け取ると地へ着地した。

「さてと、これはこんなことが出来るんだぜ？」

黒大剣に手を添え、

「ブレスト ジークフリート
昇華、英雄の鎧」

黒大剣が粒子となって霧散し、恭介の手足に纏わり形を構築していく。漆黒の籠手と具足が完全に出現すると右腕をコンパクトに折りたたみ左を前にした半身に構える。

大地に藍の液を垂らしながら恭介の元へと歩みを進める。恭介との距離があと少しで触れられる距離に入ったと同時に恭介が動いた。右足を踏み込み、腹へ右拳をぶち込む。そのまま空へと打ち上げると踵落としを一発入れ、身体を捻り蹴りを二発打ち込むと、それは地面にめり込んだ。

そのそばへ軽やかに降り立つ。

そこから恭介の一方的な戦いとなっていた。右腕の籠手がその腹を貫いた。

「Show down...」

グツと貫いた拳を握るとそれは内側から爆ぜた。

ボトボトと肉片が降り注ぎ、時間差で藍の液体が降り注いだ。後方から遅れて獣人たちが来た。

「恭介！」

「問題ない。行くぞ！」

ジークフリートが手足から離れ霧散すると南へと行軍を進めた。

時間を少し遡る。船の中で彼らはこそそと会談を進めていた。

「タイミングはどうする？」

「レアルを倒したあたりでいいだろう」

「そうね。あとはその理由だけ」

「それは俺に任せてもらおう。やつの素性が俺の予想通りなら完璧だ」

「可能性としては？」

「8割」

「なら、いいわね」

人数としては4人、男3の女1だ。1人以外は全員腰にフェンリルを差している。彼らはある計画の為に行動していた。その発端は、『王族を殺害した犯人をしっているか?』この一言だった。そして、それについて詳しく話を聞いた結果、彼らは今回の計画を考えたのだ。

すでに外堀は埋まりつつある。ここからは自分が決心するかどうかだ、と彼女は思っていた。一度、瞼を閉じ心を落ち着ける。

これが間違いだったらどうしよう?

これが真実だったらどうしよう?

そんな想いが浮かび上がるが、それを沈め1つの決意のみを固める。絶対に途中で枉げない、と

手で払った薄い水色の髪が、窓から差し込む光を受けてキラリと輝いた。

密談と決意（後書き）

ネタが思いつかない今日この頃（・ ・ ・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0392l/>

恭介くんの数奇な生活

2011年11月30日14時46分発行